

76

280

天眼鈴木力著

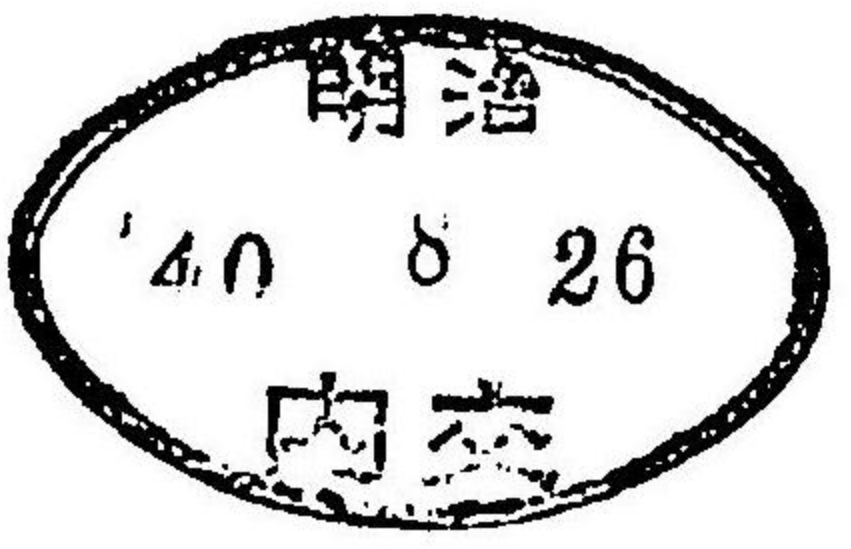
神物人感應如是

76-280



威風堂

錢木天眼著



序

右にロスキ、左にヤンキ、世界の二大雄族から精力の相殺を課せられつゝ。前面は四億支那人てふ厄介物を控ふる日本民族なり。則ち遠からざりし過去に於て。北京の主人問題を争ふ爲めに。百萬の軍を動かし。幾萬の生靈を供して。纔かに南滿の半壁を支へ得たりける間も無く。早く既に太平洋の主人問題は客氣のヤンキを驅りて。平地波瀾の累ヒを我に蒙らしむ。國步艱難、機勢殺到。洵に是れ王者の道、英雄の學、大乘的機根、民族的本能が併せて興奮して。天の日本人を生ずる徒爾ならざる所以に應ずべき秋にして。苟くも皮下一脈の活血有る者は。大陸建國の礎石甫めて二三四五個なる今日の發憤努力が宜しく戦時に倍すべきを深念して。浩然たり凜乎たる氣概は雪上に霜を加ふるもの有る可き筈。

然り而して日本は。斯重大の時機に於て隱憂の色有り。應接と自保と。共に恰かも貰はれて來た牝鶏の如く然り。

然る所以の者は何ぞや。

曰く。此は心理的病症に由來して偶々實境に發露する者のみ。蓋し彼は『明治官僚式』てふ害毒に心靈を蝕されつる也。

明治官僚式とは。上壓下伏の方式也。自治獨行の氣力の仇なり。皮相的智力、皮相的意力の呈露に専らにして、事物を根柢より成遂げる健剛なる精力に孤き、不情にして形勢の粉飾を務め、實際的識力を勢家の都合に葬らしめ、氣骨氣魄を平時に贅視しつゝ、戦時に限りて、官と新聞紙と與に通謀して忠死を煽揚する底の情狀是れ也。巧みに事大主義を蔽ふて不實の名聞を小人に誇り、一門の私榮、個身の顯達を本にして民衆の共存共榮を度外視し、學に『人』てふ條件を容れず、人に『信』てふ常節を約せず、自他相曲從して而して勢力を圓成する外に成功無く尊敬す可き者無しと思ひ倣す魂性は是れ也。武人に阿附して文臣の威嚴を拋棄し、偏へに陛下の御運勢を恃みて治道治術を無視し、手拵への天下泰平を謳歌して、民食缺乏の事態を塗抹し以て人物及び財用の經濟的且つ合法的なるべき様の改革をば百方拒否する習癖是れ也。

凡そ是等の風氣、因習は。日本の生民をして、衷心に深憂を抱きつゝも、時に或は自ら欺きて當座の自衛の爲めに官民一致を促がさしめ、御用的祝賀に参向せしめ、盲從明從の醜議員を生存せしめ、不安なる税法の下に誅求の吏と交讓せしめ、愛女愛童の惡感化を恐れながらも官學に就かしめつゝ在る罪業の根原にして。一括して明治官僚式の害毒と特稱す可き者とす。

この害毒は。恰かも父母より遺傳せる體毒の天真無垢なる小兒を憐ますが如く。世道人心を根柢より蝕して、本具本有の生氣を索盡せしむ。則ち國家が頗る外形に壯んにして却つて國民が内容に萎ふる所

以なり。怪む勿れ。南滿鐵道の株式應募千幾倍てふ狂熱と詐略とは。所謂明治官僚式を表する者にして脩を作る者は上に在り。下は輒ち之を學びて。株式の狂騰と泡沫會社の濫出六億豫算の旨斷とを演じ。其が當然の結果として經濟界の窮迫——財政救済——事業繰延等の陋態を生ずるを怪む勿れ。此は社會上の亂世の門戸たるに過ぎじ。俗権俗力に沈溺して心靈を銷磨しつゝる日本人が。ソノ必至の因果として。生活面、人情面兩つながら險惡酷烈の事境に推移りて。自他共に救ふ能はざるに至らむこと實に今日以後に在り。

救はる可きは。只た靈氣の發動に俟つ。靈氣は明治官僚式の害毒と駢び立たず。政界、學界、風俗界、共に心理的革命を必要とするは。今方には是れ其時也。心理的革命とは即ち心靈の復活にして。世道人心の原機は唯だ是れ而已。

『神物人感應如是』は。普通用語を以て神靈の實驗を語り。顯幽を調和して眼頭に具象せしめ。因りて以て信仰心の喚起——生命問題の解決——世界人類の皆歸を要する無量壽無量福の宣傳——佛教及びキリスト教の神髓を融化する信行の實際的方法——に迄深穿し研到しつゝ。字字、言言、吾人の踏む地上の實境を離るゝ莫く。宗教の極意に伴ふて經綸の格法を説示する者にして。政教共に器械的なる无精神なる維新以來の顛倒を正ふする者は。必ず是れ此一書なりと著者は確信す。著者は自ら之に倚りて救はれたり救はれむことを望む無數の民衆よ。冀はくば火の如き子が熱筆より

不盡の光明を體得せよ。修養に精神を賦與し學界に人格を喚起するの根元力を抱持しつゝ、政治及び産業の心理的革命を命令するの大權威を束帶する本書を爾が有とせよ。爾自ら著者と同化せよ。然る時爾は天地間不可抗の無礙力を心身に生せむなり。

明治四十年七月二十日

天眼 鈴木 力しるす

（長崎市東洋日の出新聞社に於て）

神物人感應如是

目次

- 一、全宇宙の眞生命と天啓的本尊……………一
- 二、無足の龍、有角の蛇〓宗教學……………六
- 三、理の本體〓起信難の明治思潮……………一〇
- 四、靈魂自照の光明境〓日露戰の當事即證……………一九
- 五、人生の絶頂問題と純東洋的意識……………二六
- 六、革命以上の革命〓破天荒の新文明……………三四
- 七、日本海海戰の靈的教訓〓天來的感激の實現……………六〇
- 八、人本尊東郷〓驢事馬事……………七二
- 九、明鏡止水の明哲と事上成佛との別〓二〇三高地を除せし靈數……………八一
- 十、開城如來出現の本末〓靈化せる野菜……………一〇一
- 十一、精進波羅密の解……………一二五

十二、『豫言』の合理的可能——國寶世寶……………一六六

十三、易理易經の神髓——八卦と妙數理……………一四一

十四、如何にして予は神靈を驗證し。日露戰の起伏本末を直指せし豫言を敢てしたる乎……………一七五

十五、成道後の位置——立命の消息一端……………三〇〇

十六、二十世紀軍人の最剛絶其の精神……………三四九

十七、官僚政治打壊と和戰是非の本末（九月十日の我社説）……………三六一

十八、平和克復無上感……………三七七

目次終

神物人感應如是

鈴木天眼著



全宇宙の眞生命と天啓的本尊

全宇宙の眞生命——萬有の元原的神靈——に融一して天啓的言動を能くする者は。物心二境に大白在なることを轉化養生を靈界に引接す。

引接者には釋迦あり基督あり其他にも之あれど。凡そ人間が是等先輩の執れを簡ひて我導師と崇めるにもせよ。その手引さには心身全幅を托して所謂、元原的神靈に接觸する機會を獲むには。其時の彼等の姿は各々大差なからむと予は想定する。

神と云ひ佛と云ひ天と云ふ。等しく全宇宙の眞生命——萬有の元原的神靈——より以上にも以外にも之有る可からず。光の外には明莫し。火と離れて争かで焔有らむ耶。

故に若し人有て。全宇宙の眞生命に歸命頂禮する予を目して神の信者なりと謂はむ。予は。然る乎可なり。我は神の信者なりと首肯はむ。又人有つて。汝は我と同じく佛教徒なりと告げなば、予は亦。

然る乎、可なり、我は佛弟子なりと答へむ。

されど。宿縁の所導にや少小より一ばら日蓮上人の啓示を辿り、上人の心霊を我に感得すべく無量の不退精進を積み、遂に纒かに今日あることを得たる予は。靈覺の徑路若しくは行解の方式に於て我は法華の行者也と自任す。

蓋し釋迦の法門なる者は。多岐多様に過ぎて入道の捷徑を獲難らしむ。是れ釋迦在世當時の印度民衆は婆羅門の極端なる迷信と無量の怪詭的傳説とに惑溺し。所謂ウキマ(韋陀なり自稱神秘最上智識)を尊ぶを知りて自己心霊の妙を顧みざるが爲めに。釋迦は便ち方便を設けて民衆の迷信及び傳説の材料を己れの説法に借用し。時と處と人との随つて手當り次第に。種々の如來やら夥多の菩薩やら天帝やら地獄やら天女やら龍やら夜叉やら般若やら禪やら神通力やらを抽出して。博覽會以て野人を驚かす如くしけるに由れり。されば未顯眞實の四十九年の教化の處。初めて己が本懷たる妙法蓮華經を説きたるにも拘らず。所謂釋迦の本懷たる法華經と雖も。尙ほ材料を假説的と做し譬喩的と做して神秘的感想を多含ならしむるが故に。歸旨直截ならず公明ならず。津筏既に迷津に織して而かも舸子の彼岸を指示せざるにも似たり。嗚呼法華經すら猶且つ斯くの如き也。釋迦の一般教典に就て如何に研究すとも。开は偶々以て當時の印度の時代思想に抑捺さるゝに止まり。釋迦の本旨は依然として隱語の如く咒文の如く蘊張の遊説の如く見ゆるに終り。極めて馬鹿らしき沙汰たらむ。然り而して幸

にして釋迦の死後二千二百二十餘年にして法華經の化身たる日蓮上人は世に出てたり。上人の心霊は釋迦の心霊を代表せり。

予は佛敎を知らず只日蓮を知る。即ち。經論一切を知見しやうと試みず、經論一切の歸旨は妙法蓮華經の五字に約さるゝ啓示の下に我行解を領しつゝ。やがて日蓮は即妙法蓮華經也、妙法蓮華經は即是全宇宙の眞生命也と迄に。人法并せて一如不二の本尊と立て、移る莫く。一身一念の過去現在共に偏へに日蓮所啓の『事上成佛』に集中し凝結す。

『事上成佛』とは什麼の義ぞ。曰く。即身成佛の義は。日蓮の出現以前に於て。支那の天台智者大師、日本の傳教弘法兩大師等既に明かに開示せり。而れども开は尙ほ心界に偏して物界に及ばず。理境又は觀心の上に即身成佛を悟證することを主として。未だ己身即妙法個體即全宇宙の生命因果同時、當身即無量壽佛たる所以を事實上に顯證するに至らず。人間の心霊と當身との間に差別を存し従つて物を心より隔て、更に物心の合成體たる人間をば元原的神靈より隔てたり。されば之をば理上の成佛と謂はまくや。

日蓮所啓の事上成佛は全く之に超絶せり。
日蓮は。三世を現世に踏破せり。因果同時を證せり。
肉を靈に化し當身を全宇宙に同せしめたり。

肉體と心靈と共に融一無二なるの處を個體の身命の本相とし。更に這個身命は元原的神靈即ち妙法
それ自體即ち無量壽本佛なることを事上に證示せり。

日蓮所證の妙法蓮華經は。日蓮生涯の天啓的言動に由りて當事即證の實を成す者にして。今、人法合致
の處を概括して是が神髓を擧ぐれば。

凡ての『存在』は『生命』の垂る、事迹なり。生命無き存在は必ず之無し。生物、現象、人事、理
法、精力、等しく然り。世人が意識する神佛てふ人格的靈體も、又は世人が心靈と自認する意
識それ自體も亦。等しく生命の垂迹の特徵的符號なるに過ぎず。

生命とは。時間及び空間を總括せる『全唯一の實在』に伴ふて凡ての存在に徧滿し。無始にして
無終。無限にして無量。乃ち微妙なる圓融無礙を以て隔相の儘に唯一生命を構成する所の超絶
的元原的神靈が即ち其である。

凡夫の觀て以て人の靈魂、心靈或は生命と爲す所のものは。實は存在の堅相に伴ふ身命たるに
止まりて。宜しく元原的神靈の分化的表徴とも稱すべき者である。

故に凡そ以て存在を徵す可き者は。神と生物と、理法と精力と、人間と事件とを問はず等しく
靈界に於て融一する者にして。その實相たるや。理にも非らず心にも非らず物にも非らず。直
ちに是れ『絶對的唯二の本事』なり。而して該本事が元原的神靈の本體である。無量壽本佛で

ある。この外に生命無し。絶對唯一なる生命而已之有り。二も無く三も亦無し。

是をば唯一乘の妙蓮華經とは讚す。

かるが故に。即身成佛は全唯一の生命てふ事の必然的結果にして。此身が此ま、無量壽本佛の
體用を具有す。

方にこの處の妙法蓮華經に感孚して。之を體得し是と與に事上に終始して。その功徳を實現す
る者を法華の行者と謂ふ。

事上成佛とは即ち。此身が事境の實際に於て佛なるの謂である。

而して日蓮は其身を以て事上成佛の證しと爲せり。

人法乃ち一如也不二也。天啓的本尊正にその處に活現す。

如上の宗旨を予仰ぎ。如上の脚地に予立つ。

讀者よ。此は精髓を摘示するが故に少しく難解の嫌も有らむ。されど予が使用する言語を以て滔々た
る佛教家の常套なる謎的言語に類せりと速諒する勿れ、Xを以てYを解く如き幽怪詭秘の佛教講釋は
予の最も嫌ふ所にして。予は神靈を語ることに恰かも道場師範が武術を講ずるが如くに精明、且つ具象
的なるを期す者である。坐せよ讀者。這般の用意が次章以下多々益々鮮明なるを驗せよ。

一一。無足の龍。有角の蛇——宗教學

六

宗教學は有る神學も禪學もある。而して本格的意義を保つ宗教は今代讀書人の精神に空し。彼等は論ずる而已。研究する而已。信仰てふ者に關して適正なる概念をだに成さずして理上の穿鑿を惟れ競ふ而已。理は理を以て酬ふ可し。相對的の者なり超絶的の者に非らず。故に理に即かば底止する所ある可らず。近世の學者界が人間本有の心靈を後にして心理を尊び智慧の力を先にし。更に智と意との所産たる「理てふ者」即ち所謂眞理や學理やに附け纏ふて。腦を搾り胸を壓し、目を近視と做し口を大家の糟粕に供し。却て得々として我は思想界の長者なりと誇るその狀は。山鳥が自己の姿の脆はしきに見惚れて水中の影を追ひつゝ、竟に溺れ死すてふ陳き譬喩にも似たり。彼等は理の形相に眩みて靈の眞髓を自棄することを本業とする。

僧侶は法相を以て法相を説く。法相とは佛教のテクニク也。術語なり。行けば行くほど術語の箇數を複加して。其が多ければ多いほど解らなく相成るに拘はらず。解らぬなりに多く知るのが當世の教界の先達である。サンスクリットの佛典など誦し得る程の博士は取別け善智識の格を成就する乎の様に我れ人共に思惟するのが今の佛教界である。

釋迦時代の婆羅門、基督を見殺しハリサイの人などの小乘機根は。今も昔と替らで世に満ち。

學識又は章陀の積量を自他に比較して。以て相互の抑揚の標準をば積量の多寡に求め。乃ち智識屋、術語問屋を心界の偶像と爲し、或は組織的物質的方面より宗派の盛衰大小を評價して。會堂伽藍の優一劣、信徒數の或増或減を以て宗門是非のメートルに供する。而して斯かる風潮に和し且つ、同じく靈界と何等の關涉する所無き儘に存在すること。全國六萬の寺院、十萬の圓顛比々として皆是也。

抑々個人の心靈を宇宙の元原的神靈に引接すてふ事を除きては。宗教は其存在の理由の大半を失ふものである。而して當世の佛教家は世俗的倫理或は空想的哲學の範圍に力を致して、以て能事畢れりと爲す者の如く。絶へて心靈界を支配する所以の行解を執る莫し。是に於て。偶々至情より宗教を渴仰する者ありて講話を聽聞し或は參禪を修行しても。未だ曾て神靈の氣を吸ふ所以のインスピレーション。天來的感激に接するの機會とて有らず。到底は無足の龍、有角の蛇、天にも昇らず草にも入らざる怪詭なる長物として佛教を視るに歸し。以爲らく「悟り」とは獨斷的空想的別稱のみ。捉へ得ざる所が即ち佛教の價値歟と。遂に世道人心の支柱たる可き心靈の本尊と絶縁し去る。嗚呼お寺とさうして坊さま!! 死骸收容の營業としては社會に於ける尊榮が高さに過ぎたり。彼等は人に一牛を得て人に一馬を與へつゝ在り。

中に就て最も厄介なるは。禪僧及び禪學の徒である。禪家は機を尙び氣を練る。故に武術家兵學者或は他の事功者には氣膽識量の涵養上、太だ効益を呈すること疑無し。而れども开は衛生學が肉

體を養ふが如くに禪は精力を養ふと云ふに過ぎじ。精力は人間に於て貴ぶ可しと雖ども。亦只た力たる而已。要するに成敗是非の範圍の用而已。若し夫の電氣力や下瀨火藥杯の功用偉力が絶大にして優に世相を左右することを觀取し。而して之を禪の寄與する所に比せむに。勢力と精力との差こそあれ。その力たる所以に於て。前者は世界の局面に繋り。後者が僅かに人間同志の氣合を制するに止まることを思へば。九年面壁の効果も亦頗る惘然の沙汰ならず哉。記憶せよ。卓越せる力士の角力は起ち上がりより決勝に至るまで唯だ自他精力の乗除を演ずる者で。電光石火裏の禪機は土俵の上に滿々たり。只だ禪は心を主とし角力は肉を主とするの相異を見るのみにて。精力學たる所以は二者相同じ。則ち風袋を除きて精力の貫目を秤らば。當時流行つ兒の鎌倉圓覺寺和尚杯は。角力道の藤見嶽列と相距ること果して幾ばくぞ。

蓋し禪家は。公案を課し問答を檢して學徒の自力的悟證を奨めるが故に。只管に我佛を禮拜せよと説く宗派とは趣構を異にし信仰をば別途に置きつゝ入門し得るのと。難澁ながらも古勁警拔なる文句を開答の材料に提示されて、神會默解の機を獲たらむ時の趣味は多大なるのと。此二箇の原因から士林は禪を歡迎するので有らう。果して然らば此は禪を宗教視せずして或種の學問視する者で。禪家も亦之を自認するに至りては。是れ此種の佛教徒は外道の屬である。宗教には個人の心靈を集中する信仰の標的無かる可からず。信仰の標的とは即ち本尊なり。本尊無き宗派は元原的神靈を拒否する

に均し矣。心靈てふ事を抜き去りては宗教の骨子亡ぶ。

趣味は趣味を以て換へ得可し。五管に屬する天然若しくは人工の趣味も文學或は坐禪の趣味も。等しく是れ煩惱の對象なり、情若しくは意の愛著相手なり。縱令ひ趣味に由りて大悟徹底の箇處に達する日ありとも。开は心の道伴れが進化せりてふ謂に過ぎじ。決して我心靈を元原的神靈に攝收する所以には非ず。美人の明眸に牽かれ花雲の駘蕩に酔ふソノ趣味も。公案に徹底して心機パツと開けたる時のソノ趣味も。相手異れど主は異らず。

『蛟龍は死水に鑑みず』と云ふ活潑潑地の禪句が有る。龍は靈動の生物にて自ら雲雨を喚起し宇宙に飛騰する性質の者たれば手近き邊りに池沼の水在りとして其を眼中に置かず従つて自己の姿をば死水の水鏡に寫すを屑とせずとの意ならむ。鷹は飢えても穂を摘すより字面に活意饒し。禪學の徒若し理上の悟證に局せずして向上の勇猛力を無盡ならしめなば。既に獲たる悟證の妙を感ずるにつけ却つて我心靈の甚深微妙を感得し。而して我心靈の元原は全宇宙の眞生命に歸着すと信解し。即ち本尊をこゝに發見して其に歸命頂禮する等。而して爾る時こそ。心身は宇宙の神靈と合體して。蛟龍が天上に靈動するが如き事境を確有す可きなるに。哀む可き哉。末世の比丘は心詔曲にして未だ得ざるを得たりと惟ふが故に佛法の形骸を守りて自ら高しとし。信仰は愚夫愚婦の事のみとの様に舉動して怪まず。果ては禪の產物として。空閑に孤處して勿體らしき漢字句を口頭に吹き。人生の濟度に何等の補益する

所なくして已むこと。故人の鳥尾得庵、未死の渡邊無邊など『死水に鑑みる瀬』を作るに終る。

日蓮上人が四箇の格言を立て。念佛無間、禪天魔、真言亡國、律國賊と喝破せしは。英雄俗の覇業の方便たらむかと俗の讀書人は猜するに似たれど。日蓮は一十萬千の事悉く至情至念の發露を以て一貫せり。時の執權が尊敬しける禪宗をば故意に貶して以て自己の主張に景氣を附ける杯の政治屋的小細工は斷じて無し。事實に於て禪宗は理を主とするが故に心に偏せり。心外無別法ニ教外別傳ニてニ宗旨は心を賣めて心の本來の面目を了々するに止まりて。行解は理境を脱せざる也。之に反して日蓮の啓示する所は徹頭徹尾、神靈の事的實在に在り。悟り顔の法師も悟らざる凡夫も等しく唯一乗の妙法蓮華經に於て成佛すてふ證明に在り。日蓮の眼中には禪家の悟りてふ事は結句、朱に紛らふ紫なり。之有るが爲に俗衆の眼移りて爲めに朱の正色を誤る以上は。是ぞ天魔の誘惑よと叱咤せむは當然である。禪學など云ふ料物しやうぶつがなまじひに存在する爲に。知らず識らず人は其方に氣を奪はれて不盡なる宗教學に偏向し。乃ち以て信仰の芽を踏ること。當代切に戒む可きの事に屬す。

三、理の本體——起信難の明治思潮

球突臺の上を球子を走らせるに。一個の球子が走る角度の變化たるや。其數殆んど意料に絶するほど夥多である。

球棒の打衝かり工合で。走り出してから角度も勢ひも種々に變化し。先に行きて他の球子又は隅に衝突して又候變化する其工合は。如何に場數を経る球突名人と雖ども。二度共同じき勢ひと走り方の變化とを實驗する場合は稀であらう。其れ丈。球子の行く道筋は雜複多様の極である。

此道筋が即ち理である。
無量なり一々に得盡す可からず。

理と云ふは事物の活動する筋道と云ふ事である。活動其者が現はれぬ前から井然たる規則が森嚴漏ること莫く備はりて待構へる。其處を球子が規則通り歩行く。萬づの理は皆之と同じ料物しやうぶつで有る。

扱この理と云ふ奴が仰山に控へ居るのを研究したり又其幾分を發見したりして。譬へば濱の眞砂を擔桶一杯收め得た位ひの所でモ一大抵諸藝の上手とか名人とか謂はれる程に人間は愛らしい小供氣の者で。學術界とても其通りで。學者とか博士とか云はるゝ人々は。無量無邊の理の數々の其中から蜆貝で大海の水を汲んで來た如くに。些少の理を拾ふて其で相濟み居る沙汰である。文明の智識てふ者は詮する處。這般の拾ひ物の出し合講である。而して智識を矜負する人々の爲態は。ツマリ長者が家の葬式から乞食が還りて貰ひし饅頭や錢の數を自慢し合ふ様なもので。長者の寶藏を窺かねばこそ其氣に成り得るので有る。

斯く分量から謂ふてさへ憫れな次第ぢやに。搦て、加へて理は死物である。理は『活動』てふ者の御成

街道で。通り給ふ將軍が殿様に準す可き『活動』自體に非らず。將軍を拜まず御成街道を拜むは愚かしき業なれど。其類の見當違ひが世の常なり。

活動とは『生命』が顯現する所の其表徴なり。固より理を離れては認め得ずと雖ども。人生の仕事は表徴を認めるより以上更に進んで表徴の本體たる『生命』其者に直接し投合せざる可らず。然るを活動其自體にだも際會する所以の因縁を後にして活動の脱々殻(即ち理)に固著する様にては。争か『生命』との距離が愈々大ならざるを得む耶。受難き人身を受け會ひ難き佛法に會ひ乍ら好んで墮地獄の根元を作ると諸菩薩が戒めし言の本旨は。平たく考へてユコ也。

俗に『我の強い人』と云ふが世に夥しい。其の癖として一句一邊の理窟を捉まへたら最期。其に獅嘯附いて青筋立て、血眼に爲つて是非を争ひ。乃ち我心身をエラ／＼させて。精力を損ね運氣を濁し。甚しきに至りては偶々局部の病症を獲てさへ。自ら多少の醫學等を心得る因果として病症を過大視し。學理上我病は難治なり坏と獨斷して。心身に寓する靈氣は時として不治の病症をも生路に轉換する所以を無視し。乃ち病勢を手製して。竟に好んで非命の死を遂ぐさへ有り。是れ當代文明の通有毒たる學理狂の餘弊たり。蓋し理なる者は。假令其が完全なるにもせよ。尙且つ前謂ふ如く活動の脱々殻たるに。全理に遠きこと甚しき手製の理即ち我意我見より自作せる理窟を振り舞して己が靈魂の寓たる心身を玩弄する如き事は。如何にも宿世の罪障深きの致す所にて。神や佛の膝下どころか俗

の學者や博士の脚底にも及ばぬ儀である。靈魂の長養どころか肉體の完命すらも覺束なきが當然の因果である。

學者や博士は。理に没して向上の一路を獲ざる者多きに拘はらず。尙ほ神妙な處が有りて小我意が薄い。即ち彼等は己が専門として従事する學科に歸依して。理を究め理を尋ね。爾して理に對して從順で私意を雜へず。兎に角も。理をば本尊に立てたらむ様の敬虔なる精神を具へて居る。而して偉れたる學者ほどが道般の精神に富みて靈の信解に近づき易い。只惜むらくは彼等には神靈を事上に受用する『行解』てふ事が乏しい。

信と行との解釋は茲に挿さみて適當であらう。信は心より動いて精神に歸す。精神に歸してから退轉せざる様我心身を攝收するツレが『行』である。『行』は各宗派に因りて方式を異にすれど。日蓮宗のは南無妙法蓮華經の七字を以て足れりとする。即ち之を唱ふるも可なり念するも可なり。要は妙法蓮華經に心身の全幅を歸依して理も我意も共に納めて仕舞ひ。爾して私の肉體が心と融一したる實體即ち心靈をば其まゝ成佛すべく祈るのである。即ち南無妙法蓮華經を本尊として信仰し。此信仰を理上の空念たらしめずして事上に現實せしめるが爲めに行を要し。行を積みて本尊と我心身即ち靈魂とが融一する處をば即身成佛と名づけるのである。

阿彌陀宗や耶蘇教やと日蓮宗旨の異ふ個處は一見知り易けれど。佛教に於て同じき聖道門自力門と併

稱さるゝ禪宗と日蓮宗との宗義の相違は迷ひ易い。其も其等。禪宗は御經に於て法華經を重んじ、又三世を現在に踏破する活機に富むから頗る相似て居る。故に二宗の相違をいやが上にも分明ならしむる事は。我宗旨の特色を見る捷徑である。

前にもほのめかせし如く禪宗には參禪問答と云ふ非常に六かしい行を課してある。其は日蓮宗が唱題を以て飛行と爲す如く單純平易でない。けれども行たる所以は一である。が。禪宗には本尊がない。日蓮宗の如く行の道具が其儘本尊たる様に出來て居らぬ。即ち宗旨をば教外別傳と立て、釋迦から迦葉更に唐土に渡りて達磨大師から色々の大禪師を経て。以心傳心的に法燈を紹いたとしてある。そこで極意に際限無きが故に心靈の集中點が發揮されず。緩かに卓越せる師僧に我修行を驗して貰ふてそして印可を受ける次第で。先づ本尊を立て、之に歸依するのは全く異ふ。即ち行ありて而して信無き弊を生ずる。信無きに非ざれども。歸依が先に立たずして研究若しくは修行が主たる故に。其は恰も學者博士が専門智識に没心して理の支配を受くる如く。直指人心見性成佛とて。直接に心を指してこそと云ふ處を捉へ了りなば其が成佛ぢやと云ふ事になり。斯くて全理は得べく。活動の消息も亦確かめ得むなれど。ドッコー。活動の本原たる靈威と與に事實實體に於て融一するの空し。

日蓮宗の行は信の半面で信は行の半面である。信行融一は心身融一を來し。而して後に靈魂は本尊に融一す。

世の中に又は宇宙に理や勢力の外畏ろしい者が無いと觀じて。其で生活が出來、思想界に許さるゝと云ふ時勢には。信仰てふ者が却々萌し難い。所以いかにとなれば。理と勢力とは。心を以て捌き得る料物即ち私の觀念、知見、實驗の綜合、若しくは視量目規(めぶんれう)を以て比量し分別し得る者で。綜合したり演繹したり、色々する内に。ド一なり合點が行かねば行かねなりに此分未發見若しくは未熟未達として片附け得る所の料物であるから。其は私の心や身の相手たるに過ぎず。一向我を超越して居らぬに因て。我に絶對服従を命令する丈の權威を含まない。ソコで人間は智識や經驗が積めば積むほど。理や勢力を我手にコナして「人工を以て自然を征略する是れ文明なり」杯と誇りつゝ、其で暫時は氣の濟む事と爲り。雷も昔は畏ろしかつたなれど。今は鐵瓶のナンノゴトノ程に思ひ傲し。太陽は昔は難有かつたなれど今は無料施しの大ランプと觀じ。火事の神も水神も。新衣にこぼるゝ煙草の吸殻やヒールの泡はども畏ろしからず相成る。是れ固より理の當然、事の必至で。全く文明の影響が心理界を左右する儀なるが。斯くて人間が未だ研究の達せざる若しくは自由にし得ざる理や勢力が何處までも残りて居る。否。跡から跡と理や勢力のお代りが出現する。ソノ處より外に一物と雖ども私の及ばすと思惟して服従す可き權威が見當らぬ如思想の習慣を成す。サ一斯うなると。信仰の必要が薄らいて來る。其は其等ならずや。信仰てふ者は絶對的の權威に絶對的服従を奉るの謂で。比量分別を超越したる境界に成立する者たれば。眞の信仰は本尊無しの人に起り能はぬのである。

其邊は西洋人の方が日本人よりは比較的に宜しい。其は學術技藝殖産興業の方面に氣を奪はれて惡鬼の如く働き、働き通して死ぬのが、文明世界の一般相とは云へ。西洋には基督教と云ふ權威が社會に行亘り。神と云ふ人間以上の主宰者が本尊と立てられて在り。智者も學者も是には體面の上だけなりとも絶對的に服従する仕來りにて。日本人の如く少しく上流なる智識的若しくは富貴階級と爲れば恬然として無宗教を標榜する杯の事なき爲めで。日本人は神や佛の觀念にこそ富めども。嚴正の意義に於ける信仰には極めて貧なり。是は維新以來、智識と功利との穿鑿に没頭没心する必要的風潮の致す所で。教育ある者の多數は眼中に理と勢力との外有らず。理や勢力を主宰する絶對的の者をば閑却しつゝ。生活も出來、社會からも許さるゝからの事なり。

日本人は神や佛を研究するには骨折るなり。即ち**開は潜水業者が眞珠を海底に探るの格で神佛を靈寶を拾はむとて探し居るなり。**研究には信が宿らず。絶對的の者は之に歸依する外に本相を示現せず。信先づ在りて後の研究は即ち行である。

本尊無き社會人心は、精神上の惡平等を惹起す。

開は畏い者が不在から至情的服従てふ習慣を破壊し。人々只便宜の爲め世渡りの爲め秩序に服し儀禮法律に従ふて。且らく人爵若くは勢力の高下に準ずる差別を立つる而已で。天爵上の差別てふ事をお留守にして仕舞から有る。即ち彼等は競進して自ら高ふする方法として諂諛と矯術と瞞着とに達

すること際限なき代りに。弟子てふ者が嚴正なる意義の『師』てふ觀念を有せず。又一般人は智識や富や位やに服従するそれ以上、賢を尙ひ長に讓ると云ふ自然にして勇氣なる服従に至ては毫も心を用ゐる莫し。

日本には。唯だ一の服従を命ずる權威がある其は勿論 天皇陛下の御威徳と云ふ者で有るが。是は國民としての精神上の權威で。決して宇宙に於ける『**人生としての精神上の權威**』に非らざる故。軍隊若しくは社會の風尙が軍隊的に傾くその部分に精神的差別を賦與するに過ぎなす。

地に築きたる者は地を掘る時崩る可し。

理や勢力を相手とし。比量分別を材料とし。國家的權威を基礎として不拔の堅城を築き了りたつもの時勢人情は。旅順要塞に籠りし勁敵の如し。剛し矣。而れども靈ならず。靈氣一たび之に忤ふ時は。至堅の物も摧く途がポット開く。

帝國大學の教授と云ふ諸博士中。其率ゆる學生に對し。智識の取次人たる以上、森嚴なる意義の師たる者夫れ幾人かある。將た何等の精神上の權威をか抱持する。彼等は狗の如し。狗と云ふ奴、今年是我子なれど明年は我夫と爲るを怪まず。大學生は狗の子なり。卒業の翌年は直ちに師匠と汝爾の間柄と爲る。

乾燥無味なる心界よ。人文の缺如せる社會よ!! 師たる人が天を畏るゝ精神なく。天に率ふの道

を教ゆるの心無き限りは。弟子たる者が單一味の生活意識に精神を葬りて。無靈なる惡平等を善き事と思ふこと無理ならず。既に惡平等なれば。則ち是れ極端なる社會主義が繁殖す可き最好の地盤に非ず耶。日本の高等教育は『人心亂の哺育場』而已。

日本魂の精華は軍隊にのみ残りて社會的武士道が發揮されず。商業に信誼なく政治に活作用なし。是れ實に天爵上の差別空しく。賢を尙ひ長に讓るの風尙根び去りて。人々畏い者がなくなり。只だ皮相の装ひをだに宜しくせば其で足り。扱て精神上を正して、叱り導き或は制裁を加ふる格の人が。社會に認められぬから有る。弊根や深し。維新以來衰へたる哉斯文。

孔子は靈界の引接者たらず俗界の聖人で有つたが。尙ほ且つ孔子は易と性命を語らざる程に天道を尊んだ。而して其道として教へし所は。總べて天に率ふ所以を示した者で。孔子自身が己の精神上全幅の歸依を奉るのは天に在り。开は孔子が桓魁に圍まれし死地に臨みて、『天は徳を我に生せり桓魁夫れ我を如何せむ』とて泰然自若。天の靈威は我に伴ふて自信を示せしに徴して著るし。故に其道には靈的權威を寓し。自然にして勇氣ある服従を弟子に鼓吹し得た。即ち孔子の道は理を超越し比量分別それ以上信仰を命令した者で。既に天と云ふ本尊を立つれば天爵上の差別は従つて生ずる順序で。賢を尙み長に讓るてふ精神上の規則嚴守され。茲に初めて『道徳の生命』が感得された。實に。日本の今日の如く。智識勢威ある階級が無本尊、惡平等で。經綸の基本を忽諾に附して。猶且つ

富強の形相が物々しさを失はざる邦家は。歴史にも現在世界にも珍しいが。开は一時の變態で。萬代不易の道では無い。予は實に邦家の十年後を慮る。

本書を讀むの縁ある人々よ。諸君は斯くて起信の動機を得ること難き、而して修行の氣根は環圍の空氣より蝨蝨され易き、顛倒の時勢に採まれつゝ在る所以に留意せよ。著者は全幅本氣なり。讀む人亦全幅本氣なるの義務あり。

四、靈魂自照の光明境——日露戰の當事即證

釋迦の本旨意が法華經一卷に藏ざると云ふ事は論が無い。又假令論が有るにせよ。其は經文詮議の閑人に任せ置くとして。法華經の極意如何。日蓮の本懐如何と云ふ肝心の處に至りては。法華宗中古今屈指の大僧正達も。徃々、玄玄の義を説いて却て玄玄の事に融合せざる過失を免れず。従つて宗門の人々に日蓮の魂魄を直傳する能はず。そこで悟りさへすれば、日蓮宗も禪宗も眞宗も歸著が一で有らう杯と、局外者から謂れ乍ら。之を斷然否拒して其異ふ個處をば經文の講釋以上、更に事實實體の上に現證し得る眞正の法華の行者が段々絶へる。即ち少しく心得顔の若手坊主すらも雜誌の文や結社の演舌杯に屈托し。甚しきに至りては。則ち基督教徒の垂範せる傳道の組織を模倣して以て進歩の色彩を衒ひ。或は彼等の口吻を盗用して『即ち例せば佛教には『慈悲』と云ふ良き語葉有るに。男

女學生の淫情に投じ易き『愛』てふ語彙を外教より盗用して以て流行を趁ひ。宗旨の假聲こぼれを使ふ許りで。己れが其まゝ活菩薩たる丈の信と行とは全然不案内である。されば怪む勿れ神靈的日蓮教が歴史の日蓮教に墮落するを怪む勿れ。高山林二郎と云ふ文學博士が其偉麗の文を以て日蓮の本領を社會に紹介したる一條に鑑みよ。法華坊主は爲めに社會の智識的階級に我宗旨が肩身潤かる可き便宜到來せりと喜び。世の書生や一部學者等は多少日蓮研究の趣味を感じもやしけむ。又高山文學博士ソレ自身は所謂精神上の快樂とか慰藉とか云ふ者を理上に獲て觀念的に達せしならむなれど。日蓮の紹介者たる博士其人が未だ事上の現證に迄究竟せざりし證據には。彼れ病累に困みて苦患を脱せむとて焦慮し。遂に能く日蓮研究の文學的産物を作り果はせたるに拘らず。彼れ自身は矢張り病に打ち負けて三十七歳を以て歿し去り。精神の糧を獲むと欲して竟に得ざりし旨を示したるに非ずや。

法華の智識者多し。而して法華の行解者稀なり。法華經に依りて佛知見を得るは易し。而して法華經と合體したる人と成るは難し。

智識は心の符牒に過ぎじ。生命を感得せしめじ。行解とは信仰と修業と並び行ふ間に生ずる靈魂の感得なり。生命は唯だ是に依りて悟證され。悟證が事上に實顯するに及びて。我は物心二境に大自在なると釋迦の如く日蓮の如くなるを得。

ココに悪い事には。法華經の初卷に。

『一切衆生をして。佛知見を開き清淨なることを得せしめむが爲めの故に。世に出現す』

と釋迦出世の本懷を述べて在る。ソコで佛知見を得るのが法華經の本旨たる乎の如く大抵の名僧すらも迷ふ。其から法華經の眼目と稱せらるる壽量品に於て。釋迦佛と妙法の本體を明かにし。『我成佛して以來無量百千萬億阿僧祇劫』云々と説き。更に『今此三界は皆是れ我有なり。其中の衆生は悉く是れ我子。』と宣示し。以て久遠實成の本佛は其まゝ妙法なり一切衆生なりと諭し。法と人と佛即ち平たく云へば神と物と人間との無始無終なる融一、全唯一の實在を暗示して在るが。ココが誠に疑似を誘ふ。即ち是が極意に達せざる間は。人誤りて以爲らく。彼様に全唯一の實在を開悟する其處が即ち所謂佛知見たる故。這般の佛知見の境界に我心を攝收すれば法華信者の能事畢る矣と。ア。此處が實際に危き箇處である。

日蓮が啓示する極意は。右様の臘梅にて佛知見を取得せよと云ふに在らず。其を爾思はゞ。毫厘の差、千里の過ちを生じ。理上の成佛に泥みて竟に全宇宙大の生命を感得せざるに至る也。

佛知見は心の迹し身の影のみ。凡そ妙法の實體たる所以の元原の靈威即ち『生命』其者にあらず。生命は靈魂獨り能く之を感得す。而して靈魂は纏て妙法なり。妙法は佛なり。抽象的に佛知見を取得することは成佛に非ず。成佛は具體的に我自身が佛と化するの謂也。

維新前後の法華宗中興の名僧と呼ばれたる加賀の日輝上人達すら。題目の形容詞を加へ。
南無平等大慧一乘妙法蓮華經

と唱へしめし如きは。寔に惜む可き儀にて。平等大慧と云へば。佛知見ニ即ち釋迦牟尼佛の悟證せる妙法の解釋ニをば法華經の眼目と立てし。其大慧に歸依する如、聞えて。誠に紛はし。

知見は何物ぞ。大慧は何ものぞ。法華經を知慧經と誤認せしめる者は日輝の罪也。知慧經ならば般若心經が在る。何ぞ法華經を諸經之王と特稱する要あらんむや。

予は實に一たびは。法華經を佛知見の公開機關と信せしのみにて。只だ我心の據よりどころを其に托しつゝ。自ら日蓮の弟子なりと思惟したる節永かりし。後にて顧みれば。开は日輝上人等の分際に在りし結果にて。直ちに我この肉體までも日蓮と融合すると云ふ靈域に格はらさず。誤りて心をば靈魂と同視し乃ち心を妙法蓮華經にさへ攝收爲せば可なりと理上の悟證に屬したりし也。

心身全部を妙法に獻げてこそ。初めて薪、火中に入りて我知らず光明の體と爲る如くに。我は妙法の光明と融一す可けれ。『生命』は神物人一切たるが故に絶対的權威なり。之を感得せむ方便として先づ心身を、客觀して本尊の外に置き。更に翻へりて。其をば神物人一切に歸依す。而して行を積む。爾る時。神物人一切は我なりけりと。竟に明るく我を包み。明るくなるなりに『宇宙大の眞我』が顯現す。

予は以上の如く觀じたりと言はず。實に予は以上の如く行せり。行じて而して得たり矣。

行せし迹には靈宿らじ。而れども法華行の次第を予が靈魂の迹たる事實に憑據して以て説くは。其まゝ予が法華行なり。讀者よ。予は進んで我心身を以て妙法を證せむと期する也。开は説にあらず。理にあらず。知見に非ず。觀念の描寫にあらず。日露和戰の本末に關せる事實に由りて。予が如何に神靈を事上に驗證し、行解を現境に積成せる乎を開示せむと欲する也。是れ實に予が法華行の果にして又因たり。讀者よ。予は西海の涯に在りて。日刊紙上に日露開戰を確然と豫言せり。更に平和克復の神機及び時日を判然と豫言せり。予は予自身をば。靈界に於て日露の和戰に同化せしめたる事實を立證せるよ。此は予を紙上に識る幾萬衆の親しく認むる所なり。

一半の他力、一半の自力。是即ち人間の成分である。此は廣義汎用なれど。法華行者の信解を表する語葉である。即ち先づ本尊に服従して微塵の異念私作を留めざる處は他力の極で。基督教徒がゴットに服従し眞宗が阿彌陀様を頼む姿と異なる莫し。爾しかはありながら。我靈魂は即日蓮の靈魂なり即妙法なり神物人一切なりと信解して。事上の信受を我靈魂に責むると云ふ方面より謂へば。是れ亦自力の極である。得道の道行が斯くの如く他力自力の両面併用なる處に。法華行者の面目は存す。

日蓮直傳の宗旨が飽まで理上の悟證を破する所以は。前に説きし如く。理上の悟證は、心の穿鑿に過ぎず。心を以て心を穿鑿しつゝ、因て以て得たりと爲す所の心をば靈魂と斷定し、何處まで行つても我

靈魂を我から客觀するの事境を脱せず。我靈魂が其まゝ我たる迄に事上に圓融せざればの故である。ツマリ我が我の本尊とヒツマリ合一する迄に行いた時。初めて我靈魂が本體自照の事境を顯現する者で。其外の悟證は。妙法の光明から我を隔て、「我即光明」たるに至り得せしめざるが故で有る。

本體自照の事境と云ふは。法華經の行者が不惜身命の念力を以て我を妙法に投込んで仕舞ふこと。恰かも巨火炎々たる中に我と云ふ薪を全部投込む如くする。而して後に光明は客觀の事境を離れ。我の本體が其儘光明に融和して自照するに歸着する。其處が即ち生命の本體＝靈魂自照の事境なり。而して其が得道である。

全宇宙大の光明は。無始久遠の昔より常住するに。多くの人間は。己が心身を薪として投込んで仕舞ふ丈の信解を得ず。従つて光明の外に居りて光明を求むるから。光明ソレ自體即ち無始無終の生命を獲ない。ゴットや阿彌陀や大悟徹底の料物を穿鑿し居る人々は。信解積むの時。己が頭上から前面ほどは明るく成る。けれども。前なく後なく、上と云はず下と云はず。全圓に明るく。己れ其中に包まれて當身即地に妙法として顯現する所以の光明境が出来ぬ。

我を妙法に投込んだ時は。即ち我と妙法とソツクリ一所に成た時なるが。本來妙法は全唯一の實在たるが故に。爲めに一分を増さず。其代りに。妙法の功德一切は我靈魂の有に歸し。現世當身の徳を藉りて神物一切が顯現する。ソレが事境に現證される。此現證の道具と爲るのが法華の行者で。

例へば。日蓮上人在世の當身は。法華經が日蓮歟、日蓮が法華經歟、分別を絶する迄の事相を現證した。即ち神物人一切が日蓮の當身を藉りて顯現したる現證が日蓮の奇蹟として生じた。元寇の豫言や神風の感應は。元寇てふ人事から請へば。人事が日蓮の當身を藉りて豫じめ顯現の先觸れを爲したもので。神風と云ふ物も神の所作も共に亦日蓮を感應の道具に使ふたものと考へよ。日蓮本位から見ること。神物人が日蓮から引附けられて、日蓮の念力に感應して、ワザ／＼顯現する様に思はる。けれど。翻りて神物人一切を本位として見渡す時は。日蓮は元寇や神風から引附けられて、感應させられて、神物人の掛けたメスノリズムを素直に演じた小供で有る。

畢竟法華の行者は。神物人一切に融一したる事境を靈魂とし。心身の行が靈魂のまに／＼たるが故に。所作所言は神物人の感應を最も完全に光明的に現證するのである。宇宙の神靈が導くまゝに我心身が働く。ソノ處が天啓と申す者で有る。

コ、に至れば。法本尊と人本尊との區別を苦にして論じ合ふ宗教家は。己れが本體自照の事境に達せざる爲めに靈魂と妙法との間に尙は竹膜の隔てを置き。従つて本尊は人か法かと惑ふ次第なる事が即地に信解されやう。法華宗に法華論の達人多けれども。今尙は如上の子が信解の通り了了地に照破する者稀なり。現に某と云ふ篤志なる老僧は。深く法本尊を念じて。東京に於て日輝上人の人本尊臭味を破するに幾百日の辻演舌を以てして尙は慊らず。特に數百行の廣告料を拂ふて某新聞紙上に

人本尊退治を唱道するに至れりき。其信念と行とは嘉す可けれど。是れ宗内未だ事上の悟證を示す者出でざるの結果ならず耶。予は在家の一淺學なりと雖ども。苟かに本職たる僧侶達の安心所證を檢しつゝ在り。妙宗の法運太だ隆んにして妙行の英雄却て日に減するを憐む。

爾れば日露の紛議起りし明治三十六年。予は自ら日蓮の靈を驗し得たるや否やを自ら驗して以て修行の活法に供せむと發願し。以爲らく。法華經の功德無量にして法華行者に事上の現證を與ふて日蓮上人の啓示に従ふ時は。今我れ立正安國の本事を當代に志し當身に期するに於て争かで驗應の較著たる者無からむ耶。如何に廟堂が腰を折り。軍人が理上の觀念に基いて對露戰の算と精とを難しとし。一般の人心は理と勢力とに泥みて。只空論を事とし。遂に「一國を舉つて焦土に歸せしむとも開戰を斷行すてふ眞決心」を缺くにせよ。コ、に唯我一人有り。先づ我心身を妙法の火中に投込みて。日本の國土人民悉く焼けたれる事境を唯我一人が感得したる上よりして。主戰論の光明を放射せば。一人の力以て必ず天下を動かす可し……と信解せり。蓋し此は當時の予が自方面なりき。自力とは云へ。私意なく私作なく私心なし。而して此信解に伴ふ行を揮ふて。是が果たる神物人の感應を事上に信受せしむと一向に本尊に歸依し。日蓮上人の魂魄が我この當身を藉りて五千萬人の眼前に顯現せよと祈り念じ。身を困しめ心を攝し精を盡し力を極めて。涙墨血筆幾百日に亘りて悉く是れ本尊に事ふる道と爲せりき。而して此は予が他方面なりき。斯くて予は。自ら主戰論が我なりや。我れが主戰論なり耶。

區別の難き迄に。主戰論てふ本尊(此場合は戰爭が即妙法の實體なり是れ即ち日蓮直傳の靈魂なり)と融一するに至れりき。

果然。妙念に妙驗有り。懦弱の廟堂は。誰するとも無しに、只管絶對絶命の形勢に促されて、日露の國交斷絶を決行し。振古未曾有の大戦は茲に顯現せりき。

無靈の人の心には人生は徒爾なり。況んや人生の一小部分の一時的現象たる日露戰事に於てをや。誰か之を去年の曆として今日に藐視せざらむ。戰時の事を今言ふさへ人々は興味無しと惟はむ。予は萬々其を承知す。然るにも拘はらず。實際に於ては。戰爭當時に於て國民各自は。死生存亡の危機を伏せし戰事其物よりして心靈界の幾多の活教訓を獲たりし也。否。國民は神靈の實驗を了し得て。其と自ら感激せし場合甚からざりし也。殊に開戰前後及び平和克復前後に於ける予が。時運の豫言者たりし事は。靈界に於ける重要な事實なり。而して予が主幹する東洋日の出新聞滿三年の紙上に證示せり。是れ即ち神靈の實驗なり。妙法の證し也。因て予は。(1)、豫言の可能なる事の理由。(2)、豫言は天啓の語にして同時に神物人感應の迹たる事。(3)、神物人感應は即ち心靈と物界と宇宙の生命との融一無礙てふ事の現證なること。(4)、日露戰事に顯現せる天意の事。(5)、玄妙なる數理が事相を支配すること等。即ち一括して神靈實驗と謂ふ可き大切の事。をば。國家開關以來の大國難たりし日露戰事及び平和克復の事境及び戰後の世相に即いて證明し。依りて以て天下人心を復活せしめむと欲す。

是れ實に本書の世に出る所以の一大事因縁なり。

知らず起信難の明治思潮に漂ふ讀書人は。這般の因縁を諒として最終のページに迄精讀するの氣根有りや否や。

五、人生の絶頂問題と純東洋的意識

神靈の實驗は、神と物と人との感應自在なる事實に據りて三者の生命は即ち融一無二なる事を證する處に成立す。著者は、乃ち。世界近今の最大事相たりし日露戦の本末に於て國民と與に、或は著者獨自に實驗せる所を論明して。以て靈の活火を世道に喚起せむと欲するなれど。此事や。日本當世の思想界立言界に向つては。餘りに破格、餘りに突梯なる企てとして視られ。非論理にして主觀的獨斷に偏向する亞細亞式舊頭腦の發露として冷笑されんは必せり。實に著者は時代と逆行する純東洋的意識の結晶なれば也。

然れども。時代思想と逆行する者何ぞ必ずも不可ならむ。千古の心境を開拓する底の偉業は。古來千萬人と逆行する唯だ一人に俟てり。著者は則ち我立言の容易に時流に解されず思潮に容れざるを悔みず。却つて純東洋的意識の健剛なる結晶として世に出る事を衷心の欣榮とするので有る。這般の自信は。常識に訴へても根據なき想念では無い。敢て時流に問はむ。卿等は『人生』てふ者をば

何とか解釋し得たるぞ。卿等にして之を解釋し得ざらむを。予代りて其事に任せば。東洋的意識も亦捨つ可からざるに非ず耶。

『人生』とは何ぞや。是れ人生それ自體の絶頂問題。

この問題には古今人類の知見、情感、意力の大部分が集注され。その結果は則ち宗教、哲學、文學、傳説等に發露すること枚舉に遑わらず。而して思想界信仰界を併せて統一する程の超絶的權威を具する解釋は却々に世に顯はれざること今猶昨の如し。

西歐文明に風靡さるゝ世界の人類は。西洋的意識の發動の雛型を學びて。各自に富及び功利を企圖し、壽命を欲求し、生活狀態の進歩に貢献し、科學智識の向上に盡瘁して營々逐々惟れ日も足らず。乃ち自ら文明の時代を標榜するが。扱。彼等が目的物とする所の富及び功利、壽命、進歩、智識等を楽しむ所以の主體たる『人生』其者が未定數たる以上は。一個の未定數に向つて加若しくは減若しくは乗、若しくは除したる結果は。各々等しく未定數たるに終ると同じく。人生の爲めにと云ふソノ『爲め』は。竿頭の旗幟の爲めに春風を寄與すると言ふソノ『爲め』と何を擇ばむ。竿頭に吹く者の春風たる。と秋風たるとは。旗幟何を關かり知らむ耶。春風秋風は各自に春風秋風のみ。

夫れ西歐文明の骨髓は科學に在り。科學を除き去らば西歐文明無しと謂ふも可なり。されど科學は宇宙の理法を搜索して世間に陳列するものにして。理法の總てを生ずる元原に迄は力及ばず。『存

在」を語るが「生命」をば解釋せじ。而して「我は何乎」てふ無上最先の主題は即ち「生命とは何乎」てふ事の替え言葉にして。「生命」の解釋は即ち「人生」の解釋で有る。故に西洋的意識の所産たる科學なる者は。不得要領なる「我」を外界の爲に役して「我ならざる者」の要領を獲得して。其をば理法と稱して展覽に供する者に過ぎず。

科學の外に基督教の感化的勢力が在る。

然り其は在り。在りと雖ども。只だ「生命」を客觀して其一端を講説するを極限として。未だ生命の活火をして生命を自照せしむる靈域直入方に格る莫く。組織的外張的に宗門の形相を擴大するに己む。即ち今の基督教は。西洋的意識を基本として解釋する基督教にして。科學の盛大なると類似せる因由に於て盛大なる也。此くの如きはキリスト、礎上の靈的絶對愛を感得する古代の純真基督教より視れば外道のみ異教而已。キリスト此世に再現せば必ず爾云はむ。少なくとも。日蓮の心靈は予をして斯く言はしむ可く感應せり。

是に於てか。擾々たる人類の中にも少しく秀逸せる人士が。歐西文明の時代に満足せず。進んで人生を解釋する新時代を得むと渴仰すること。時運の當然にして。予は然る者の一人也。

ア。西洋的意識を基本とせる科學も基督教も。人生の絶頂問題に對しては等しく鶏肋而已。然らば吾人今代の人類は。將た何等の學問及び宗教を執りて新時代を喚起す可き乎。

曰く。世界は餘りに西洋的意識に降參せり。此境此時は。方に西洋の學風效風と起點を異にして。純東洋的意識の上に立脚しその特長たる直覺、靈感、全觀的圓融的本能を發揮して。以て一氣直ちに天に迫る底の日蓮式大乘機根を惟れ要す。

基督教徒中の純粹にして正大なる人士は。現時代に不滿なる餘りに。時代思想に超越せる何者か來れかしと渴仰しつゝ。翻へりて初代の基督教が東洋的意識を基本として靈域に直入せし事を回顧し。今や新時代の建立を東洋人の意力に欲求するに至りぬ。本年三月東京に開催せる萬國基督教大會は教會稀有の大現象なるが。此に臨める幾多西來の賢人大家の中に就いて、神學博士ホル氏が。三月十六日神田青年會館に於て爲せる「東洋的意識が神的王國に對して爲す可き貢獻」と題せる二時間に亘りし大演説は。切に這般靈界の欲求を表明する者たり。該演説の梗概に曰く。

予は予を哺育したる西洋文明に對して不滿を抱ける一人なり、西洋文明は決して健全なるものに非ず、若し夫れ現今の如くにして進まば、唯彼は世に重大の弊害を醸す者たらんのみ、從つて基督教に對する西洋文明の思想に基く解釋は甚しき缺點を有し、基督教の神髓は到底發揮し得ざるのみならず、之を改めずんば誰しも思ひ到らざる災害を早晚吾等の上に與ふるに至らんは必せり、個人の性格に、若くは國民の性格に、美はしき種々の特性を扶植し滋養し發揮せしむべき基督教の神髓は、未だ西洋文明に哺育せられたる西洋人に依つて味はれざるなり、否、寧ろ味ひ難きな

り、▲西洋文明は物質的なり、皮相的なり、組織的、地理的、形式的に甚だ廣く且つ立派なり、然れども惜むべし、吾人が最も切に要求する物を、彼が到底與へ得ざる事を、靈的神髓の光彩ある發揮は遂に彼に於て究め難きを如何せん▲西洋文明に究め得ざる者を與へ、吾人の大要求を充たす者は東洋的意識の力なり、冥想的、沈思的、耐忍的、精神的なる東洋的意識が、神の支配せる世界的王國に貢獻する所は茲に在り、不十分なる西洋文明を補足して神的王國を世界に建設するの大業は當に東洋的意識を有する東洋人の任ならざる可らず、然るに現今の實情を見れば、此尊むべき東洋の特色は漸く埋没し、不十分なる西洋の特色は益々發展し、此は遂に彼を壓倒し盡さんとするの傾向あり、予甚だ之を悲しむ、東洋に冠たる國の日本國民は茲に之を自覺し、自覺的行動を以て西洋文明と提携し、大に神的王國の建設に盡すべきならずや▲宗教は決して單に理想に非ず、理想は如何に超絶し眞善なりとも、之を實現せしむる力に於て缺くる能らば、何等の値もある事なし、宗教の本性は此眞善なる理想を實現せしむる力を謂ふなり、物質的方面に熱心なれば、なるだけ、靈的方面に不熱心となるは數の自然なり、故に西洋に於て解釋せる者は初代の基督教と全く其趣を異にし、かの宗教の本性を缺けり、基督教の初代は實に東洋人若くは半東洋人に依て信奉せられ傳道せられたる事は重要な事實なり、故に初代の基督教は内向的なり、東洋的なり、然るに現代の基督教は外向的なり、西洋的なり、現代の西洋人は哲學的思想に基く佛

教の汎神的説教を解し能はず且之を好まざるなり、西洋は科學的又は歴史の方面に於て卓越し凡ての問題の根本たるべき主題は唯『世界』に在り、彼等は自然界の物と力、此等の歴史、發達、進歩、關係を説明するに巧智なり、然れども彼等は世界以上、世界を超絶したる點にまで其思を伸べんことは難し、故に基督教に對する解釋も亦歴史的科學的なる點に於てのみ進歩し居り、勿論是等の進歩も必要なれど、思の内面に及ぶなく、超絶に到るなきを惜しむ、神は東洋に形式を與ふるよりも精神を與へ冥想的生活の民たらしめ、神は西洋に精神を與ふるよりも形式を與へ、外向的生活の民たらしめしには非るか▲是等の關係、特色を自覺したる東洋人は、武力又は智力を以て西洋人と争ふよりは遙に高遠なる立場に卓立し、復仇よりは救済に、即ち敵の不足を補足すてふ崇き態度を以て、其特色を西洋に及ぼすの度量なからざる可らず云々』

恢たいなる哉やハール博士の言。是れ寔に時代精神の轉換を指示す可く野に叫ぶ豫言者の聲なり。測らざりき。東洋人ならざる日本人ならざる。西來の博士の口より。此段玄々の消息を聴かむとは。著者は輒ち博士一人に於て千萬人の味方を獲たる也。

世人よ。好んで思想及び人物の不經濟を行ふ勿れ。西洋方式のレットルを有せざるにせよ。良き物は良し。精神の根は此に在り。捨るは天物を暴殄するに等しき不經濟なり。純東洋的意識の結晶が如何に深く生命を含蓄する乎を驗せよ。

六、革命以上の革命——破天荒の新文明

先づ西洋文明の心酔を治せよ。爾る時。世人は人生を回顧し得む。

闇の中に影有り。人を見ず。海水に魚の路有り。人を見ず。飛鳥は跡を空中に波及す。人を見ず。而れども在る者は在る也。

其と同じく。人事にも道が在る。世界の機運、人類の進向には確然たる靈的行路が在る。

世界の精神界に必ず来る可き大轉換の岐路は。目下に於ては世人の耳目に對して開々の物たり。されど一旦心眼を開きて前途の又前途を視むには。誰か西洋文明の早晚、大振盪大變革を蒙る可き性質の者たるに留目せざらむ。

西洋文明は不正の文明で有る。

見よ。世界は世界自身の根本的缺陷に困り。困みつゝ在り。即ち人生としての不正を治する道なく。月に歳に舊信仰、舊勢力を破壊し又補綴しつゝ。前途の歸著は何處まで成算なしに只管先へくと競進しつゝ在る也。凡そ西洋文明が世界に寄與せし功德と云ふ者は。自由の思想及び生活が人智人文及び財富の向上を遂げしむと云ふ點に止まる所。扱これを享受する爲めの犠牲を計算する時は。文明は良藥たるよりも寧ろ劇藥。或は一轉して毒藥たるを實際とす。見よ。今の國家も個人も。其存在

は力を以て擔保せらるゝ而已。而して力は道と非道とを擇ばず。同じく力なり。故に力の反面には自己良心の犠牲若くは他人の良心或は肉體の犠牲を伴ふを常とす。是れ即ち根本的缺陷なり。

米國は商工業の發達が偉大にして世界に仰ぎ瞻らる。而かもその著大の産物たるトラストなる物は何ぞや。

『自由の國に存在しつゝ。智力意力資本力を以て産業界に獨裁勢力を成すを其目的とし體用とする者』是れトラストにわらずや。獨裁政治の帝王の代りに獨裁産業の帝王を生ずる者に非ずや。衆民の産業的自由は何處にかある。

獨逸は帝國主義の最大成功者として尊敬せらる。而かも开は他邦民の利益及び生存を犠牲として我の個體を長養すと云ふ沙汰にて。無際限の軍備擴張は。其必要的に自ら行ひ。又他邦を誘化しつゝ。文明國の内容は野蠻力なりと告白する同様ならずや。

社會主義は。稍々人道と接近すべく稱せらる。而かもストライキとは。トラストの平和的帝國主義なる夫れに準じて。亦労働團體の帝國主義である。究竟する處、其労働團體の力に由りて他の人類を階級的に壓制するに至りて已ますや。亦只だ生活主義の發動のみ。人生問題に對しては何等の歸著をば有せじ。然らば一朝若し社會主義の國家が何處になり成立つと假定して。若し彼等一括めの團體が他の國家若しくは人種と利害の大衝突を醸し産業上の死活を争ふ必要に遭逢せば。則ち彼等は復た只

だ他を壓制する力の優劣如何を顧みるのみならむ。歸著するところ人道に全倚せじ。

萬國平和會議の勢力大いに長ず。开は劍戟銃砲以て人を殺す非道をば抑損する効あらむ。而かも平和の時に於て。人情の險惡、否、人情てふ者の皆無に困りて。只管功利の競争を行ふ人心の戦争をば奈何せむとするや。耳目心意を怡ばしめる藝術は盛大なり藝術應用の設備は愈々完成すと雖ども心靈の安息と精神の幸福は。力闘主義の文明國に期す可からざるを知らず耶。

力闘主義の健なるを主位に置き。人生の正道をば客位に置くをこそ文明國民と謂は。酒を飲まず、煙草を吸はず、虚言を弄せず、水と麵麩とを飲食して精神的に神に事ふる所の回々教徒は。人類の正義の爲めに誓つて所謂文明國民を膺懲するの日有るべし。否。文明國民中の真正基督教徒は。神の權威の擁護の爲めに人生としての不正を排除すべく戦ふべし。

抑々虚偽は永存せじ。個人主義を擁護する宗教は虚偽なり。断じてキリストの純愛的心靈と兩立せじ。個人の競争より生ずる智力富力の増進と榮華の狀態は純正キリスト教の仇なり。而して开は今の文明なり。世界は斯くて一たび人力主義と天道主義との一大決戦を生せざる能はず。而して开は回教徒と、真正基督教徒と、又佛教徒中の良分子とが、結托する等の奇現象を致さずと云ふ可からず。眞の文明は人生の肉的外向的生活を究竟とせざれば也。

個人主義私愛本位の人生觀より生ずる力闘主義に偏向せる結果が文明毒を發散することの非常なるは

米國の社會最も之を實現して在り。彼が都市人心の腐敗と兇惡とは實に惡魔の棲家と目せしむるに足る。怪む勿れ桑港には『人殺し受負會社』有り。此は支那人街の特産ながら。白人一人を殺すには參拾圓、日本人は其半額の規定にて。目的の人間が支那街道に足踏込んだら最期。必ず秘密に生命を喪ふ由。而して此は物質的文明に偏向し功利の競争に盲進し『人生の正道』を客位に置く底の米國社會の餘毒にして。獨り支那人の罪にあらず。鐵詰トラストが腐肉死屍を混入して利を圖りしてふ非道の事は。偶々發覺せる巨罪の内唯一つのみ。其類を擧げなば枚舉に遑あらじ。スタンダード石油會社が鐵道に關する犯罪事項の既に檢舉されたる者は六千有餘件に上りしと云へり。米國議院は這般の罪惡を矯正する議案の爲め幾に十箇月の長會議を繼續し正義の士の雄辯は十三州の人民に人道を同願せしめたるが。此は反動的矯正に過ぎず。大勢は依然として功利主義なり。人力偏倚主義なり。社會の主力は舊の如く『かね』に集りて而して『かみ』には歸せず。

革命に四種有り。

一は。主權者たる者の團體が全部傾覆されて人民ならざる新團體が其に代る。これ支那の歷朝革命及び日本維新の革命など然り。此は政治者間の革命と稱すべく。人民本位の革命と異なれり。

二は。専制政體を立憲民主政體に革め。人民の政治參與權と君主の主宰權とを調和せしむ。此は西洋民族の創建せし者にして。國民の自由を法律に依て確認し。君主の權力をも憲法を以て制限し。治者被治間の關係を法律關係ならしむるの政體なり。此政體の主義は。人民對國家を道德關係の一邊に據置きし亞細亞諸國の近年漸く學び又は學ばむと爲しつゝある所なり。

三は。君主てふ者の血脈に於ける歴史的尊貴と。先天的權威を無視し。純粹なる人民本位の主義を以て政治的首長を選舉し。其に一國を統率せしめる者。即ち共和制、合衆國制これなり。

四は。社會的革命即ち政府の權力國家の法律をば國家てふ一個の生ける機關の成立の要具として主用せず。これを社會の人民多數が生活上の便宜に專用する主義に由り。彼の少數の智者資本家權勢者が多數労働者及び土地海面を私用する社會制度をば根本的に打破し。富も權力も教育も多數労働者の意志を以て一切支配する革命これなり。

第四の革命は。政治上より超えて社會上の革命に至る者にして。國家社會主義ならざる純正社會主義の主張とす。

蓋し立憲政治も共和政治も。社會主義の傳ふる福音の幾部を應用せずには立行かぬ。文明諸國は孰れも社會主義の感化を政治上に拒否する能はずして。その勢力を善用し利導しつゝ在り。但し此は國家の便宜上若くは局部必要の爲め爾するもので。絶對的無階級、絶對的平等の理想と主義とに局面を譲りしには非ず。云は、緩和劑の類のみ。

今日に於ては字内の何處にも社會主義の理想に基づく革命は未だ行はれない。其は産業及び功利的個人的並に團體的競進が所謂文明の原力を成して。社會主義自身が帝國主義と全然離るゝ能はざる事情を醸すに因る。

佛蘭西の社會黨は。政府がストライキ鎮撫に警察力等を用ゆるをば毎度議院に於て非難すれど。硬性なるストライキが普通の法律を毀害して個人の生命財産に危害を及ぼすに至る時。國家の權力がこれを取締る事は已むを得ざるの處置として政府黨より反駁され。其に返す言葉なし。これは其等で。國家存立の要素たる法律執行の權力を無用とせば。則ち社會黨自身の生命財産も亦不安を來し。其主義も福音も言ひ居ること協はぬ儀で。無政府は直ちに他國民より壓迫さるゝ原因を作り。久しければ則ち「無社會」の結果すれば也。

故に社會主義の宣傳さるゝ途上には。尙ほ國家の存在を要す。而して社會主義の理想が。出來得る限り人民を國家に使役せしめざるべく促す點は。無識なる國家萬能論者頂門の一針なれども。人種、宗教、歴史及び利害關係の異同より生ずる國家と國家との競争てふ者の絶滅せざる限りは。或一國が獨り社會主義を全部採用する事は不可能である。社會主義が實行さるゝ日有りとすれば。其は全世界の各國家が融合して一天下の實を成す時の外は無い。一天下の人民が平等の福利を有する迄の完

全なる社會〓これは頗る善美なる理想ではあるが。扱此理想に向て一躍、現實世界を提げ去らんことは不可能である。其に達する順序として先づ。この大理想を哺育しつゝ、他の侵犯を捍禦し。漸く全世界の統一を期する底の集團力を要す。是に於て國家を物質力に於ても精神力に於ても兩つながら健全ならしめる必要を生ず。而して國家の斯かる役目を主眼として内外の施設其宜しきを得るをば至純なる『王道』の目的とや稱すべし。

王道に似て而して羈者的なる者は。當世の所謂イムペリアルイズム(帝國主義)なり其至れる者は社會主義を國家主義に轉用す。即ち近年の獨逸國は。帝國主義と社會主義との駢進める健全の社會と稱せらる。彼が學術の發達と其實地應用とが。都市村落を併せて文明の德澤に均霑せしめ。生活主義に加ふるに理想哺育の餘裕を以てし。公共の爲めにする設備の整頓と。民衆の他國に比して幸福且つ健全なる事とは。列國民をして驚嘆に堪ざらしむる者ありと稱せらる。即ち獨逸に於ける社會黨員の數は年々増加するツ、他方には。獨逸國家の海上及び植民地に於ける勢力膨脹と貿易の増進とは駢々として止まず。國富のメートルたる人民の資力は。過去二十五年間に於て五十五億圓の貯蓄を算し貿易額は十個年に一倍強を増たるのみならず。その化學醫學器械學哲學に於ける發達は依然として世界の識宗として許さる。蓋し彼は興隆の標本なり。

されば一天下の融和〓人民の平等福利〓てふ社會的理想は。國家てふ團體力の力闘主義(即ち

帝國主義)と歸著全く相反するに拘はらず。今日は却々に世界人類の精神の障壁が除去されず。人類相互に自己の生存を最先要務として汲々たらざるを得ざる現實社會たるに付。社會主義者も亦其生存が帝國主義者の庇蔭に依るてふ奇異の状態を呈し。二者の間に或程度迄の提携を餘儀莫からしめ。到底二者は一離一合しつゝ、文明の發展と自稱する功利競進の世相を愈々劇甚ならしむるに已む也。即ち今の世界は半上落下(どつちつかず)の世界なり。國も人も何の爲めに生存するやを思考するに先たちて。生存する爲めに力闘すてふ事を専念する時代なり。憫む可し力闘〓力の正不正を客位に置く力闘〓を除きては。社會主義も殆んど零に歸せむとする程度の文明ぞ。矛盾も亦甚しからずや。

此矛盾は。西洋文明の眞價極めて低汚なるより生ずる矛盾なり。文明の原力たる功利の競進てふ事が人間をして神に仕へずして財に仕へしむるが爲めの必然の結果なり。

抑々夫の學術及び産業の發達に要する専門と分業とは。人生に多く不具の人間を作り人智に階級を生せしむる所以に歸着し。而して専門と分業とを除いては。當代文明の活力索き去るなり。哀れや小乘隔別的の文明!!

故に社會的革命は善の善なる者に非ず。人生は現在の文明と起點を異にする新文明を要求す。开は勿論現代人士の文明を過重視するに反對し。個人主義と専門主義に陥らざる共存主義大乘主義の文明也。記せよ。小乗とは私身本位、智識萬能主義の小我者流の事なり。大乘とは人生本位、靈性發

揮を本願とする救世者の事也。

社會主義は共存主義に遠近より在れど。未だ大乘主義即ち生活及び福利を身的物的に偏倚せずして直ちに自他を靈界の壽と福とに托する平等、慈悲、平和の事境を成就すべき大乘主義に縁遠きなり。

革命以上の革命とは。即ち物質界、制法界、學術界の生活を客位に置き。人情界、道義界、神靈界の生活を主位に立てしむべき共存主義大乘主義の實行を謂ふ。故に開は人生としての不正を許さざる新文明の顯現と相俟つ。

願ふに我謂ふ所の革命以上の革命は。當代文明の套局内に奉公する人士には未だ意義し易からざるなり。先づ當分はロシア革命が持て唯ざるに止まらむ歟。蓋し四種の革命が人間進化の階段を成す中に就て。社會的革命は最も世界的にして且つ最新なる機軸の者として期待され。歐米の天地は此の社會的思潮と舊制度舊思想との抗争の天地と目ざるべく成て來たる所に。端なくも西歐のロシアは。第二第三第四の革命を一束ねに遂行せむとて革命黨奮闘の幕を開けり。即ち政治上の革命と併せて社會上の革命を斷行せむと欲する空前の偉業にロシア人民は躍進せり。此は歐米各國民が早晚齊しく着手す可き社會的革命をば。最も壓制に苦しめる爾して最も政治革命に後れたる露西亞人が。今度は眞ッ魁けに開始すと云ふ奇現象である。固より一時に功を收め得む性質の偉業ならねど。歐米の社會的思潮をば露西亞革命黨が代表するもの故。其終局の勝利を博せむ時は。獨り露國の大革命に止まらず。歐米を通じて類似の運命を速かむこと必至の情勢とす。

勿論之に對しては。帝國主義及び資本黨貴族黨の絶大なる死活的抗争あらむ。而して該抗争は非常に劇烈にして且つ長期の者たると同時に。列國の混戦をも誘起せざるを保せじ。目今に於ては他邦國の内情が未だ露西亞の夫れの如く切迫せざる故。人々は是れ露西亞の私事のみとの様に看過すれども軍備と戦争とに要する血税及び身命の犠牲と富豪の財富壟斷、土地兼併とが。多數人民を痛苦と飢に泣かしめる趨勢にして同じき以上は。此革命の發生も亦同じく各國に免かる可からず。

然り而して。所謂社會革命は。今の文明の範圍を脱せざる限りは。究竟する所真正の平等福利の事境を成就し得ずと雖ども。この革命は我所謂「革命以上の革命」に向て一步を進むる大功を豫想せしめ得可し。何となれば其は帝國主義や富豪政治の數百年來積み居ねたる兵力や、器械力や、金力や、凡そ俗權俗力てふ者の極限は。到底人心の動亂より生ずる一種の靈力に敵せざる所以を實證す可く。従つて手續繁くして精神の安慰に益なき當代文明の諸道具を適當の價値に迄引卸す可ければなり。

革命以上の革命は。歐米の不具不正なる文明即學術及び産業の發達は。智力財産の懸隔惡差別を無際限に強行しつ。他方面に於ては。社會感情及び利益に投じさへすれば。事物の不理不正を問はれざる惡平等の實を成さしむる撞着矛盾、奇々怪々たる混戰的當用本位の近代文明即客位に貶して

四四 心靈の安息、精神の幸福を主眼とする『正氣本位の新文明』を之に代らしむる大變革なるを以て、其來る

歲月は太だ近しとは期し難し。而れども其を甚だ遠しと思惟する者も亦誤れり。文明を過信して這般の變革を疑ふ者は。亦文明毒に腦底を侵されて心靈不健全の症に陥れる者の事のみ。見よ。露國の革命は。社會主義より更に躍進して虛無主義に近き『自然的生活』とも稱す可き思想を包含するに觀よ。民衆の心靈的安息を害する功利競進の世態は。高き理想家の夙に懸望する所にして。自然的生活の遂行の爲めには。所謂近世文明なる者の消滅すらも辭せずと云ふ思潮は。トルストイ伯に於て發見さるゝ事を參酌せよ。伯は。その極端なる博愛主義の下に。暴力を以て暴力に對する社會黨も革命黨も。其目的を達し得ずと説きたる末に。『時代精神の根本的革命を已む可からざる者として論ずらく。』無道なる軍備と。戦争及び人民より土地を剝奪せしことは。基督教國全體に起らんとする革命の原因たること予が屢々繰返して云へる所。而してこの革命の緒は露國によりて開かるべきこと明なり。露國民は境遇上佛國民よりも早く、壓制政府に服従することの災害の源なるを知れり。更に伯は革命の方法及び結果を示して曰く。

『凡ての惡制度を免かれん爲には。勞働者は腕力を用ひずして。しかも政權に服従せざるを要す。されど國民が政府の命を奉せずして國家の成立するかと問ふ者あらん。予はこれに答ふるに露國の現状を以てすべし。露國にては政府の威力なくとも。農民の共同團體の成立する也。却て政府の關涉する爲

めに露國民自然の結合を妨ぐるを見る。農民は共同生活を圓滿に組織すること猶蜂が巢を作る如くして相互の平和土地の共有を計り、自由の社會組織を形造るならん。既に斯る團體は政府の助なくして東方の露境に存在したり。又かゝる團體は現に土耳其に移住し。其地にて靜かに平和を樂めり。露國の一億の農民は政府さへなくば、皆この如く圓滿の社會を造るべきを。政府の壓制は彼等をして、無用の重荷の下に呻吟せしむる也。この土地の共有、共同生活と云ふ圓滿なる社會は過去の歐洲の革命の如くして得らるゝに非ずして。政府の暴行に組せず、又政府に對しても暴行を行はざるによりて自然に得らるべし。従つてかの功を急いで狂奔せる所謂革命家の行爲は一の暴力を減じて他の暴力を喚起するのみにて、何等の功なき也。眞の革命に従事する者は。何物をも破壊せず、毫も血を見ることなく、只飽まで暴行に耐え。しかも政府の命には従はずして、靜々と新生涯をつくるべき也。この如く露人が覺悟して。政府の暴行に加担せずして、互に團結するを努め。その人數の多くならば。政府は次第に威力を揮ふの機會少なく。又暴行をなさんにも補助者の減するを以て次第に威力を失ふならん。故に個人々々がそれ〴〵政府に服従せざるに至らば。壓制を以て軍隊に加入せしむることも止み。土地剝奪も跡を絶つべく。最早人と人と争はずして。幸福健全なる共同の農民生活は現出すべし。さらば今人の讚美して止まざる文明は如何になるべき。文明の消滅を以てヴナルテールがルーソーに與へし書翰の一節にいへる『猿に歸ること』とする者あり。彼等は此迄築き上げし文明を失ふを難じ、この

電燈電車を棄て、劇場博物館記念碑を棄て、寂しき田舎に野卑なる農民の社會に歸るべきか」といはん。予はこれに答へて曰く「然り、ロンドン、ニューヨーク等の大都會の片隅の貧民窟を棄て、淫賣窟、高利貸、爆裂彈、監獄、斷頭臺、兵營を棄て、靜かに田舎に歸るべし」と。彼等は又曰はん「吾人の文明は大なる賜物なり」と。されど文明の恩澤を喜ぶ者は少數にて。彼等はこれを利用して金儲の道具とし、他の勞働者に比すれば殆んど心身を勞せずして日を送れるなり」と。見る可し伯が如何に力闘主義及び文明毒に反對して正しき生活を人生の歸趣と爲すかを。伯の注文たるや空想家の注文なり。されど半面の眞理は箇中に見ゆ。

但し我所謂革命以上の革命は。トルストイの如く老莊的にして竹林の七賢染み。若しくは禪學染みたる者に非ず。我は積極的に不具不正の文明を排して新文明を喚起し。乃ち直ちに人生を正路に就かしむる共存主義大乘主義を宣傳す。而して是には天力人力合せ與して。眞の生命と靈上の福德とを得せしめ。乃ち私有私念てふ事を實際に根絶して。利義同一、公私融化の事境を成さしむ可しと謂ふ也。即ち此は人類の私有私念より來る功利競進の亂心界に於ける生活問題以上に出で、眞の人生問題に入る革命」なりとす。

何の爲に功利に競進し。何の爲に自他の良心を生活主義の犠牲と爲さざる可からざる乎を思索する追なしに。又斯くお互に騒々しき生活界の人間同志のソノ生命てふ者の本相を感得する事なしに。

擾々として只生活するが爲めに生活する限りは。幾たび革命を行ふとも。残るは私有の争ひと私念の煩とのみ。人生畢竟何の詮か有らむ。而かも一たび自他融合の眞生命を觀じ無始無終の絶對靈を感得せし時は。人生の心身は宇宙と與に永久なり。無窮の平和は茲を出るなし。爾る時。誰か不正非道を行ふて而かも文明を誇る如き顛倒を敢てせむ耶。

人類を正しき人類と化したる。是れ我の革命なり。正しき人類とは。宇宙の生命に融合して人力を天啓に一致せしめる人類なり道は天道なり。理と正義とは天啓に基く。

予は確乎として信ずらく。……我國民又は一民族が世界の一部を限りて其隨意なる自然的生活を世界と隔別して營む事は天の意にあらず。這般の隔別性は。生命の融一と背馳する小乗者流の根性にして。トルストイ伯などは阿羅漢の分際のみ。斯かる思潮に漂ふ國民と他の積極的進取の國民との間には。確執の果ては死活を争ふ戦争なきを得ず。又積極進取に鋭き餘りに。人生としての不正を顧みざる底の帝國主義又は富豪政治の國民は。他の物質的文明の力乏しくとも精神及び生活の正しき民族との戦争を課せらる可し。將た又個人間及び國際間の相互の邪慾非道は一度必ず慘劇なる戦禍を速き。或は意外なる天災の咎に遭ふ可し。總て地上に建てられたる人爲の私即ち神靈を度外に置きて自ら大とする俗權俗力は。必ず天上地下地上の合體せる靈威に崩さる可し。斯くて人間は無神無靈の文明自慢の昨非を悔恨して。心身をば。靈く方面に專注し。漸く大乘の妙境を獲得するに至る可し。世界が一

の活ける機關にして。世界の生命は即是個人の生命たる所以を深念するの時は。何人も我身の爲め又は國家の爲めと云ふ如き偏頗なる私小なる觀念に由らず。直ちに天啓的正義に由りて心身を處し得る者ぞ。正義とは無私にして天に合する道ぞ。

私心或は私身を本位とする功利病が各邦國及び各個人を惱亂せしめる極に於て。革命亂も世界亂も恰かも地底の火の如く轟動するを免かれず。而して最も正義に富む人種と國民は残り。道念の腐敗せる者は如何に物質力に富むとも天力人力の挾撃に因て洗はれ可し。

眼頭の事實に據りて心に證せよ。露帝の御身上を三年前の今日に對照すれば如何に變り果たる御有様よ。曩には萬國平和會議の盟主として威を列強に觀めし。其陸軍は五大強國に敵すと誇り殊に明治三十六年の秋には歐亞一貫の鐵道を以て支那を經略するの利器と爲し。旅順なる關東總督府に荒巖夫を副王の格に据へて。滿韓を一束掩有すべく海陸に威を蓄へ。滿洲撤兵條約をば蹂躪して日本の抗議を鼻頭に弄び。所謂太平洋上の將來の主權者を以て自ら許したりける其ザラヤが。底事ぞ三年後の今は。東洋の島帝國に首を俛れ。果ては内に在ては己が宮殿に幽囚さるゝと大差なき迄に天地を狹窄し給へり。實に帝こそは俗權俗力の極限を帯びつゝも。开は畢竟、天道と運命に對して何等の甲斐なしと證明する良き標本ならず耶。

更に回顧するに。難攻不落の實力有し旅順城が。正義の疑塊たる日本の肉彈に觸れし時。我輩

は餘りに戦争の犠牲の慘劇なるに痛心しつ。吁斯くても此城が落ちずば天地に神は在さぬ乎。鬼が建たる石の戸も情けに一度は明くとぞ云ふに。此は最早戦争ならで。靈の勝負にこそと歎じしも。而かも竟に旅順は竟に開城しける。嗚呼この時に於ける吾人の清き高き感情には。神明の垂れ給ふ囁きが左の數語を印せるよ!!

人間の有らゆる俗權を極度まで用ゐて。如何に堅く如何に大いに建るとも。地上に建てし者は必ず斃さるゝの道有り。

地上の堅城は地下より崩さると。

實際に於て。旅順を今日に訪ふ人が山形を矢鏢無性蚯蚓塵に掻き散らせし如き稻妻形の坑道を目撃して。掘りも掘たり!!と舌を巻く通り。露西亞帝國の俗權と俗力の最大産物たる旅順城は。地上の物は地下より斃さるゝて宇宙間の一大眞理を説明し。例へば帝國其れ自體、露帝それ自身と雖ども此理に洩れず。同じく下層より覆へす所の革命の思想精神に敵せしとココに證せるぞ。

日本人の正氣は其まゝ露人の正氣なりとに此に悟證さる可し。世に地上のみを知る者多く、天上を知る者稀なり。地下を知る者に至ては殆んど無し。故に這般の事實が暗示する神秘的妙趣をば雲煙過眼視す。然れども靈的見地に立つ我輩の眼には。『旅順落城の一刹那は即ち是れ娑婆世界の俗惡非道の權勢が。地下より湧出する菩薩衆の靈光に撲れて怯み果てつる事を示す難有き現象』とこそ受取

るなれ。蓋し法華經に湧出品と云ふがあり。娑婆世界のこの大地中より無數の菩薩衆湧出で、釋尊と會すと説く。是れ釋尊が地下の國は其ま、佛界なる次第を諷示し。小乗者流の隔別思想に基く狹き天地を碎破せし者なるが。世界に於ける獨裁主義、階級主義の代表者たる露國は。正に事の姿さへ髣髴として。地下より昇る、日本勇士てふ菩薩衆から。其『人爲の私』の根據が到底持み難きを思ひ知らしめられつる也。即ち根據傾覆の皮切は日本勇士が與へ。其に乗じて革命黨が二著三著乃至幾千百著を行ふ。ココに天意在り。曰く。力の文明は正氣の文明に替らる可し。世界の時代精神は茲に新生命に接せよと。扱も畏こしや。

力の文明は消熄せよ。正氣の文明は燃上せよ。

文明毒を使用して富強を期する邦國は亡ぶ可し正義と與に終結する國民は永存す可し。私慾と不義とを常事と心得て單に功利を爲す者が崇拜さるゝの時。日本も亦數には洩れじ。开は衰亡に漸むべし。

そも、對露の合戦に際し。我輩敢て帝國勇武の士に請ふに其一命を捨ることを以てして怪まざりしは。全く天啓的正義の爲め而已。國家の元靈の爲めに死して神明の面前に不朽なれどなり。素より國家をして功利の爲めに人を殺さしむる私事のために非ず。只だ正氣は至上の靈力なりロシアの俗權俗力が我に幾倍すとも往く所として畏るゝ無し……と信じて也。

我輩はこの信念と終始せしが故に。戦勝の番數進みて講和の時機漸く生ずるに暨びては。乃ち鞭すく

平和克復の正路を指示して曰く。戦争が天命たりし如く平和も亦天命なり。武功と國利の私情に驅られて戦争を繼續し。此上に人を殺すは非道なり不義なり。日本の戦勝は日本一個の力にあらず。天の時に應じたるが故に間接直接の無量なる後援を得て則ち克てる也。無償金の講和條件何ぞ厭はむ。國家の大開運は實にココに在り……と。實に予は日本國中の立言界に於ける當時唯一の平和主唱者否。其「ヤハヒオン」たりし也。日本同胞が我輩と同じく這段の敬虔なる而して、剛健なる精神を戦後に體行して已ますんば。則ち日本は。我の所謂不正を許さる『正氣の文明』てふ新文明の搖籃として天祐長へてに渥く。應に來るべき列國の紛々擾々、世界戦争革命の大渦濤に立ちて。毅然として中心を失はず。時代精神の生命を普ねく世界人類に感孚せしめる底の一大事因縁に副ふを得む。國民的大理想と云ふものは須らく這般の高處深處に据わさるべからざるな也。

生憎や國民は。這般の天啓的大理想を感得せむには不釣合なる可き様に。劣情を長じ術氣を加へ。戦後却つて俗惡淫靡の習風に走れり。凡そ社會の上班を占めて世道人心の先導を爲す所の紳士才人の群は。戦時に枯れつる萬骨が正氣の凝塊として無量の靈力を揮ひし御蔭以て、この邦は九鼎大呂より重かるを得たるソノ本をば回顧して。以て教育及び政治經濟を革正する所以の旨義及び趣構を之に尋ぬるの舉に出でず。却つて露西亞や亞米利加が自ら其弊に困じつゝ、在る榮華病、功利症等の惡處をのみ擇びて學ばむとし。乃ち上下を將ゐて『かね』に妄從し『かみ』に隔離す可く盛んに行動するに至

れるぞ。亂心の沙汰なる。

彼等は以爲らく。大いに外資を輸入しトラスト擬いの大會社を成立させ事業を内外に擴充し海運と海軍力とは日本海を庭池とし陸軍は滿韓を歴し。商工業は支那南洋の市場に雄飛するは宜しく戦後國民の大理想たるべしと。ナニヲ大理想となす。彼様のものは宜しく國民的慾情と云ふ可きものである。俗權俗力より外に何等の超人的靈力を解せざる者の標本たる井上馨澁澤榮一の類に類づく有象無象が。何處に世界の思潮を制する正大なる觀念を有し得べきぞ。況んや正大なる觀念と剛健なる信念との抱合物たる『理想の實現』と云ふものに於てをや。俗惡宗の偶像井上は。其宗徒たる三井の一門にも本願寺や曹洞宗の連中にも。夙に吳々教へ込みて曰く。我に服從せよ然らば財産を作り得むと。而して心靈の濟度者たるべき本願寺も曹洞宗も町人三井の徒と與に唯々諾々す也。

財産以外に何等の念なき當代人士の眞狀は依りて以て萬事を推測し得可し。國民的大理想が聞きて呆れずや。

願ふに正氣は軍人間に保留され在らむが。軍人として 天皇陛下の御運勢のみを恃みて。毎も國運は好調子のもとの考へ。俗權俗力以上の者が對露戦に克たしめたりと留意せで。乃ち更に深大なる理想に心思を練らざる時は。則ち世界の社會的革命及び早晚破裂す可き列國戦の大波瀾に處する時に及びて。さて一銃と劍とは人心の火を消すに適せずと悔むんは必せり。

夫れ社會が功利を以て社會自身を教育しつゝ在るさへ。既に人心の兇險を來す大患たるに。元老爲政者教育家が尙率ゐて此大患を度外視し。却つて自他相競進して功利熱を民衆に傳播するに於て。世道人心は夫れ竟に如何ぞ。軍人獨り澄し顔なり連。功利熱助長の責任は彼等にも之有り。異日若し戦亂生せむ時。遽々然として正氣の必要を想ひ起し。急に民衆を擧て往時の日露戦争の時の如く忠勇なれ正直なれと註文するとも。平生の氣風を功利病に仕込みて因果として。民衆は常に教へられし通り功利の爲めは働さす可けれ。單に正氣の爲に死すてふ事には二の足を踏まむ。今の日本社會は露探的人物を多く作るべく促がす同然ではなからか。

年俸と位置とを繋ぐだけに働く現金主義の官僚や。學問を貨物視する博士連や。人生を餘興本位と観する和樂一邊の人々やに。『正氣の文明』で候の革命以上の革命で候のと。大理想を聽かせし連。世には好奇なる文士もあるものよ位にしか感じまい。けれども。世界の風雲大いに動かむ時に至らば。げにも人類の運命は文明毒功利病の苦患を掃蕩する爲め天力人力の合體を夙に要せしよと。靦面思ひ當るであらう。現在其端緒は既にロシア革命に開かれたり。列國が、無政府黨の禁遏を勵行せねば一般の動亂を誘起せむ乎と氣味惡がる時節に迄來れり。決して我一代を過ぎての後など云ふ遠い咄には非ず。諸君其を御承知か。

露西亞帝國の俗權俗力は尙未だ盡さじ。軍隊の勢力と政府の財力とは更に極端なる虐壓を遂げしめむ。

彼は其極限を揮ふの日有る可し。开は革命の慘劇が絶頂に達するの時なり。

事の趣意は。ロシアに限つた沙汰に非ず。程度に淺深こそ有れ。經濟界の調子が一度狂ふたら最期。列國は商工業の上から人心の動亂を強めるなり。決してロシア帝國の傾覆を前途に期するに止まる勿れ。俗權俗力を無上の力と冒認する帝國主義の權化カイゼル、ウイヘルムも獨逸大聯邦も。到底永久の者にあらず。その榮華も繁昌も異日必ず正義に征服さる可し。正義とは地上と地下と天上とに亘りて融合する大乘的靈威の發動なり。天物を私する總ての施設を拒し。キリスト、釋迦、日蓮の同工、異曲なる真正の平和、慈悲、平等が一切衆生を導く處に正義は存在す。开は今日に於ては尙は夢の如からむ。而かも社會組織の不完全を議する社會主義や社會革命主義乃至無政府主義の流行は。恰かも極苦極痛なる病者が。咽喉や胸を挿刺りて除つて捨なば、今の此苦患を脱し得むと悶搔くに異らざる也。加之も其中には狂亂して四邊の人を殺傷する者さへ多き也。是れ文明毒の所生にして。治方は只だ人間の精神上に於ける『生命融一』に迄進ましめ可く、身的物的の文明と心的靈的の文明に變革するの他に道あるべからず。若夫れ政治上と併せて社會上まで一足飛びに革命すべく期せらるゝロシアの革命など。事相は重大なりとは云へ。社會組織の制度を革めむと欲するに過ぎじ。革めて後に人生としての歸着を何處に置くつもりにや。畢竟的なき弓よ矢よ。

交接せねば子の出來ざること動物と異ならざる人間では無い乎。革命せし進も。靈の分子が毫も加はる莫くば。矢張世は食色の争ひを繰返すのみなむ。如是紛々たる鬭争を全脱して。靈境同游自他平等の大乗界に入るに非ずんば。人生は尙は兒戯と知る可し。

世界には餘りに人間染みたる人間のみ多くて。露政府が克つ乎革命黨が克つ乎など。淺猿しき成敗利鈍の咄しのみ爲し居るが。眼は高處に著けよ。脚は地上に踏め。前途の又前途は地下地上又天上を合せたる上の革命也。

日本は。尙は和樂の天地に姑息し得る便宜が残る故。無政府黨など出されども。世界の中心たる歐米にては。早く既に文明の制度一切を破壊する無政府主義が流行し。列國皆これに手古摺らむとす。

蓋し『國家てふ者は或種の人民が共同生活を營むところの一の團體に過ぎず而して人の生活は自己の快樂を意味する愛の爲なり』と斯う個人側の獨斷を定めつらむには。國家は株式會社で個人は株主で。勝手に付株式を賣放ちた時が縁の切れ目たるが如くに。敵國に歸化せし進惡しからず。又我身の邪魔と思へば國家を破壊し政府を無了する事も自由意志の發動ぞと云ふ風に成りて。愛國心など云ふものは馬鹿見た様な咄と爲り。兵役と軍備税とは御免を蒙ると主張し。其を聽かなきやマイマイトと云ふ段に越く。此は無政府主義の起る根原なり。而して一方には積極的功利黨や快樂主義の人々あり。自己の思ひ込みし戀愛の爲には相手に對する一心不亂の眞實を要具とすれど。處世の爲めには正不正を問はず。則ち免かるれば法律も畏るゝに足らず。處世の秘訣は巧なる虚偽に在り。教會堂は構鬼の

便宜上入るべきもの。政權は勢力強き同類の私用するもの。平和とは、自分達の勝手氣儘を行ふて金を儲け位置を作る保障の爲に、警察や兵隊や艦艇やを備へさせて、商工業上及び彼我主張の有らゆる利害相反對する同國民や他國家を威壓する状態の繼續を意義す。故に己が社會の貧民窟には、自己の使ひ切れざる金の内から目糞ほど投與して之を慈善と稱すれば、公德は相濟むものなり。姦淫は自由を耐忍する自由にして、裁判は不道德を變形する道德なり……との様に風尙が馴致され。正義てふ者は便宜機關より生ずる一時的の結局の謂にして、永久不變の天道天理と合體する神聖の者とは受取られず。寧ろ是非善惡の理性に執着すれば事功の迂濶遲鈍を結果して我も邦も文明に後れ實力を失ふべしとて。昔の人に聞かせなば飛んでもない畏しい了見と身震ひす可き了見を以て日日刻々を送る。是れ歐米社會の大部分を支配する個人主義の風潮の真相なり。而して社會主義の徒と雖とも。其大半は斯る風潮内に漂流して自ら怪まざる也。

蓋し神の實在を確認して。國家てふ者の成立は天命に由れりと信じ。我國家は正義の化身なり故に愛國と人道とは一致すと。此を觀念してこそ。正氣は國民を彌綸する原力として發揮され。政治法律教育經濟の諸人事は清淨健全に運用され。時に臨みて身命を惜まずして正義の犠牲とも爲る張合の生ずるなれ。若し夫れ正義てふ者は國家と伴ふ者ならじ。眞面目に正義を守る奴は馬鹿な奴で、其は國家の權威を私業私福に轉用する少數富貴連や惡政黨の喰物ぢやと我人共に思ひ做す實況を呈しな

ば。其時國家が人の良心に向て愛國心を要求する資格なき者と化するで有らう。而して斯かる社會に發生する文明は異教異邦の民を服従せしめる理由を缺かう。故に西洋耶蘇教國が亞細亞洲を壓伏し得たる時代は。過去に於て彼等が愛國と人道との一致てふ神聖なる觀念風尙を持せし間の事。個人主義の放縱又は正氣の銷磨に伴ふて。國家を一個の私用道具と見做し掛けたる近年の西洋列國は。正氣充ちぬる日露戰爭當時の日本の如き國家と戦闘せば。假令負けざる迄も克てぬが道理で。兵力器械力が劣りて然るにはあらず。自ら國內の人心を以て自己の勢力を崩潰する故。天地に誓ふて斃れて後己ひてふ靈力に敵し難き次第。即ち露西亞の強大を以てして日本に克ち得ざりしは。正氣の集中が劣りし外の原因あらざる也。

されば此理を反面に推せば。日本の國家とても。若し國家の私念に由る功利熱に陥りて。正義の化身たる實を滅せむには。其に準じて愛國心てふ正氣が減り行く勘定にて。現に國家の正義及威權の發動てふ事が。中央及び地方行政司法乃至教育風尙の上に。戦後却つて薄らぎ行き。役人や軍人が如才なき方を専らにして。敬虔剛健の性格を後にする傾向は。男女學生の淫奔。貪慾政商の跋扈と相俟ちて。段々と世界共通の文明毒に引込まれ居る都合なり。

故に日本が誠に永く國家としての尊貴を發展せむと欲せば。开は常に正義は我と與に在りてふ民的信念を長養する爲。凡そ列國が人心潰裂に困む所以の個處を避けて。堅く文明毒を防遏し我の所謂一人

類の不正を許さざる正氣の文明』に上下の精神を傾注せざるべからず。而して开は。

第一。維新以來の謬見たる西洋文明崇拜の過度を反省し。世界の不正は天人共に之を糺すの日ありと安心立命し。功利の上に道念を置き智慧の上に心靈を位せしめ。依りて以て日本領内だけは飽まで清淨健全ならしめべく自ら正しふするを期し。人力以上に天力を確認する趣旨及び天道を體するの目的に副ふべく教育の主義方針及び設備を定め。次に政治局面の掃清を逐一實行し。且つ大乘的精神に由り社會問題を變理するに在り。

これが出来ずば。日本國家と雖ども。亦世界の多分に洩れず生存の狂熱に焼かれ。軍備愈々張りて却つて國內の人心及び軍隊内の風紀上より手火事を出すに至らむ。

今日に於ては。予が立言に耳を傾けむには懶かるべき様に日本は大平樂なり。此は天道てふ事と國師てふ事とを忘却し了して只管人力と科學とに没心せる維新以來の顛倒に惟れ職由す。

シカシ。日本は到底西洋以上ならざる可からず。西洋各國の利己主義拜金主義力闘主義に超越して。世界人類の齊しく由らざる能はざる蕩々乎たる王道を施さ。靈心上の大乘的教旨を明かにし。宇内をして日本の啓發する文明に浴せしめざる可からず。

要するに。世界は、四種の革命の外に。無政府主義と云ふ者さへ出沒する險しき思潮に漂ひつゝ在るが。是等の『人心亂』は之を西洋文明の不具不正に基因すと謂ふも誣ひざる也。實に文明は眞善美を人

間に授與する者かの如く稚直に受取る人を愛しき。彼等は我身の手前ばかり見て而して博く衆民の苦痛及び社會の多方面を視ざるが故に。感服し安心し得るなり。猶ほ寵兒驕娘の美衣好玩の外に餘念無きが如し。嗚呼予は驕娘寵兒たるの幸運者たり得ずして。世界の事を我事の如く感ずる豫言者に従はむとす。米國の有名なる博識家にして敬虔の情篤き豫言者スパングラ博士が。その正氣直ちに天人合體の妙趣に吻合する者有りて。昨春左の通り豫言を發表せる事の尊とさよ!!

曰く紐育は桑港と等しく運悪き都市なり今後二年内に大地震同市を襲ふ可し、桑港は罪業深き都市なりき、昨年十二月余のヴェスヴィエス山の噴火を豫言するや之と同時に大地震の桑港及び同沿岸の都邑を襲ふ可きことを豫言しぬ蓋し神は桑港の罪深きが故に其地震に搖られ火事に燒かる可きを告げ給へり、然り桑港には阿片吸引場賭博場を初として有らゆる魔窟あり誠に罪深き都市ながら紐育の更に一層罪深きに比ぶ可くもあらず紐育にては眞の神を崇める者無く市民は貪婪卑劣なる黄金なる神の前に頼づきつゝあり夫の「ウォール街」は凡て罪業の中心なり人を掠め人を虐ぐる凡ての計畫は同所に於て企まる何となれば金ある彼等は法律よりも國家よりも更に一層有力なれば也然れども神は遂に彼等を恕し給はざるなり惡銭を以て金穴の建築したる邸宅は搖られて彼等の頭上に落下す可し即ち先づ「マンハッタン島」は造次輕微なる震動を感じ紐育灣及びロング島にも多少の異變を見る可く而して最後に大々の震動となつて「ウォール街」は微塵となる可く「スカイスクレー

「天を靡せる大建物」は地に委しマンハタン島は桑港と等しく火事の爲めに烏有に歸し自由の紀念碑は倒壊す可し尙ほ之と同時に大暴風起つて彌が上にも市民を苦む可く最も苦痛を感じるは金穴と異教の牧師にして正直なる貧民は能く免るゝを得可し又西班牙にも今後數箇月内に大地震起る可く露西亞にては近頃河水漸く枯渴せんとす大旱魃に苦しむの日ある可し。博士は尙ほ左の諸件を豫言せりと云ふ。

- (一)露國の瓦解(二)土耳其の顛覆(三)露帝の弑害(四)米國南部の人種的競争(五)合衆國の大洪水
 - (六)ペレー及びボホカーターヘル山の噴火(七)海上の人命大損失(八)米國西部二市旋風の爲破壊
 - (九)西珠牙の叛亂(十)歐羅巴全部の大動亂(十一)温帶諸國夏期の大暑熱
- 豫言事項の中如何は予必ずしも問ふ莫し。予は豫言の事項よりも。這般の豫言を敢てせしめたる彼が胸中烈々の白熱を發歎す。ア。胸中の白熱よ。爾は地底の劫火ノ者の權化に非ずや。

七、日本海海戰の靈的教訓 天來的感激の實現

人は生涯に一度乃至幾度も。自己の運命の危機と自覺する事境に際會することがある。爾る時には極力を揮ひ至情を致して。斃れて後已むの外無しと覺期するが。斯くて絶對絶命の域に押詰められたる末に。運命の活路が恰かも偶然なる如く天授なる如くに閃發すること珍しからず。扱此際に於ける彼は物力や人力を超越せる或者有りて彼を助け、乃ち不可能を轉じて可能たらしめしものよと感激し。頓て天佑とか冥護とかの辭句を我身上に實感するを常とする。

這般の實感は。即ち英語の所謂インスピレーションの著るしき者にして。その際に人は我知らず靈氣を吹込まれて。己が神明と接觸したるべふ意料以上の精神力を感得する。此は人の氣根の厚薄に因りて。或は一刹那に起りて一刹那に消ゆる事もあり。又は若干時日に連續する事もあれど。要するに信仰の原機はインスピレーション即ち天來的感激に在ること。東西の宗教家齊しく認識する。

人が靈氣に觸れて其左右する所と爲つた時の力は。不思議に無量無礙無所長の力を成す。千古の怪雄マホメットが宗教軍に發揮せし壯絶猛絶の力は。その適例の一なり。但し靈氣に觸れしむる動機は往々迷信より來るを免れずと雖ども。其とて一向に靈氣發動後の自在力を妨げない。例せば。古代羅馬人が尊崇せる「戦争の神」の宮殿は。戦争の造る時に必ず自から扉が開くとて。彼等は只管迷信せるが此迷信は彼等に「神は我等と與に在り」てふ信仰を與へ。乃ち不可抗の靈氣に感染せしむるが故に。戰場に出でての彼等は常に死を畏れず。又戦ふ毎に必ず勝ちた。日本にても。戦争起る毎に箱崎八幡の鳩は、神使として戰場に飛び去り大和武士を冥護すと傳説され。日清、日露の兩戰役に於て。此傳説に

靈氣を吹込まれつる兵士が數多かりし事は。疑を容れない。

武道入神の宮本武藏が。播州在に於て。某と云ふ兄弟二人の劍客と果し合を約せし折。敵は門弟數百人の助太刀を擁せし中に己れ一人斬込む難場なりしが。決闘場たる松原に行く途すがら。とある路傍の天満宮を瞥見し。セメて神力をとの意念萌しければ。祠を仰ぎて振鈴引き鳴らし。合掌默念、將に冥助を禱らむとす。ソノ一刹那、……。武藏思はず流汗身に滿ち。ハット自ら斬ちて以爲らく。吾この期に臨んで神に頼むとは心怯れたり。ア我ながら武道不覺悟よと。其ま、天満宮を振向きもせで。一目散に韋駄天走り。忽ち敵の群集せる真つ只中に躍入し。終に數百人を斬て捨たりける。箇中の武藏は。天力人力の合致せる寂靜不動。神通自在の事境に入りし者にて。神をば意念の道具に使はず。ハッ扱この期に於て禱ると云ふ事ソレ自體すら誘惑也、天魔の魅入也と靈覺せし其處が。即ち武藏の天來的感激なり。

露人が戦局の外交及び作戦に於て。氣を使ひ情を用ひ智を逞くし勇を恃みしことや至れりき。就中、東道艦隊の總大將ロヂェストウエンスキーこそは機心及び精力の筆頭なりけらし。されば彼は露軍の奉天大敗迄は。亞非利加の根據地に日和を見。愈々鐵嶺以南。日本軍に歸せる明治三十八年三月十五日の其翌十六日に。露政府はロヂェストの進發を電命した次第で。露人は武術の剛の者ながら武道入神の妙を解せざることば茲に顯然たり。何となれば。若しバルチック艦隊が成敗利鈍を度外に

置きて。陸の奉天會戰前に。藝地に東航せば。而して全滅の覺悟を以て進二莫二進攻せば。其は敗るゝと雖ども尙は以て大局の戰爭に運命の轉換を附與し得たるやも測られぬのである。然り而して露人は神を侵略及び榮華の道具に使ふ程の奴故。此段入神の妙に入り難かつた。爾してロヂェストも亦國性を代表し。安南海に來てから佛國領海に押掛食客を演じつゝ、露人式の駈引を爲すこと四十有餘日に及べり。何ぞ夫れ人間的なるの至れるや。此四十餘日の路草は。恰かも目に餘る大敵に向ふ途端に路傍に御座つた天満宮へ歸命頂禮したと同然である。而して頂禮が永過ぎた。否。武道入神の我宮本武藏が鈴を片手に靈氣倏發してツット身を震はせ。乃ち無三無四に奮進しける様の摩利支天の大威力がロヂェスト小父には縁が切れた。

禱るを慚づてふ靈氣が其ま、神の導きである。武藏には此時、神が憑り移つた。其れ故人間力ならざらむ程の全勝を獲た。

靈氣の感得は。右の如く種々異様の動機に因て生ずるが故に。一概に云々の方式が天來的感激を獲る道なりとは指示し難い。けれども。人は人生の行路上に於て。教へらるゝこと無しに。先天的に、無意識的に。之を獲る機會を缺かぬ。其は當に個人のみならず。國民一統が擧つて偉大なるインスピレーションに接する場合さへ有る。而して國民一統の靈的感激は。早晚國民的大理想の長養さるゝソノ萌芽として用立つ。

ココに最も大切な條件が附帶する。

六四

開は。他事ならず。國民が假令偉大なる靈的感激を博して爲めに目ざましき大開運の首途に上り得たるにせよ。苟くも國民が靈力の結果たる眼頭の華々しき事功に眩迷して。其本因を忘却する時には小人は玉を抱いて罪有りてふ謎の如く。天佑を専有したらむ様の増上慢や獨斷の見に陥りて。乃ち信有り行有る國民的大理想ならで浮誇散漫なる國民的慾望を醸成し。爲めに往時の靈的感激が却つて今の仇と爲り易き事を慎戒せねばならぬ。而して慎戒の實を擧げむには『インスピレーションのリアリゼーション』即ち天來的感激の實現と云ふ事が大切である。其が即ち所謂附帶條件。

人は。谷の清水を飲みても音楽を聴きても美人の風采容顏に接しても力士の肉體美を視ても乃至名人の浪花節を聴いても。微妙の箇處を其に發見すれば。得も言はれぬ感情に我を酔はしめ。従つて自己身當に意識以上の生氣を喚起する節が有る。彼様の感興は亦是れ一種の感激と見る可しと雖ども。兎角五管より來る感興は心靈に迄は刻み込まれず。朝に甲事に感じても夕には乙事に心移りて。洵に水性の者浮動質の者である。

『天來的感激の實現』とは。即ち右等五管範圍の感興の移り易きとは全然反對に。感興が畢生的、全幅的、不滅的なる事を謂ふ。感興の字の字は。一物一事が同質又は同氣の他物他事に應じて類似又は同機軸の實形實行を生ずることを本義とす。故に感興は。必ず感せし所の者に應ずる實形實行有て初め

て其である。シカシ當世の輕便學風。空智識の教育に没入する人々には。感興てふ事が不可能である。従つて國民が如何に天來的感激を博する機會に遭遇しても。其をば永久に確保する事は殆んど絶望に近し。

痛ましや。日本の學校教育法は。單に『知る』てふ事を學問の全部と思惟して。感興若しくは體得するてふ事をば全然拋棄して顧みざる也試みに學校教員等の教育方法を觀察せよ。先生方は小學生徒に貯金を奨励し給ふなり。何等就職の時間を有せず従つて必然的に無收入なる小童小女に不所持の金錢を郵便貯金に預けよ逆勸誘し給ふ也。此は先生方の意中には勤儉の美風を實地に教導する方法とぞ覺ふるが。實際に到りては。小童小女は父兄より金錢を貰ひ受けて切手を帖附するに競ふこと必せり。然れば此は乞食根性の養成を結果するもので。勤儉の口上は却つて乞食根性として感興し來るのである。將た又先生達が倫理を教ふるや。忠孝てふ者の死せる模型たる古代人物を歴史的に講釋して聽かせて。其を記憶せしめるを頂上とし。社會とは何等關係すること無く現在の活事物に照しては何と應用すべき乎も知れざる倫理の文句をば。蓄音器的に生徒の頭腦に詰め込み。其をば先生の前に於て巧者にしゃべる丈の能をば倫理科の成績と立る也。斯くては生徒たる者。安くにか自己の品行を畢生に支配する道念の感興を求めむ。

夫れ日本國民一統が。近き過去の對露戰に於て。死活存亡の危機を蹈み。絶對絶命の事境を閱

六五

し。やがて意料外の大勝を獲得したる彼時彼境。國民中の意力情感の健全なる者。誰かは運命の微妙なる消息を箇中に讀み。天力我に與みして乃ち然りと謂ふ至深至大なる感激に撲たれざりけるぞ。然り而して道間に獲たるインスピレーションが各人の精神に感孚すること。畢生的全幅的不滅的なる有らば。則ち世道人心は不盡の活靈に氣呵されて勃焉として大いに興起し。行政面も社會面も外交面も齊しく大乘的氣象に溢れ正氣の宗たる我日本國純粹無私の王道を以て全世界を統一するの日有らしめむてふ國民的大理想が。實形實行に顯現す可き筈なるに。左は無くして。精神界風尙界は戰前に比して幾層の墮落を呈し。士林の人物に正札が附き。文壇の産物は淫臭を増し。都門の人情は幕末に近似する現狀なるは。是れ日本國が天與の靈的感激に孤負する極重の罪障に職由する者に非ずして何ぞ。禍源は夫れ無精神の教育に在る歟。

本具自有の心靈が錆び且つ朽ること。鐵糞てつふの如くなり了らば。則ち已む。苟くも然らずして皮下一脈の血管を留めるならば。對露戰事の與へし靈的教訓を日常に回顧せよ。而して汝を生息せしめる國家或は世界は。汝が事ふる紙幣、勳章、脂粉、株券、議席、喇叭節等の外なる者に依りて成立する所以を反省せよ。殊に日露戰の決勝本戰たりし日本海海戰を回顧して天與の教訓を體得せよ。

抑々日本海海戰の性質たるや。我にして一步を此に誤らば。滿韓戰地と我本國との聯絡忽ち中斷され在外百萬の陸兵は或は將に糧に困み彈に窮して彼れ兇露の餌と化せむも測る可からず。既往四

百七十餘日間、舉國の名將烈士が夜と無く晝と無く心血骨肉を犠牲として頼たのいに獲得したりし海陸連勝の効果は。楚人の一炬、秦宮煙に歸すと一般。戰局に優越する所以の根礎爲めに盡盡し去り、攻守の勢い彼我に轉換し、國家は將に一盤石下の累卵たらむとせし也。則ち事是に至らば海戰初發の際挺身して難に赴ける閉塞隊諸氏の本意。旅順封鎖開接射擊等に不可抗の險風惡濤を凌ぎし各艦艇生者死者の苦心。鹽大海揚陸の爲めに破天荒の方法を案出したる各參謀の韜略。黃海の大戦、對馬沖の弔い合戦に首尾よく敵の主力を撃碎したりし東郷上村兩提督及び全艦隊勇士の成功。旅順攻陥に要せし攻圍軍幾萬の死傷、無量の慘忠。遼陽沙河奉天の三大戰に於ける戰史空前の武名戰功。其總ては。彼れ敵國最後の力争を懸けたるバルチック艦隊の唯だ一戰の武運次第にて、ア、ア、殆かりし。我は唯だ呀つと云ふ瞬間に總ての此掌中の珠を萬仞の崖下に墮し去らざるを得ざりしよ!!

嘗に此に止まらず。本來日露戰爭たるや單に滿韓の土壤人民を争ふの戰に非ず。實は太平洋海上の問題なり。世界的商權の得喪問題なり。彼れ露西亞なる者は歐亞一貫の鐵道を築成して。歐州と極東との貿易貨物をば從來の海上輸送を全變せしめて陸上の彼が手中に圖收し。大連を經營して亞細亞洲最大の商業中心點と爲し。日韓海峡を奪ふて旅順浦鹽を直通呼應の姉妹軍港と做し。以て日本を絶海に立往生せしめ。以て太平洋上の覇權を掌握し。傍ら陸軍の力を以て支那四百餘州の主宰者たらむと欲する志望を百年前より堅持して屈する無き大野心の國にして。由來世界の文明が印度より波斯に、波

斯より小亞細亞に、小亞細亞より希臘に、希臘より羅馬に、羅馬より歐洲本土及び英國に、夫より米大陸に、米大陸より日本に、日本より韓半島及び支那大陸に順次遷移する歴史的大潮流即ち西へくと進むなる、文明西漸の大勢に絶對的反抗を企て。鐵道政略と太平洋政策を以て此世界的な大勢を逆轉し東から西へと逆か捲に捲き立て、萬邦をしてスラヴ大帝國の膝下に跪拜せしめむと期すること。ロシアの本面目たるが故に。日露兩國の海上決戦たるや兩交戰國各自の勝敗及び興廢の岐れ目を超えて直ちに是れ『世界の氣運が西歟東歟』の決勝戦たる所以の深大玄遠なる意義に歸著せしものぞ。故に敵國が海軍の精銳、否、寧ろ極力を揮擡して敢然として最後の力争を我に挑むに當り我の之に應じて闘ふは。是れ尋常の勝負に非ず。其繫る所は全宇宙の氣運に在り。

此海戦たるや正に是れ天地神明の面前に於て大日本帝國の至誠一念を以て國家の天命的方嚮右歟？左歟？を驗する靈的大作業たり。宇宙の最大神秘的因縁の發動たり。

吁。願れば重大なる曠れの勝負よ。否。言語道斷の物凄き決戦よ。否。否。世にも人にも又と有るまじき神聖非常の海上戦よ！幸福なる哉斯境斯時に於て生れてこの絶特非常の海戦を聞見する世界の人の。殊に天龍渥き哉この人生稀有の日露海上決戦に参加せる彼我幾多の將士卒。苟くも斯戦の意義と神髓とに想到する時は。天機忽ち髮振として爾が胸臆の秘線に觸れ。聽く可からずして而かも無聲裏に靈調を投下して爾が心身を玄々冥々に導き去る底の感無ならむ耶。戰士の誰人か成敗利鈍の沙汰を穿過

し了して這間の事竟に人業ならぬ神業の顯現中に我知らず參して唯だ時と場合のまに／＼我精力の至極を貢獻する者ぞと直覺する無からむ。蓋し敗れたりと雖どもロザエント以下幾萬の露將士は這般千載一遇の非常事に一方の競勇者たる名譽を誇るの權利を有す。否。それ以上彼等は神明の特賦せる靈機の實動者たる至大の寵倖を荷ふ者たり。然るを況んや、嗚呼無殘の敗歟に終りし敵人すら然り、然るを況んや神武無倫の帝國海軍男兒其人をや又況んやアツヤ子孫末代醜辱の奈落に落ちむする危機より天風習々たる平和の空際に迄提撕し將ち去られて國土財産俱に徹塵も傷けられず晏如として戦捷を謳歌し得る所の我等國民の祝福をや。

蓋し奇蹟は獨り宗教家の範圍に限られじ。古來幾多の奇才が自己精力の極致を揮ふに際し宇宙の神靈に觸著し大威力大自在力を自己の意識以上に實際に現成するに至るは皆所謂異蹟に屬す。即ち例へば『騎り跳んだ跡で怪術な淵の幅』一念果したる後より我來し方を振返ればテモ扱も危険無上の場所をば我は越して是我は如何にして此難處をば脱け得たりけむやと我乍ら我身の力の不思議さに疑ひ惑ふぞ乃ち彼等自身より見れば天祐＝局外後生より觀れば奇蹟の因て起る所以なる。故に一念果さるるに於ては百念無用也。一念力は即神通自在の妙力なり。戰鬪力の秘源や亦之に洩れず。各將士卒の一心の凝りし力こそは絶對無敵の大權威を構成す。

日本海大海戦に於ける我帝國の全勝は夫れ戦史有て以來の絶大なる異蹟歟。

敵國人最後の力争の唯一方として精を凝し膽を注ぎ。經營慘憺、苦航一百八十日。ハッシ海峡を北東に轉針するの一刹那。上帝に誓つて萬死を賭し。意氣凛々。雄心烈烈。日本最上の要害と恃む對馬海峡を指して驚眼張ること一番。日本全艦隊を蹴散して悠然、北辰星下に祝盃を舉げむと。結束して相呼ぶ者艦船艇合せて三十八隻、二十有餘萬噸。屋の如き大濤を笑ふて。以て乃公の行を壯んにする好下物と爲し。日本艦隊は勢力を分けたりとこそ覺ゆれ、あな面白し、勝誇りたる東郷が半白の首級を見るの時節到來ぞと艦脚蕭々。ユラリと壹岐水道の尖端に乘入りし五月二十七日の黎明。

嗚呼戦々は魔物か勝負は運歟。此時五大洲に生存する者の何人か能く破軍星の劍尖が日露の執れに向きし乎を豫想し得む。而して哨艦の迅報未だ幾ばくならずして。息を殺して附け狙ふ片岡艦隊。避けて機を察する出羽艦隊。一氣に敵の前路を扼して時こそ來つれと漂氣の彼方に沈々たる東郷上村瓜生の首力三艦隊併びにウエ好個の長物ござんなれ大を以て小を侮らば野郎の咽喉に針を吞ませて進せべし來れや來れと肝膽、五體に滿つる水雷艇驅逐艦の決死の兵者。天をも地をも我身をも唯だ此一戦に擲ちて音に聞くネルソンがトラファルガルの血戦も物かは。史に遺るインヅキンシブルアーマダも我眼前の敵に較ぶれば數ならじと。丹田寛かに目光火の如く三笠艦の檣頭忽ち『皇國の興廢此一舉に在り各員其れ努力奮闘せよ』の命令信號を見るに及んで數萬將士の視線悉く之に集中して一念只だ任務に結び、浩々乎耿々乎復た鐵塵の以て玲瓏たる心地を遮る莫きの瞬間。無限の感激は過去現在未來を

眼頭直下、一幅の活局面に融化し去り將ちて、只だ深き壁の空の入聲に精魂悉く相合一せしぞ此海戦の始めなり又終りなりけるよ!!

去にても露國最偉の海軍々人ロヂェストウエンスキ、ネボカトフの両提督、參謀中將エンクキストの諸家を首め擇りに擇りし海戦の傑物がヨクもく待構へたる我獲括の圖に符りしもの哉。マンマと首尾よく隻鱗一介を剩さず我戰略の巨網に投入して揮て扱いて衆魚互に相撥刺し相耦彈し海色皆紅くなるを致すの壯功は扱も不可思議と思はる、迄に完全無缺の行き方哉。如何に何と言ふても、我一彈を放てば彼亦一彈を酬ひ、彼レ戰艦一を沈む程の猛闘には私の砲艦だに其に準じて大破傷せぬ道理あらざるを、是は又何たる事ぞ。二十七日の午後二時より翌二十八日午後に至る迄の僅々三十時間に於て敵艦の撃沈捕獲合せて二十九隻噸數約十八萬噸。生きて還る者僅かに三艦とは。生きて還る者僅かに三人てふ元寇の故事に照應し。他の二三小艦が恰かも鮪網を小蝦の脱ける如くに逸し去りし有るのみ。而して我の喪ひしは眞に三隻の小型水雷艇に過ぎざる也。

千秋萬古、宇宙の感慨を語る海上の波濤は我等に幽かなる私語を與へて曰く。

見よ。爾等日本人は。道に忠なる者は最終の勝利者なりてふ宇宙の意志を世界人類に現證して。以て滔々たる物質的文明に醉迷する當代世界の人心が動もすれば薄志弱行、形的成功と俗的榮達に偏頗し往々宗教と道義とを實用視せざるに至り墮落と腐敗とは各自の眞正なる幸福を賊害するに對し

て。靦然として根本的回顧を爲す可く彼等に至純なる動機を與へ。以て社會人心をして排進の炎境より擺脫し。己に克ち禮に復へるの清境に達せしむる唯一の清涼劑たるが爲めに爾等日本人は世に出でたり。末世の機根は現實の事相を目撃せざれば省覺せず。故に天は利義同根てふ事の實際的證明者として日本人を降せり。故に日本人は人道の己む可からざる於て初めて戦ふ。故に日本人は戦へば必ず克つ、

と。國民一統が道般の偉大なる教訓を海戦全勝に於て心から感得せば。因て生ずる靈力は無限にして無量ならむ。刮目せよ國民。卿等は斯くの如く一たび神靈を事上に享受せる也。更に予が獨自に得つる神靈の實驗を語るとも。豈異とするに足らむ耶。

八。人本尊東郷—驢事馬事

大凡そ世界列國の最大難件たりし日露戦の本末に關し。誠に神明の導ける靈的行路に合致すべく精神の開け事境の成りし大乘漢は。先づ指を東西の二傑に屈す可くある。二傑とは日露決勝の日本海海戦に於ける人本尊東郷平八郎氏と。平和媒成の中軸たりし米國大統領。一ズメルト氏。この兩漢子は一體兩面の者たる戦争及び平和に對して。各自も亦一體兩面たる神使として完滿に本務を實行しける者である。

露國の東遣艦隊がアノ時にノコノコ遣て來て呉れずば。全滅の壯舉も起らず。従つて兇露屈伏の期を遷延せしめたらむに。ワザ／＼全滅さる可く來著したのが土臺から神意天數の手續さで有る。而して此手續さ上。心身の精力が時、處、位に合ふやう個體に集中せる者。即ち心靈が神物一切と融合する者。運氣の受用根を有するが故に大開運を實現する。其が即ち此場合の日本海軍の否、帝國の總代たりし東郷氏で。是は全吉に歸する。之に反して。ロヂェストは運氣の受用根たらで運氣顯現の材料たりしが故に。其事が其ま、彼に取ての全凶と爲り。開運ならで没運の種と相成た。

天道は親無し又私無し。當方が神物人一切の靈威即ち全宇宙の眞生命と與に融一するや否やが。我の吉凶の岐れ目である。事の吉凶は我の脚下次第である。即ち東郷にバルチック艦隊を全滅させて。ロヂェストに平和の趣搦を完成させるのが。元原的神靈の顯現の手續たるに止まりて。別段に東郷が運命を左右した譯では無い。運命とは即ち人事の靈的行路である。元原的神靈の顯現の手續さに於ける曲折が其である。

されば東郷さんは。豪いから尊といのでは無い。人格が無上に尊い處が豪いので有る。人格が無上に尊い處とは。東郷氏が「靈魂の人」たる處を謂ふのである。

武功は精力の展覽に過ぎない。武功にして禮拜せらる可くば。世界の局面を一新せしワットの蒸氣力も亦當然禮拜されやう。故に豪いと云ふ方面の品定めには俗耳目や阿世的記者が在る代りに。尊とい

方面の免許には。識者具眼者の精神的鑑識が要る。

『靈魂の人』としての東郷氏に予は跪拜す。予は。武功の人即ち力量の人としては先輩ナポレオン一世も在たッけと記憶し且つ其が毫も尊くあらぬを思ふ。

智、勇、辯、力、四つの者は天下の達材なりと雖ども。是等人事的成功の要素は。その極限に達したり。尙は人間本有の無盡の精力の一部僅小なる偏向的發展たるに過ぎず。『辨廢の泣き處』は。智にも有る。勇にも有る。辯にも力にも有る。即ち窮まる所有るが故に。豪いの高は知れて居る。

我東郷氏に尊ぶ所以は。彼れの人格が神物人の靈威に合體すべく至純の氣魄。全剛の精根を成せるに存す。即ち其處が彼をして『靈魂の人』たらしむるからで有る。

抑々人は。人算を盡したる上に天算に歸依し。假令ば天地反覆し大地は火に焼かる、時と雖ども神明の導くまに。行動して。悔むず驚かず。立脚常に中心力を失はず。ツマリ己が主體をば宇宙の意思と一致せしめて寂靜不動なるに至つた時が。ソノ時が即ち『靈魂の人』である。

然るに比量分別と云ふ意識の働きの無量にして時を嫌はず飛び出で、我心靈を遮ざるが故に。人は殆んど靈境に入らむとする大切の時に暨びて。意識から引戻さるゝが常で。大抵の英雄では。ドーしても信念を動搖させずに居られぬ様。意識から責め廻はれ。果ては。ア一過てり、此方よりは彼方が上分別ぢや……と。或は意識的に。或は無意識的に。氣を外らすを免かれぬ。無意識的とは云へ。やは

り意識から動かされて當人立案なる丈である。

其が即ち『誘惑』と云ふ者で。誘惑は總別、他働的なれども。強がち惡魔の有心故造より成るものならで。時としては善意誠意から來る所の能働的受働的の二様の誘惑が生ずる。

而して天頂より天底に(天文学に云ふ天頂天底)一貫したる直線に立脚し神明と與に形影相倚る迄の事境を成す『靈魂の人』には。誘惑が無い。主體たる心靈が意識を超越して。意識をして主體を左右し能はざらしめる。

バルナツク艦隊が詭計縱横して日韓灘を乗切らむと欲するに當りて。日本艦隊の一兵一艇をだも他方面に分たず。敵總督は對島沖を押し通るに極まつたりと人算天算兩つながら精神に收了し。而して後は。有らゆる報告が我意識を動かすにも拘はらず。愚の如く啞の如く構へて。沈々乎として鎮海灣根據地に安處し。徹頭徹尾、寂靜不動なりける我東郷提督の事境たるや。正に是れ大雄無所畏なる大乘漢、大宗敎家の靈處を全具する者で。決してチャン／＼パラ／＼の戦争屋若しくは六韜三略の智謀家の企求し得る限りでない。

東郷大將の尊とい處は即ちソコで有る。

大將が『無言の豫言者』とも稱さる可き天人合體の處こそ尊とい本である。大將は智力や武力を恃む人間間的のソレ以上の處に安心立命するから。神物人一切の靈威が爲めに感應して言語道斷なる戰捷の奇

蹟を演せしめたのである。而して武人として豪いのは甚だ以て末節に屬する。則ち天下後進の士が國の爲めてふ限られたる奉公心に由りて大勳位、功一級の東郷大將を貴とふンレ以上。更に人力天力并せ禮する大乘機根の活模範として東郷氏を讀み。以て氏の人格を我に體得し感孚すべく精進努力するあらば。开は頓て絶對靈を自照し即身即佛の事境を開成し。一人は即天地なりてふ大自在力を獲得するに至る所以の賢き方法であらう。

蓋し東郷氏の脚下が堅實正大にして些の開然する所莫してふ次第は。當にマンマと首尾よくバルナツク艦隊を其法力に掛けたる乎の如き事迹から見て爾云ふに止まらず。實に氏の戦前戦後に一貫する氣格風神が其を證明する。予嘗て之を讀して曰く。

平八郎東郷氏は武功の人として大なるよりも。賢良の人として偉なり。

謙虚にして量、海の如し。剛毅にして舉止わざとならず。赤子の一類にだも忍ばざる仁者にして百萬の敵をも肩とせざる勇者を兼ね。『君子にして英雄なる者』の標本たり。人は東郷をネルンに比す。而れども开は海戦の本尊てふ境遇上の對比のみ。ネルンの性格は沈毅堅忍の極處に在り。彼れ尙は一物の堅く留まる底の風神を脱せず。我東郷氏の天真朗々、神氣渾厚。扱て一箇傑異の處をと求めて。遂に斯人より捉ふるに物無く。西郷南洲が鑑識して品藻しける『是は東郷平八郎と云ふ馬鹿者ぞわす』の氣味が纔かに其一貫の面目とも稱す可き曠達無作の風格に至り

ては。ネルン蓋し頗る非なり。

東郷は政治家にあらず、經世家たるの靈機を天京に領有す。

凡そ丈夫の本領てふ者の完全なる代表者として彼は世に出たり。世界が噴々として稱賛する彼が嚇々の功名は。東郷に在つては寧ろ飯後の喫茶。晴餘の飛鳥。亦只だ眼頭の尋常事に過ぎず。彼は戦ふて克ちたる後も未だ戦はざるの前も。同じく一個の東郷平八郎にして足れりとす。ハ艦隊を全滅して歸來、友邦の艦隊司令長官ノール大將より握手を請はれし時。念頭恐らくは只だ『艦事纔去馬事到來』の感ある而已

賢なる哉斯人。之を鎖れば彌々堅く之を仰けば彌々高し。

更に思ふ。東郷の心胸面目は。我海軍一統の心胸面目なり。絶代の偉功を樹て、自ら功に居らず。部下將卒は東郷と與に之を。陛下の稜威に歸し。陛下は亦東郷以下と與に之を祖宗の靈威に歸し奉る。故に君臣期せずして大廟奉告の悃誠に一致し。如是叱咤風雲的の壯烈過ぎ去りて東郷も無く獅子的勇士も無く。唯だ靈照大圓なる神體の光明を遺す。國魂の精や實に此に鐘まれり。獨り惜むらくは武臣に全人有て而して文臣に宰相の器無し。

願ふに日本國は。明治以來、智識と錢と功名との速成を要する時運に急立られ。才物も勇者も學者も澤山出來たなれど。常用器用の人格の外、世道人心を負擔する大乘的人物は各種の産業に於て缺如し。

乃ち門地名譽の手製に腐心する風潮は。我陸海軍に迄行亘りて。皆人豪オウゴくなり或は豪オウゴがり。兎角新聞紙や外國人杯からゴテ／＼謳歌されたがる傾向有り。蓋し功名心も亦活動の原力なれば。適當に之を有するは奮勵の一端なり。然れども四圍を視、前途を思ふ時は。軍人も吾等も未々オウゴ。責務は九牛の一毛だも果して居らぬを戒慎せず居られなす。従つて今から功名や門地の手拵へに屈托するなどは。國として小成小爲に安んずる沙汰で。餘りに心情が子供氣である。例へば三十七八年役の戦史は。參謀本部の東條英教氏主任として過半成就せしに。氏の編纂方針は。彼我實戦の瑕瑜兩つながら露はして適正なる判断に供し。以て後昆をして戦略、戦術、軍氣、軍備の實體的長短を講究せしめるに在りしが。斯くては日本軍中、幅の利かぬ場合や人やが生ずるに因て。或向に氣受宜しからず。ソコテ矢張り戦捷の形式を主とする範圍に於て戦史を編む可く方針が變じ。東條氏は爲めに主任を辭せしとの傳説さへ有り。是れ果して眞歟。又旅順難攻の苦患の最中には。沈みし敵艦が幾たびも復活せし奇談も有り。恐なる自稱機密を楯として八つ當りの罰金を新聞社より取りし事も有り。海軍と雖ども自負孤尊の傾向が無では莫つた。斯様な傾向は心情が稚わかいから起る次第で。我軍人中に武道と政道とを兼ねる大西郷の如き人が有らば。彼様な屑々たる明治官僚式は無い筈なり。然り而して人間本有の精力無盡なる所以を體して。一勝二勝、一是二是は驢事ロウジに去りて馬事到來する底の者よと安心する。臍下丹田が天心と相合する。氣宇膽畧の大乗漢が寥々たる爲め。期くの如く皆々豪オウゴがり。且つは物を

意作的に片附けて。面前的齊整を必死と要守するのならむ。此は餘りに稚心の振舞にこそわれ。戦捷の餘光として。民衆は武人を仰いて之に見習ふに當り。世道人心の原機たる武人が斯かる稚心を保留し。俗物化する様では。人心の前途が甚だ心許なし。故に此際は。特に謙虚にして賢を推し曠達にして手細工を好まざる底の君子的英雄が武人間に存在して。其等の人々が活龜鑑となり。先づ後進の小我を制抑し武人の心情を大乗的に風化し。其より延いて官民の陋風を戒飾する程に。ドボンと腰を据へて貫はねばならぬ。而して斯かる役目の筆頭として。東郷平八郎氏は其無私、無作の立脚に於て儘かに一と云ふて二とは下がるまゝ。

牛の如き西郷南洲が。羊の如き橋本左内を一見して其識量に服し。直ちに稱して。東湖以來東湖有りと揚げた。ソノ橋本左内が天資聰明。十五歳の折既に成人を凌ぐの概あり。當時修身の座右銘として自ら擧たる箇條書の第一條に『去稚心』と云ふ事がある。日本と云ふ國は今や十五歳の折の左内である。天資は絶倫なるにつけ。最早世界の成人を凌ぐべく稚心を去る事が。修養の最大秘訣で有らう。サ。その稚心を去らしめる世道人心の先輩として東郷氏は算からう。敢て武功の人として偶像的に拜めよとでは無い。精神の鑑として斯人を立る時は卑吝の心自ら消ゆる其處を取らねばならぬ。過ぎし戦事には幸い克ちた。シカン。此次は『世界戦』であらむぞ。軍備のみかは。有らゆる産業に於て。平生が克たねば。世界戦には萬歳が六かし。

東郷の那處が尊といふと云ふその眞處を人々が解つて。其に私淑つて。自ら修め他を導くに至らばなら。嗚や社會にはコレつかぬ人が出来やう。即ち品性の高尚なる。精力の剛實なる人格。人物を練鍛ふる上に天道天力を敬する故、人爵や錢や力や形勢やに香まれず従つて立脚の正大なる而して大事に有用なる大乘的人格。が各種産業界に顯はれやう。而して然らむ折こそ國は新興進取の活力駿々として。纏ては世界一統の大業と二十世紀新機軸の文明とを自任するにも至らう。

文武一途、上下心を一にして。更に大規模の國運を開成せねばならぬ今日。軍人自ら軍人の偏癖を自省せずば。以て文臣の姑息小成を正すこと能はず。則ち徒らに軍備費の要求のみ致して。軍人は財政を知らず逆自慢する如きは。最早時勢が恕せじ。武人は戦闘の役者たる外。半ば文臣及び社會の先達と共に。世道人心の源泉たる責任を忘る可からず。而して开は政治に干與せずとも出来る事也。心掛ヶ次第なり。

小學教員諸君から首め皆人が戦争の與へし靈的教訓を最上の教科書と觀じ。彼の迂遠なる極まり文句の修身談ならで。直ちに活勢活事より精神修養の材料を捉へ。偉人の心胸面目を眼前に躍如たらしめ。少年の腦裏に深き印象を刻ましめ以て天力、天爵及び人力、精力の交錯を會得せしめ。以てコレつかぬ爾して永久的努力に耐ゆる人格を志望する良習を喚起せば。則ち其時が本當の活教育の時節である。

米國大統領ローズベルト氏は。我が海軍の精魂を代表せる東郷大將の凱旋告別文に感孚し。何等國自慢の稚心なしに。美を美とし範を範として自國軍隊の精神に移用した。この素直なる而して濶大なる識量は。則ち米國民衆千載の隆運の守本尊で有る。斯くてこそ大型の人物も感孚して湧いて來やうが。日本當人は。ヤー／＼云ふて。石版摺や繪葉書や煙火や元祿踊やラツパ節等に戦争教訓を沒了して仕舞ふて靈氣の感孚をばお留守にするとは。寶の持腐れ。猫に小判。扱々心無の限である。則ち日本人としては告別文を産みたる當の人格を精神の本尊とし。其高尚なる精力を我心身に移して。文武商工百般の上に我れ別格の東郷大將たらむと努力すること最も手近き而して自然的なる修養方法では無い乎。

ア、。祖師日蓮は遠し。立正安國を超えて『立正興國』を要する今代。眼前現實の『靈魂の人』東郷氏すらも忘れらる可くんば。微力の子竟に世道人心を奈何せむ!!

九、明鏡止水的明哲と事上成佛との別

Ⅱ一〇三高地を除せし靈數

『靈魂の人』てふ者の現存的好例を精神的に讀み得て。讀み得たる處を我心身に感孚せしめるな

らば。其功德や無量なれど之を偶像的に拜むに已まば。开は何の詮無し。日本には古來偶像の先輩が腐る程出来て居る。敢て新偶像を擔ぎ出す必要は無い。

當代の學者や教育者は。平素腦力の鍛練を事の微妙と物の靈處との方面に閉却するを以て。現在東郷氏の如き尊とさ人格を日本同胞中に所有しながらも。其靈處に透徹せずして。兎角之をば修身書範圍の諸徳の龜鑑として講釋するを關の山とするを慨はしや。如何に東郷大將を神の如く崇めても。俗識の「一關を透徹し去りて直ちに『靈魂の人』」てふ者の現證に氏を藉り。各人が依りて以て靈氣を吸入して。漸く神物人の靈威を各自に感孚し體得すべく向上するその懸梯子に供するので莫くば。人本尊東郷も畢竟無用に歸する。殊に今の死學問、死教員の風尚を以てして。漫然として『東郷大將の徳性は此れくです』、皆さん之を學ばねばなりません』と講釋したから逆。教ゆる人自身が精神に感孚せざる者を執りて教へらるゝ者に傳へ得べくもあらねば。猶更以て東郷式の大乗機根を啓發する用には立たぬ。

蓋し觀心法の三昧を得てさへ。其は尙は理上の空念たるを免れざるに。當世の學風は其だも得爲さず。自覺默念の修行逆は始終課すること無くして。口から耳へ、耳から口への傳達を復習するだけ故。未だ哲理や禪機の域にすら進み得ぬ次第で。此學風に染む世人は予の要求する『靈魂の人』てふ者の信解に迄は二段の階梯を踏まねばならぬ。即ち先づ(1)器械的學修の弊を^{おろた}戒めて自己の放心を戒め

意想心念を理法及び道義に集注する修行を積み。以て心境の明哲を成就す。次に。(2)心理、哲理、道義等を超えて。神靈に直接し妙法に合致する所謂『靈魂の人』たる可き行解に進む。是が即ち必要の順序であつて。予の註文の個處へ一足飛びは不可能で有る。

この二個の重關の第一をば踏破し得た人でも。當世には珍異とす可き精神的修養の大家である。而して予は前の文部大臣九鬼隆一氏に於て之を認め得た。

九鬼氏は東郷大將の知己中にも頗る親しき知己たる由なるが。氏は東郷大將に傾倒すること尋常ならず。昨春其公けにせる論文中に。大將の人格を引證すること詳密を極め。凡そ人の徳性として分類する、忠義、耐忍、深沈、明哲、果斷、質實、慈心その他修身書の中に發見し得る限りの諸徳を束ねて。大將之を兼備する次第を説き。特に東郷大將がバルチック艦隊を邀撃するに先立ち。大將はハ艦隊必ず對馬水道を通過す可きを確信し。恰かも豫言者の如くに戰機を靈感し了しける。その事實を擧げて。明哲、鬼神の如き人は東郷大將なりと激賞し。中に。唯物博士加藤弘之氏が天台道士杉浦重剛氏の『豫言可能説』を非難して豫言の非學理的なるを論じ、神人際會など云ふ東洋的思想を迷信と嘲り、豫言者をば一種の病的神經過敏なりと貶したるに對して。天台道士に應援して。人間の心の力は明哲、鬼神の如き域に達し得る事を介みて説き。東郷大將をソノ實例として紹介し左の如く述べた。

『古來、大業偉功を樹てた人は。眞に非常の間際に當つて、人事だけでは濟み切れない、考へ

切れない、盡し切れない、幸不幸が現はれて来るのである。

若し加藤さんの説通りに世の中が進歩すると。趣味も雅致も無い乾き切たる野原の様になるであらう……………。

明鏡止水の本體を心に留めるから應事接物その宜しきを得て明哲、鬼神の如く成るのである』云々。

九鬼氏が無精神の學界に挺然獨處して。精神的修養に傾心し。ソノ結果として。右様の思想信念を描き得たる事は。即地に徴し得らるゝ。而して氏自身が心境の明哲を成就し得て居るからココ迄道破し得る次第で。氏は正しく(1)の關門をば透徹したのである。然れども明鏡止水の明哲を極致と立るは。精神修養の醇の醇なる者に非ず。引用されつる東郷大將は實にソレ以上の人なり。

古來漢儒の大家及び禪門の傑物は。心法の明鏡止水の明哲に迄は達しもするし。又其邊を人格の極致と立て、是が功夫を指導しもする。即ち王陽明の良知良能説も大概其邊に歸著するし。西郷も東郷も這般の禪機的哲理的心法に由りて自ら己れを鍛へたことは實際である。然れども此は。無精神の學問に比較してこそ精神修養の上乗方法なれ。未だ偉人學の極意皆傳の處を摩するに至らない。大乘機根の本因と迄は達しない。

大乘機根の本因偉人學の極意皆傳の處は。

『天事人事を瞭然投映せしめる心の明哲ならで。心身共に。天事人事として自照し權化する。』

ソノ靈域に迄投入し了れる處』に在り。

是ぞ誠の『靈魂の人』の境界。斯く相成る修行こそは。法華經に所謂無上第一義、教菩薩法、佛所護念たる法華行の本領。

稀世の英雄東郷氏が艦隊遊撃に出發する前二日。親友九鬼氏を訪ふて胸中の秘念を仄めかし。『對州沖近傍で戦が初まつたと御聞になつたならば。こちらの損傷も素より多からうが。先方は全滅と思つて下ろさ。』

あれさへ全滅すれば。何れ平和の緒音が起つて来るに違ひありません』

と断言せしとは。ナント驚く可き偉大なる事實で。さうして靈氣、乾坤に貫く言葉では有るまい乎。此簡樸にして而かも深玄なる數語が。醇正にして沈毅なる東郷大將の唇より徐ろに發せられし一刹那は。モー!!敵艦隊の運命の星は日本海に墜ち了りたも同然。この瞬間の大將の聲調は。口より發したもので無い。咽喉から出た者でも無い。肚よりでも無い。臍の下からでも無い。實に天底を踏む踵の底から天來的に昇りた者である。

東郷氏のココが。即ち天力人力并せ體得了せる事境で。其は却々人事天事を客觀的に識破する所の明哲の範圍に止まつては居らぬ。東郷平八郎の心身が其まゝ。意識的に又無意識的に。人事天事の主體

と爲つて居る。即ち人事天事を玲瓏たる心鏡に投映せしめる所の豫言者の域を超えて。能動的に自ら人事天事の光明を放射する自照體と化し。神物人の靈威が東郷大將に憑移つて了らたのである。東郷其人が靈化し了らたのである。

「明哲」と「靈化」との差は。則ち哲學の極致と宗教の基礎との微妙なる區別の存する所で。前者は理上の悟證たり後者は事上の照映たるコノ點が實に重要である。哲學から向上して靈威有る宗教の域に進む所以の消息をば此段に於て領解することが肝心である。

願はくは。此段の意義、精神を應用して、教育界の精神的革命を企て。差向き。天力人力并せ認むる純東洋的意識を基本として。

「心靈に向つて精力を集中せしめよ。爾る時。人の精力は無限に發展す。發展の極致は。即ち神物人の融合歸一にして。悉く事物を靈化し。無量壽、無量福乃ち到る。

精力の感孚は。信と行との徳なり。其至れる者は。理上に安心を成就するのみならず。事上に靈威を實現す。

精力は。文、武、商、工、農その他各種百般の事及び人に通じて。等しく天力人力の顯現なり』と云ふ新主義。即ち靈化を極致に置く所の精力集中主義を確立し。便ち修身教科書を全部此主義に由りて書き直し教育方法の根本的革命を命令す可き『立正興國の新勅語』を奏請するまで。是非とも行かせず耶。

再言す。三言す。法は人に在り。人は法に由る。人法融一の眞處を學問の目的として、修養を了して。初めて偉人は生ず可し。世間に大乘機根を扶植し得可し。明哲鬼神の如き處をばモ一段越えて。即ち我の心法をば人事天事と相對の位置に置きて明哲を致すツレをば越えて。若しくは主觀、若しくは客觀の孰れを問はず。心身の意も作も。無意の作も無意の意も。畢く天道天力と融一し。乃ち靈威を生ずること日蓮上人の如くなるを得て。初めて大偉人の極意皆傳たる可し。我東郷氏が無言の豫言者。お經を讀ます唱へざる法華行者にして。恰かも日蓮上人が武人に生れ替りたらむ乎の如く、事上成佛的なるの處に偉人學卒業の眞價は寓す。

抑々人生は、禍福吉凶の實驗場とも謂ふべく。世事の複雑多端なると。意識意念の活動無量なるとの爲め。因果應報の理は事境に看取すること容易ならず。乃ち誘惑は外來の魔より放たれ。或は己が心より襲ひ來りて間斷有るなく。我と思ふソノ我殿が一向期てにならず。我身で我身が儘ならねば。却々に己れが己れの主體として立脚する能はず。機根脆き者は。流行、慣習、色慾或は神經病の槍と爲りて。醜態として外物に降參し。曾て心廣く體胖かに天命と終始する境界を成すこと莫く。機根稍と勁き者は。獵犬の如く嗅ぎ廻りて。功名利祿若しくは智識物力を探り。人生をば單一味なる優勝劣敗、運府天府の戰場と觀じて已むこと靈界の無學者の張本加藤弘之の如きに至る。則ち人生をば智慧

と意識の共進會と心得。竟に一切の智力は絶對的融一の靈の影たるに氣附かず。我見妄執を強めて。自ら地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上界の六道に墮落するを致す。故に刻下の救世的教旨を求めむと欲せば。先づ我見妄執と一所に无自力の臆病心をも根輪際、打碎く所の靈威有る本尊を立て、之に救はれて無量壽、無量福を得べく專念してこそ。初めて人事を盡して天命を待つては實行實形が心身に成就す可しと雖も。本尊なしに我心ばかり責めし連。心では人事を盡して天命に俟つと云ふ正義の道方で段々成功する氣でも。却々其が注文通り參らず。善に勵めば勵むほど。アベコベに逆境を速々場合無しとせず。然らむ折には。氣先づ折けて心亦迷ふこと必然の情勢にて。扱明鏡止水も禪學の悟りも吹飛んで仕舞ふ。

素直に育てられて。素直に智徳を研いて。順よく立身出世の協ひし平穩なる境界の人には。禪機的哲理的若しくは道徳的の理解一邊から。人事を盡して天命に俟つ杯の心組に成り得易けれど。其は「信心は徳の餘り」と云ふ様なノンキな境界の事で。若し夫れ不測の運命が逆境又逆境と疊み掛けて我を襲ふ極端の場合には。該信念を我心で護持することは六かしく。人生をば淺猿しい者と觀じて。煩悶苦痛を重ねずに居り得ず。従つて血性有る者は。社會が賦課する俗法私道に屈辱を甘んずる能はず。淺猿しい人間社會は宜しく破壊力を以て革正す可しとて。遂に急激なる社會黨の仕事と思ひ立ち。或は殺伐なる革命主義に陥り。或はマ、よ浮世は三ぶん五りんぢやと自暴を起し。或は氣を弱くして死

神貪乏神に捕つて丁人のが常である。即ち心は矢竹に逸りても。甚しき難病や意料外の災難等に壓伏される時んば。慰安の實形が心に來らず。怒り智慧あれば。其が一段と我心から我身を削る鉋と成り了るに因り。九鬼氏の如き順境のみ通りし人の理は解れど事は通せざる明哲主義は。以て力有る立命を授與するに足り無い。

『理』の方面から説けば。一應は解し易けれども。其代り實形實行を應現せしめる功德が薄し。去りとて『事』の方面は。聴く人が直ちに信行を以て迎へざれば解されず。その代り。解つたら最期。其徳は一生涯。身に著く。實に事と理との差別ほど大切なるは莫し故に繰返して釋義せむに。

事とは現實なり。具象的也。

信じ且つ解しつゝ、精進向上する時は。我心身は此ま、神物人の靈威と融合して。諸惡莫作、諸善奉行の人格を成し。壽命も幸福も現實に成り。又我念力にて世道人身を實際に左右して清淨なることを獲せしめ。一舉一動悉く無量の功德を實現す。是れ『事』也。

と斯う信解すること捷徑なり。語を換へて謂へば。『神佛に歸依しつゝ、理解のみならで現實に神佛の靈威を我が行ふに至る。爾して心意の力や智識の力よりズツと超へたる處に靈魂が安處する』其が事上成佛で有る。

『明鏡止水の本體を心に支持す』と云ふ邊に満足せば。人格は勝安房ぐらひの處にしか達し得まい。勝

氏は明哲の人傑では有た。けれども、消極的禪機的の人傑たるに止まり人事の際會に對して明哲なりけむ。天力を體して『際會』を實演する迄は抵らなかつた。己れ靈威有る大乘漢たるには遠かつた。この區別を深く味ふに非ざれば、『靈魂の人』たる東郷氏を精神的に讀み得むことは極めて難し。

願ふに无精神の俗學界は。絶えて生命問題に注心せざるが故に。絶對絶命の場合と云ふ者の實感が起らず。従つて『靈魂の人』は、明哲の極をも超越すと云ふ消息を會得し得ない次第で。彼等は先づ絶對絶命の事例を心に刻み込むを要す。

憶ひ起せば夏尙は寒殺さる可し。『肉彈』てふ慘激なる語を實際に演せしめつる旅順戰に於て。當事の三軍が背後の五千萬民衆と與に。人力の極限を盡し有らゆる神佛に熱禱し無數の忠死者を出しても。尙は敵城は落ちず。モ一此世に神も佛も無きもの乎と。絶望の危機スレ／＼の處に瀕しつゝも。さうして如何せむ。旅順が落ちねばバルチック艦隊が来る。來て旅順艦隊と呼應して海上權を攪亂する。さうして彼我の攻守、處を更えて我海上輸送の危殆を生ずる。然れば滿洲百萬の我陸軍は進退に窮する。況んや海戰の決着次第にては我本土の沿岸線は悉く襲撃される。然らむ時には。假令以國を擧つて焦土と爲す迄戰ふにせよ。國家は横腹を突かれし如くにて。茲に千年の致命傷を蒙らむとする……此時の旅順が落ちる落ちぬは。實に國家生民を絶對の場合に立たしめた者で。當時如何に攻圍軍勇士が骨を梯子とし肉を丸とし一寸の土を萬斛の血もて洗ひしにせよ。其最期の際には。『此城落ちずば死

んでも死なれぬ』と思ひ込みて。宿昔藉りて以て自ら慰めける武道の華てふ言葉も今は淺ましと感じつらむ。

兎角名譽の戰死など云ふ觀念の下に満足して決死し得る間は。マ／＼絶對の場合では無い。眞の切ない場合は死ぬにも死なれぬ、死んでも死なれぬと云ふ極端の場合で有て。旅順攻陥難の絶頂の時こそ。實にその適例である。讀書人等、誠に『靈魂の人』てふ者の本相を識得せむと欲せば。請ふ旅順は到底不落乎と憂悶を極め。頭髮爲めに一夜に白からむとしける當時の國民的本能に反れ。而して後。次の玄深神秘なる天啓的大家實を諦聽せよ。

旅順要塞の勁敵は。一兵一卒の末に至る迄。各一砦一穴を全露國として死守し。血に繼ぐに骨を以てし。骨以上、直ちに魂を以て。靈を以て。日本帝國の烈士と争ひし者にして。彼我共に惡戰難闘の極度を踏へたる後は。人力既に竭きて只だ天命執れに歸する乎の勝負に迄移り。日露兩國の運命の渦巻は攻圍の初發より段々に旋り／＼て。竟に渦巻の微妙なる中心點をば。唯だ一小丘二〇三高地に鐘めりて。日露各自の有らゆる精力は此に集注し盡されて。二〇三高地の攻略と奪還とは。日露の執れが道の渦巻の中心點より撥彈さるゝ耶てふ慘極凄絶なる天命の試験を演じける。ソノ最終に。摩訶不可思議!! 天意神數は。髣髴として某異人の意識内に顯現し。日本海陸の兩大將をして二〇三高地を或靈數以て事上に除し去らしめるに及びぬ。是ぞ天啓的大家實なる。

日本五千萬民衆諦かに聴け。天啓的の事は。靈的行路を導く者にして。形相量積に於ては至微なれども。ソノ發助の結果は無邊大の事相を展べ来るものぞ。

所謂天啓大事實の骨子は。數字「二〇三」を除する數字「七」と其商「二九」とに在り。形相や極めて微。而して日露の運命之に支配されけるよ。

東航のバルチック艦隊既にスエズ運河に迄進前して南洋の浪高きこと方に三萬六千丈。旅順落ちせんば將に來らむとする海上決戦の我捷算到底期す可からずと。東郷司令長官の一身は乾坤大の磐石を負ふて。身も世も諸共一擲する外に途無かる可かりし明治三十七年十一月下旬。攻圍軍は巖に一たび二〇三高地の占領を遂げしも。ホット一息つく間も有らせず。爾餘の各砲臺より集注的砲撃を蒙り。且つ驍勇なる敵の逆襲に會ふて。ムザク奪還され爾後幾たびか彼我の激争を茲に演せし末。攻圍軍の手段も智慧も用盡して。乃木大將血嘔吐をも吐かむする慘命窮極の時なり。同じ思ひの東郷大將は鎮海灣根據地に在りて。長官室の椅子に凭りつ。毅然として默念すること全一日ならむとす。忽ち情報密電及び信書等は卓上に堆し。大將やをら手を伸べて之を點檢せるに。書信の中に異装の一書翰有り。封筒上に特書して曰く。

『此手紙は必ず沐浴齋戒の上御覽可相成事』

是ぞ大將が年來信仰する某異人の特信なり。異人とは東京小石川に住する逸士にして。常に神を敬し

易を究め。活斷、神の如し。大將之と汝爾の交を締すること年有り。今や眼前の大難を濟する成算に困み。思を盡し誠を盡して而して得ず。得ずして、而かも更に思を盡し誠を盡して天地神明の照臨を禱るの際。恰かも好し神の使とも仰げる人の此特信。大將覺へず胸騒ぎして。謹みて之を額頭に揚げて再拜す。拜して肅然。封押披けば。此は如何に!!今も今として腦底爲めに破裂せむ許りに思ひ詰め居たる旅順攻陷に對して。異人が啓示する捷算の天數神意、紙上に歷々として。字字、靈有りて我を麾ねくもの、如し。

大將は三たび翰を拜してポケットに納め。遽かに驅逐艦を召して單身之に投じ。急ぎ大連に赴き。上陸して乃木大將と會見す。

攻圍軍司令部の長官室に兩將對談すること良久ふして。『然り。全軍の總覆没を賭して最後の決戦を斷行する條。屹度御安心われ』とキツパリ言放てるは乃木大將の聲。

少頃にして『これがごわんすでナ』と何やら手交する東郷長官の氣相。大將は其を受けてサラ／＼展べしが。如何に會心の節の澤なりけむ。一句毎に『これは／＼』と許り。歎稱の語を絶たず。然るに中にも。乃木大將の顔面には。見る／＼英氣煥發して。一段凜然たる語調は其唇頭より洩れて曰く。『神ぢや!!真に此通り……我輩の意中も全く吻合……イヤ實に吉相』と。頗て次室の參謀長を召し。語葉も嚴やかに『大迫を呼べ』と命令す。

是より先。乃木大將の幕僚等は。旅順攻陥に供せし犠牲の餘りに多大にして而かも攻陥の確算なきに。痛心を極むるに當り。決死の乃木大將が動もすれば輒は陣頭に猛進して有無の勝負を決せむと欲するが爲めに。種々に諫止して纔かに熟圖の時日を得ける也。されば東郷來りて乃木に決戦を慫慂するを見ては。次室に控えし參謀諸官は。『悪い處に東郷が來たものよ』と目と目を視合はせ。堅唾を呑みて評議の終決如何にと待つ。斯かる間に乃木大將の氣乗り益々壯んにして。即座に大迫を呼べと參謀長に命令するソノ辭色只事ならざりけるが。那方には參謀長が命令を領掌し了りて。不圖。卓上に展べし件んの怪信に目を注ぎしと見る間にアラ奇妙や!!參謀長も亦あッ!!と失聲し。呆然として感に禁へざる有様なり。

參謀長は決然として退き。音吐さへも日頃と異りて雄拔に。第七師團長大迫將軍を至急司令部に來るべく傳令を命ず。

ココに中間の説明を要する事は。旅順戦の此頃は。敵味方共に惡戰難圖を経験し過ぎて。戦さが巧者に爲り。却つて有無の勝負を決する本能的活力の減退せし一條なり。

其も其等よ。露軍の方より見れば。何ほど殺しても屈せぬ日本兵。重要砲臺をば幾たび取り遣りしても塔の明かぬ決戦の復習。日本軍より見れば。踏止まれば塵殺と知りつゝ、最後まで悠々とし退却にも精一杯ノロノロとして生死無頓著なるロス殺しても。現はれ來る執念深き幽靈然たる敵兵數。

考ふればお互に惡い相手に出會ふものぢや、死活存亡共に茫々として果テシの無い此戦サ、命なんどは自分の有やら他人の有やら無感覺に成て來た、惜しくも無し、ワザと捨るにも及ばず、日本語のニクソマシヨ!!ロスキー語のニチエツオー!!……『おッと來たぞよ機關砲が連發だ幸い午睡が出来』とコロリ一齊、横に臥して。鼻諸噴ふて。身邊掠むる砲彈の數を讀めば。穴の中にはロスキーが。天井半ば爆碎されて破片、頬に飛ぶを眺めて。愉快さうにウーラーを連呼する……と云ふ工合で雙方共に痛も痒ゆいも、死も生も神経が硬化して全く以て戦争に慣れツ子と成り了りければ。最早から相成ては。無法滅法なる本能的猛力は揮ひ難さを道理で。金澤兵も四國兵も本來素敵に強い餘りに。強さが戻つて。却つて異妙な勇兵と化した。斯かりければ。我の各主將等も。ドーにも方策の立て様無さに當惑し。遂に此は新手の中の新手たる北海道第七師團に二〇三高地を占領して貰ふ外に分別無しと。自然に默契するに及んだ。

新手には野生的活力溢れ。本能的猛氣は智巧に蝕されざるが故に。分別以上の極端なる荒業には最も適當すること論を須むず。殊に北海道師團は。其創設の時より全國の選抜將校及び兵士を以て組織せし者にして。帝國陸軍の最も質實にして剛毅なる者として知られたり。この絶對絶命の絶頂に於て。北海道師團にして二〇三高地を占領するに非ざる限りは。全國の何兵を以てするも最早此事絶望なりと。十目十指既に第七師團を救世の使者と觀せり。されば第七師團は。二〇三高地の占領。即ち日露

の陸戦中の最大難戦たる旅順戦のその又眼目たり、神髓たると同時に。日露兩國の運命の渦巻が最奥の中心點を措きける所の二〇三高地のその占領てふ至難の業をは全く擔當して。天つ晴れ勇武の帝國陸軍中。雪上、霜を加ふる無前無匹の壯烈を演じ。竟に鬼兵の旅順開城を餘議なくせしめしこそ天職の宿縁なりけむ。實に彼等は戦地に著く、すぐ戦ふすぐ死ぬと云ふ慘烈急迫の役目を負ふて。帝國最北の處より出征しけるぞいぢらしや。

書して是に至りて予は涙に禁へじ。有情の讀者よ。著者をして私縁上の情懷を茲に點するの自由を許せ。第七師團兵の二〇三高地吶喊を憶ひ出す毎に。予が從弟にして肉親中第一の親しき友而して予をば父の如く兄の如く恃みし一士官杉本次郎の音容は予が目を去り遣らじ。彼は出征の念願漸く三十七年十一月に届きて。北海道より大阪に輸送され。大阪を發船せしは同月中旬なりけるに。同月二十六日二〇三高地強襲的占領の際。直ちに陣頭に出で。同夜見事の戦死を遂げたるが。兩三日には次郎旅順著の音信もやと心待ちせる甲斐も無く。二十七日には早く既に次郎戦死の電報に接しぬ。豫ての覺悟は予承知すれど。去り遣は餘りに呆氣なき最期よ。而しながら。戦地に著く、すぐ戦ふ、すぐ死すると云ふ運命は。第七師團の將士卒殆んど渾べてが次郎と同じかりしもので。直接に肉親中最愛の者の此悲劇は。予に取りて感殊に深く。次郎訣別の書中に在る左の句は。獨り杉本少佐の心事を寫すに止まらず。全國精選の此名譽師團出征者御一統の氣魄精神は全く是ぞと。予感激す。

「秋ぢやとして赤い紅葉が咲くでは、無さ平

時節來もすりや散りもする」

呼。時節來もすりや散りもする。散る可き爲めの時節の到來を心から歡喜する純一無雜の精神の神々しさよ。實に彼等は唯だ死する爲めに死す可く出征せし也。

時、處、位の三つに於て。第七師團が當時日露運命の渦巻の中心點を握りし情況や實に右の如きなり。されば東郷乃木兩大將の會見の幕に於て攻圍軍が最終の極力戦を決行する運びと爲り。乃木司令官が第七師團長大迫清敏を即座に召せるその時。乃木司令官は幾回となく首肯して「これぢやこゝぢや全く神のお告ぢや」と獨語せしが。是は二〇三高地占領の難役は。第七師團を措いて他に之無しと思ひ定めつる乃木大將の胸中にツッキリ相應じて。件シの異人の秘信が。二〇三高地を除する天の靈數は第七師團のその七より外に之無しと指示したるに由りし次第で。此境此時。乃木は東郷と與に神人際會の域に入り了りし也。

異人の秘信は何事をか啓示せしぞ。

書中の辭句は夫れ什麼。

五千萬民衆。爾が俗念を洗ふて。諦かに微妙不可議、事理融一の天數神意を聽け。異人は淡々乎として單に左の數語を宣べし也。

凡そ天下の數
 二〇三を除する者は
 唯だ七の一數あり
 除して得る數は二十九
 因て第七師團を以て
 二〇三高地に向はしめ
 二十九日を以て
 總攻撃を開始すれば
 旅順落城相濟じ事
 更に疑有る可からず

斯くて。師團長中の滅法なる勇猛漢と聞えし大迫將軍は。司令部に馳せ參じ。命令を受領して。勇みに勇んで立還りけるが。是に至りては。大迫其人一世一代の筈り役たるのみか。全陸軍第一の適任にて。將軍は即夜に各隊非常召集を命じ。親ら全師團兵に向つて至熱至烈、日を呵し天を動す底の大演舌を行ふた。勿論。語は簡にして直。偏に渾身の英氣を擡りて部下の心靈に訴へし者にして。『我第七師團にして旅順を抜く能はずんば全陸軍が抜く能はざるのちや。全陸軍が抜き得ずんば三千年來の神州男

兒、日本帝國全部が抜き能はぬのちや。我七師團は今ぞ神武天皇以來の日本帝國全部と釣合ふ非常絶特、最大無上の使命を果さねばならぬのちや。大迫は何も卿等に命令せぬ。只だ頼むのは。二〇三高地に衝き登つて全師團一人も残らず死んで呉れ。』と云ふを要旨とした。

大迫將軍の此演舌が如何に全軍に深激なる感動を與へし乎は。改めて言ふ必要無し。即夜の吶喊に。二〇三高地の要部は。實に味方さへ意外として喫驚する程の速力を以て我手に歸した。爾して要塞全部の死命を制する此難處は這度こそ確實に占領を遂げられ。偉大なる旅順は茲に致命傷を蒙り了りた。

戰史をして當時の實況を語らしめよ。海軍勳功表彰會編纂の日露海戰記は精確に語りて曰く。
 第三回總攻撃中止後、新たに着手したる攻城作業は、十一月中旬に至り漸く其完了を告げ、又更に第七師團の來るありて、士氣益々旺盛となり、砲火の威力又大に現はれ、此に愈々一大活動を許すの時機となれり。況や波羅的艦隊は既に蘇士運河に入りたる秋なれば、最早旅順に餘命を與ふるのと能はざるなり、乃ち十一月二十六日午後を以て、松樹山以東の各砲壘に對して、全軍總強襲を開始したり。此日中村少將の特別抜刀決死隊は、松樹山砲壘を乗越へ比較的防禦の薄弱なる旅順街道を経て、敵の背面に出で、舊市街を混亂せしめんとするの劃策なりしも、事豫期と違ひ、苦戰惡闘遂に松樹山、附近一帶の地は死屍累々殆ど全滅に近き損害を蒙りて、退却するの已むなきに至れり、其他全線の各突撃隊も非常の苦辛と困難とを以て砲壘外線に肉薄し、其外岸斜堤の如きは占領した

りと雖、敵の防禦は、至堅至牢にして、容易に内廓に突入すること能はざりしなり。噫、旅順は實に難攻不落歟、吾人は此頁を編むに當り慘憺なる當時の状況を記せし軍人諸士の日記を閲して、悲絶慘絶の情、轉た禁する能はざるものあり。然れども旅順の陥落は戦局の發展上、甚だ其急を告ぐの時に於て、多くの犠牲を供するも又已むを得ざるなり。是を以て特別決死隊の決行を終るや、此の死體收容の爲め彼我の軍使會見し敵も亦た懇に之を運搬し、我れに援護を與へ悉く之を收容するを得たり。然るに敵は此の襲撃に於て、松樹山以東の友軍を援助する爲、二〇三高地附近の守備稍々薄弱となりたるを以て、我軍は好機逸すべからずとし、松樹山以東の攻撃は牽制的に止め、豫て突入の機を窺ひ居たる軍の右翼は、新銳の第七師團を攻撃主隊とし、一師團之が後援となり、中央軍又力を添へ、二十七日拂曉より猛烈なる砲撃を開始し、續て勇敢なる歩兵の突撃を行ふこと、二十九日まで三日に亘り、茲に又空前の悲惨壯烈なる結果を現出したり。當時英國の觀戰將校「ニコルソン」中將をして、「二〇三攻撃程猛烈なる攻撃は、我未だ知らず、戦争と言はんより、予は彼我の虐殺と思惟せん、又見るに忍びず」と嘆息せしめたり。然るに三十日午後五時頃、西南部より進みたる一隊は頂巔約三十米突に肉薄し、七時頃増援隊を得、猛烈なる勢を以て頂巔に向ひ、突撃し遂に之を占領す。又東北部より向ひし部隊も相尋で突進し來り、午後八時を以て、茲に全く二〇三高地全部を奪取したり。而して又之れと同時に、赤坂山一帯の地も遂に我有に歸したり。然るに爾來

敵の逆襲絶ゆるなく爲めに未だ確實なる占領と云ふ能はざりしも、我軍は毎次之を撃退し、越て十二月六日に至り、愈々之が占領を確實となせり。

既往數閱月、幾多の犠牲と辛酸を以て占領したる此二〇三高地は、抑も如何の價値を有するぞ。謂はずもがな、旅順の死命を制すべき樞要地たり、之れ有るが爲に幾度か我が攻圍軍を惱し、之を待めばこそ敵の敗殘艦隊も尙餘喘を保ちたりしなり、今や此高地は遂に我有に歸す、敵が金城鐵壁と恃む砲壘も遂に保ち難かるべく、敵艦又隠るるに處なし、茲に於て從來僅かに彼の海鼠山高地の觀測に依りて港内を砲撃しつゝありし海軍重砲隊、及陸軍大口徑隊は、直ちに此二〇三高地に觀測所を設け、敵艦全滅に努めたり。而して市街砲撃用としては、其直下たる赤坂山に展盤溝砲壘を移轉せしむるに至れり。

一望廣濶港内に浮游する敵艦は、悉く我眼界にあり、之を狙撃する又我意の如くなるべし、此に至りて旅順艦隊の殲滅も愈々數日の内にあるべし。(中略)

續て十二月十一日を以て、戦艦四隻、巡洋艦二隻、砲艦一隻、及一隻の水雷母艦、合計八隻の命脈を断ちたり。茲に愈々旅順艦隊を殲滅せしめ、海軍の戦局に一大發展を與へたる重砲隊の功蹟又大なりと云ふべし。然れども攻圍軍は未だ攻城作業結了せずして、其後總攻撃を執行する能はざりしを以て、重砲隊は一意攻圍軍に援助し、廿九日總攻撃を以て、遂に二龍山を陥れ、卅一日松樹

山を占領し、疾風迅雷の勢を以て、卅八年元旦、望雲一帯より日砲臺附近を奪取し、翌二日を以て、愈々旅順市街に突入せんとする時、敵は遂に我軍門に降りたり。

嗚呼二〇三は、乃木大將の命名せし如く爾靈山なり。この高地は土に非ず物に非ず。日露陸戦の決勝に参加して重要な部分を靈界に占むるナヤマヒヨウ也、爾靈山の三字下し得て入神。その靈迹や永劫不朽!!。

十、開城如來出現の本末—靈化せる野菜

明治三十八年正月元日。旅順の開城は。日本民衆五千萬人に人生的新生命を與へた。

實に五千萬人の胸中の開けた事は。開城の姿と與に合體融一なる可く有た。日本國の大開運は此に成りた。

この開けると云ふ事が即ち事上の即身即佛で。靈魂の自照は理を絶して事に入る次第が。ココで判然悟證し得らるゝ。

實は旅順開城は。ステツセル以下投降の日に成りしに非ず。其に先だち。日本軍が絶對絶命の事境に立ち「人開式日本魂」の勇士たる域より向上して靈魂の人と化したる其一刹那こそは早く既に旅順が落ちた時である。即ち旅順敵と我靈魂と融して。妙法蓮華の事境を致せし故。其時は夙に此方が無限にして

隔つるなき靈威其者と成り了りし儀にて。此方が開けたから先方が開けた。即ち開城したのである。

既に我身命を惜まず。更に名譽の戦死てふ様の者を超越して。大和魂てふ一物をすらも心に留めず。人々が神心地に歸して犠牲たるを甘んじ。畢竟我てふ者は溶解して憎い敵すらも眼中に之有らざる事境に立つ是を眞の絶對の事境で。人の靈魂を開いて敵朋一如たらしめ。唯だ宇宙の光明がガガーンと照す而己の姿と爲す。ソコで。此方が開けて隔つるなき故。靈威が顯現して無上の堅塞も爲めにボロ／＼潰ゆる。ココが即ち妙法事上の功力である。

「靈魂の人」と爲つて宇宙大の隔つる無き靈威と融一する迄に。精神界が開大してから。其とピッタリ照應して。旅順開城及び之に伴ふ國家の大開運てふ事境が現證された。ソノ感應同時の處が妙である。則ちココに至りては。物も神も人も。一切一ツに成つてツツを爲す次第で。爾して「因果同時」の秘法が炳然として。之が見へずば汝の眼球は玻璃球の義眼ぞ」と啓示すなり。

抑々その絶對的事境に移るに先だち。旅順攻圍軍は。當初。日清戦争の格で旅順を一呑にした。中ごろガナリと砂を嚙んで澁面作りた。漸く用心して嚙めば。今度は物が無上に堅い。乃ち意地男の胡桃嚙む格で齒も折れよと憤激した。齒莖が緩み。或は一二本の齒が折れた。而して漸くにして心機一轉し。堅い物は器械を以て碎く可しと思ひ直したは宜かつたが。野生の胡桃と見しは鋼鐵製の胡桃では根氣よく鎔かす外に手無しと最後に考へた。

實際を言へば。大本營諸官は。旅順攻陥の不容易をば。流石本職だけに随分承知して居たが。乃木さん達は左程とも思はで。自ら志願し且つ喜んで旅順攻撃の命令を御請した様子で有た。然るに。勇みて攻圍軍總大將を拜して大本營に赴き初めて旅順要塞の秘密地圖と敵勢の情報を手に受取つた時は。乃木さんも一瞥して少しく首を傾けたとか。シカシ。尙ほ乃木氏以下の諸將士は。日本軍人萬能の畫を胸中に描いて居つたから……無理にもソノ畫に符めやうと云ふ勇氣も即ち日本魂の方式形體に由れる勇氣も持み武士道を自負して進み。扱。其から手古摺つた。

大本營も。攻圍進行の中途以上迄は。大抵打算した通りに敵が堅いので有つたから。堅いとて甚しくは驚かず。乃木大將以下の心算齟齬は寧ろ當然なりと高を括つて居た。然るに其より程經て。籠城軍の強サ加減が案外の上の案外の爲め。後には大本營自身と雖どもギョットした。

東鶏冠山奪取に四國健兒の二聯隊全滅てふ慘境を呈せし頃より。旅順は砲臺を一個づゝ吶喊して取るに難しと當局は悟り。其より種々の苦がき經驗を閲して。竟に坑道作業てふ根氣仕事に移るに至りたが。此坑道作業の必要は。既に工兵科の人より切に建言する所有りしに拘はらず。乃木軍の參謀は攻陥に急なりし爲め。急かば廻れ瀬田の橋てふ諺を容れず。遮二莫二落さうに掛つた。戦後の今日はツツツ旅順要塞の構造を踏査して還れる人士も有り。歸來之を國人に説明するが故に。段々砲臺の築造が怖ろしき大仕掛のものたる次第が解つて來たが。實に露人の工兵科的優越は滅法なもので。一砲

臺を完成するには。先づ山丘の中腹以上をペロリ切て捨て、仕舞ふ。其から其全部を人造石を以て築き揚げて元の山形にする。其れ故砲臺の前面に作る斬濠には壁岸の内側に銃眼を作り、其はホンの銃の口だけ明けて。鐵板で頑丈に圍む。内には穹窿と云ふて兵が籠る穴を置き。其穴は抜け裏が通じて砲臺と交通し。彈藥糧食の運びは自在で。攻撃軍が斬濠に飛込まば最期。籠の鳥を散彈で撃つ如く樂々射撃する。お負けに斬濠には程よき曲折を設けて。其角の所に速射砲を据へ。斬濠に入りし敵を直線に正撃する仕掛である。而して是が一箇ならで。重要な砲臺は皆此通りで。爾して山麓の斬濠も同じく此方式の在る。故に坑道作業が進んで。砲臺直下の斬濠まで行いて。モ一占めた勇氣百倍して。斬濠に飛込み向ふの壁岸を攀ちて砲臺に斬入らうと云ふ大切なる所まで折角漕ぎ附けて。扱。其處で滅茶滅茶にされた勇士の數たるや夥しい。

ソコで坑道作業だけでは。却々陥落が六かしく。ツマリ拔山の利器を破天荒なる巨砲の威力に俟つ外は無くなつた。

破天荒なる巨砲の威力は二十八瓏の白砲に在り。之を用ゐれば人造石の山に辛うじて孔が明く。充分に山を打抜いて穹窿を殺にする迄には。幾千萬圓の彈丸と。其を發射する巨多の時日とを要するけれど。大抵穹窿も壊れる。砲臺の地盤も壊れる。爾して置いて。坑道から奮進すれば。如何に穴中の鬼も支へ得ぬ。

人間の言草を便宜上、用ひつゝ。此には「今死する其ま」とは云ひたり。シカシ。肉上の忠死は戦士の事のみ。肉上の死を要せざりし予は。肉上に生き乍ら其ま、予が手にて旅順を落せり……。予を目して怪語を吐く者と謂ふ勿れ。是れ著者一人の私言にあらす妙法的事境に入りし幾多の忠死者は。天眼坊に靈魂を融化して。今此言を爲さしめる也。

人事を盡して天命を待つと云ひ。朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと云ふは。東洋聖賢の教ふる安心立命の個處で。之に合ふ程に心膽が練磨され了らむ時は。國民的性格若くは個身としての能事畢れりと謂ふに足るが。扱て是だけでは。自分が人事を盡したツモリの其ツモリが根抵から間違ふた時に。ドーにも悔恨憤怒を脱し得ない。況んや。若し人の心靈擴大して。國家を自己の擔任と爲し。此世間の濟度をば自己の濟度と同一と爲す迄に向上活躍せむ時には。死すとも任務は尙盡さざるに付き。ソノ處まで解脱得道せしむるは。決して右云ふ所の教にては相協はじ。开は必ず全宇宙に於ける『人生としての安心立命』に埃つ外無いかから。孔孟の教は其旨たるや淺い。

大和魂の教も亦孔孟の教と伯仲の間に在りて。單に心の休めなり。未だ以て無限不盡なる靈魂の相手たる能はず。

孔孟の教や大和魂やは。或程度迄。世間的道德の基礎と爲り道具と爲る。而れども『生命』問題に進むこと一步なる時は落第す。這般の向上一歩の處からが宗教に入る次第で。之を解釋するは唯だ妙法

蓮華經に在り。妙法蓮華は。絶對無限の靈魂をして其に合體する事境を獲せしめる也。

爾れば。旅順攻圍軍の司令官乃木希典が。若し眞正法華の行者なりせば。旅順は十月中に屹度落ちたで有らう。而るに。ドーにもゴーにも旅順が落ちず。徒らに犠牲を多くせしは。此方が未だ靈魂の人と爲らぬから。先方の事境が開けざりし儀で。愈々手摺つて絶對絶命に及び。武士道ぐらゐの物に獅噛み附いた丈では到底詮術無く。乃ち嘗て胸中に描きし畫をば全部かなぐり捨て。神物人一切の靈威を究竟の主宰者に立つるに至りた時が。ヤットの事。旅順の落ちた時であつた。

之を事實に徴するに。坑道作業の譏たるや。當初、工兵科より進言せしに。當局參謀等は之に對して冷淡であつた。次に絶大なる重砲の使用も亦。要塞科専門の人より勸告せしに。當局者は全く己れを虛入して道に聽く迄の大乘的胸中を示さず。彼様の事は兵術上未だ聞及ばず杯と少々遲疑した。則ち這般の遲疑は自慢の武士道や大和魂が後に髪引いたからの遲疑で。其れだけ旅順陥落の時日が延びた。蓋し這間吶喊的勇氣は滅法に鼓吹されし代りに。冷かなる宇宙の靈威は『日本と露西亞が相對的(互角)に居る間はドコ迄行いても片は附かぬぞ』と暗示した。

日本の軍人ニ就中陸軍は『隔て力』が滅法に強い。其は薩長の人々同じく然りて。功名を私しする小供氣の處と。他人に見られたら物が逃げて行きはせぬ乎と云ふ秘密心とが。無闇に激しい。ソコで。或程度までは自力的責任と瘦我慢が張りて。随分世俗の膽を奪ふ所作に及ぶ。その代りに。他力

に屬する精妙なる算や力が入り難く。兎角高く接つて孤り困む。是れ即ち二乗式で有る。

佛弟子を以て擬せば。二乗は阿羅漢である。阿羅漢てふ者は。一人々々に悟りを開き。戒行を持し。ナヤンと銘々に體を成して居る、其れ故。衆は佛さまよりも遙かに解し易く。又眼前に智識力量を示さるゝ處からして。羅漢様に歸依する都合で。この『銘々に體を成した』と云ふ奴ほど厄介なる者は無い。釋迦が說法四十九年の間。一番手數の掛つたは這般の自我的にして固陋なる羅漢連で有た。即ち彼等は何分獨斷めに斷めて固く成てる事が夥しく。爾して相當に理窟や力量を持て居るから。其をば正面から叩き破れば。何やら彼等自己の天地が狭くなる様に感じて癖み且つ惑ふし。去り迎。彼等の自ら奮ける天地を叩き破らせねば唯一乗の妙法を容れしめ難く。釋迦は便ち彼等の素有し内含する所の佛性を傷けず。ソシて佛性の外廓を粉微塵に打碎くと云ふ六つかしい役目を執りたる者で。其慈悲と忍辱と難行とは實に言語道斷で有た。

故に釋迦は。法華經を説く迄の四十九年間を方便の說教に供し。二乗不成佛と説きて彼等の反省を促すこと痛切を極め。二乗をば貶して枯木破石に譬へ。以て彼等が煩悶の極に於て絶對的事境に心身を投映するに至るソノ時機を釋迦は待ちた。而して其は。法華座に至りて初めて。妙機一新。即身即佛と證された。其趣は。丁度旅順が落ちずに軍人が手古摺り果てゝ絶對絶命に至るのを待ちて。初めて神明は靈威を軍人に感孚せしめしと同等で。ソコに至る迄の大本營當局者は『ナニ、既定の戰略で落

ちぬ事が有るもの乎、乃木が手緩いのぢや』と言ひ。攻圍軍は亦くその露助め。我は日本男兒ぢや』と焦せる許りで。ナヤンと我自らの體を成して仕舞ふて。かたゝく成つて。茲に妙法顯現の場席を奪ふた。

左も無くば。旅順攻圍は。最初、**ヤツク**、中ごろ**シムミリ**、最後の猛撃に一舉して堅城を抜き。守將ステッセルをして降を請ふの餘裕さへ無き迄に最終が迅雷烈風のたる可き順序の筈。而して其然らずして。最初が迅雷烈風のかと見れば。中ごろ**シハク**で。最終に至りて初めて辛うじて敵將の降伏を見たりしぞ。論より證據。日本陸軍が平素二乗式たるソノ崇りを受け。ドン詰りに於て絶對絶命から得道した事を自白する。

即ち。其爲めに手數が二重三重に掛り。當局者も人民も共に待考けの肩が凝り。定めて幾多の壯丁は餘計に彼等の自我的にして固陋なる二乗心の犠牲にされた。

單に人間の智慧が多く寄つて來るか來ぬかと云ふ事さへも。此方の胸中の大乘的か小乗かに因つて岐るゝこと斯の如し。然るを況んや。全宇宙の靈威が寄る寄らぬの大事をや。

既定の戰略に獅嘯み附くてふ城廓が。當局の胸中に堅いから。敵の籠れる旅順城廓も亦堅かりしと觀せよ。而して一半の自力、一半の他方を合せて即是成性存々なりと爲す所の法華行者ならば。最初より衆智衆力を隔てざる故に。胸中が開け居りて。其れに準じて敵城もモット早く開ける道理ぞと信解

せよ。坑道作業も。絶大の巨砲も。我靈魂の影なりきと信受せよ。

ココが理上の悟證を超へて事上の得道に直入する所以である。法華經の現利益である。僧具無き子が宗旨である。

乃木大將が再び絶對的事境に入りて後如何に著るしく人物の進境を得し乎を注目せよ。武士としての乃木氏は。初より至れり矣。而れども。其大軍人たる域に入りしは。死ぬにも死なれぬ

苦境に陥りてから有る。大軍人とは。菩薩の境に入りし軍人を謂ふ。其は。自己の生命を惜まざる以上躍入し。己れの靈魂は必ず宣戰の目的を達せしめねば己まぬ。日露生民の慘禍を除かねば

死んでも死なぬ』と云ふ菩提心の實現に迄。己れを化し了りし處を指さす者で。此段の進境は。後日、乃木氏がステッセルと握手せし時の心からなる悦びに現はれた。氏は實に平和の爲めに。精神的にス

テッセル將軍の降伏に同情した。心身の全幅が此時敵將と相融化したらむ如く神々しく成たので有る。抑々乃木氏が。二人の愛兒を戰場に喪ふて。自ら武門の常てふ習慣的道義に心を休め。又旅順をば遮

二莫二攻めて攻め切つて。幾萬の健兒と共に斃れて後已まば。我は帝國軍人としての本分畢る。天皇陛下に申譯が立つ……と許りで。ひどく固く成る丈けの時では。未だ大軍人では無つた。

斃れて後已む丈で。人生の全部が相濟むものならば。支那の馬賊杯は日本人よりも遙かに傑

い。馬賊の刑に就くや。一人として女々しき振舞の者が無い。斬首場に掘られて在る穴一瞬後には自

分の頭が其に落ちる穴に塵が在れば。暫く猶豫をと劊手に請ふて。其を除かしめつゝ。自若として頭を差延べる。是が通例との事。

帝國軍人なりとて。大和魂ぢやとて。決死ぢや吶喊ぢや名譽の戦死ぢやと云ふ丈けの處に満足して、其で相濟む程に。人生は單純に非ず。死ぬにも死なれぬ時てふ者こそ「眞實の至極」である。乃木氏等は實に其處まで行いた。

爾れば乃木氏は。旅順開城前に。又其後の奉天戰に於ても。自己が部下の餘りに多數が餘りに慘烈なる忠死を遂げたるを悼み悲み。自ら氣の毒の情に堪へ遣らで。幾たびか陣頭に猛進して己が肉體を彈丸の的と爲す可く決心し。其を幾たびか試みた。而して其都度幕僚から沮止された。

沮止されたるのは即ち。死ぬにも死なれぬ天命である。ココからが妙法の領分。戦争の神は其まゝ平和の神である。

旅順戰の敵味方俱に絶對絶命の絶頂に登り詰めし其時。雙方等しく『靈魂の人』と爲り了りしが故に。神は其處に顯はれた。

即ち戰としての境界をば乃木が超絶すれば。ステッセルも同時に其通りたるが故にこそ。宇宙の全靈威は此に融一の相を顯はして開城の吉祥を奏せしめた者で。日露兩軍を各自に代表せる兩將は。此時既に戦争兼平和の神と共に呼吸を俱にした。

爾れば後日の日本海海戦、バルチック艦隊全滅は。旅順開城の日に於て神意天數の定まり居つたもので。東郷大將を主體として觀する時は。乃木は東郷の前身で。乃木大將を主體として觀する時は。東郷が乃木の後生である。

佛教には如來さまの姿を種々に立て。法身如來、應身如來、報身如來と區別するが。之を現證すれば。乃木如來は東郷如來の應身たり。東郷如來は乃木如來の報身たり。即ちツマリ融一合體の同じき如來也。

戦争は神聖視せざる可からず。天は時として戦争を人間に降し。因て以て生命感得の機會に供し。以て人間等が自作自盡せる小なる福利、壽命のそれ以上に超絶せる所の無量壽、無量福を啓示し乃ち人心をして清淨ならしめる所以の原道を命令す。是れ實に如來出現の一大事因縁にして。如來さまはついで其處に在す也。

扱。長崎出身三等軍醫正藤川二郎氏久しく大連の陸軍病院に勤務せるが。歸來。予は旅順陥落當時の活情を語る。予は豫よりステッセル降伏の眞原因如何を研究しつゝ、在るに付き。藤川氏が開城早々旅順に乗込み慘命極まる露軍傷病兵を救護せし實際談をば。深き注意を以て聽くに。嬉しや依て以てステッセル等の絶對的事境を識定し得た。即ち大抵の情實は豫て聞及べども。醫官たる方面よりせる開城當日の觀察は、又一入にて。今更ながら感^{のこほ}を新にせしめた。同氏の談を摘めば。曰く。

旅順露軍が一月一日に開城を申込んだ事は攻圍軍に於て全く豫想外の感^{かん}が有りた様子、其はあれより約一ヶ月は支へるものと信ず可き理由有ての事なるが、彈藥や兵は尙最後の踏任^{ふみかた}へを爲すに足りたるこそ實際らしい、然らば降伏は、ステッセルと反目の甚しきスミルノフ將軍や海軍將校の罵る如くステッセルの卑怯に出でし乎と云ふに、決して然らずと思はるゝ次第は、籠城軍は全く壞血病の爲めに絶對絶命に陥りた者で、僕はロスの病院に入りて見て驚いた。傷者ならば始末が早い、壞血病と來ては全く、初對面で、實に酷い者と云ふ事を初めて實驗した、齒莖から内唇が腐爛して、口を動かす事が出來ず、動かせば非常の疼痛で堪へ得ないし。ツマリ口中の天刑病で、口中が爛れ壞れて口を明いた切りのみか、熱して渴する、然るに其に與ふる飲料水皆無と來て居るから、病者はウン／＼呻吟し煩悶し、天を仰ぎ地に轉がりて死を待つ許り、餓鬼と地獄の兼帶だ、此壞血病者が兵の總數の三分の二に及んだと成ては、ステッセルは看々^{みま}萬餘の生命を戰事以外の此殘虐なる病症に捨てさせる決心の外は、モー一日も籠城が出來なく成た、

尤も將校は孰れも此病に罹らぬが、兵は日に増し此病に罹りて、最早收容する寢臺も無く、ゴロ／＼様側に轉がせて見殺しする外無し、其慘狀たるや甚し、況して日本軍が急に吶喊して命の取換を爲して呉るれば、露軍も差引が附いて、所謂城を枕にして討死する甲斐も有らうけれど、二百三高地を堅く捉へて、其處から要塞内部を手に取る如く展望して、砲撃の角度を一分一厘違はず觀測して、

後ろの方の重砲隊に電話で通して『選り喰式』でチワ〜と砲撃するに至ては、總討死は全くの片情死で、お負に無残なる萬餘の壕血往生者を作らねばならず、但し支へ得る期間とて極永くて一個月大抵は二週間に過ぎないから、守將たる人が人間なる以上は、ココで勘考せざるを得ない、バルチツク艦隊でも近々に来る見込が有れば其も格別だが、後日聞けばステッセルは日本海軍陸戦隊が攻圍軍に加はり、砲臺を乗取た破格の働きを望見し、望遠鏡に海軍帽の映つた時はステッセルは嗟嘆長大息したさうで、當時旅順は全く交通遮断され、外界との通信絶へたれど、斯く日本海軍が海上を開放しにして陸戦に加はり居る様では、到底艦隊が早急に来る見込無しと悟つたの事、兎に角衛生材料の缺乏は旅順の開城を二週間早めさせた者で、ステッセルが兎に爲つて見殺主義を取るか否かに就ては、當人が何程思慮した乎判らぬ。

實に壕血病と云ふ奴は酷い奴で、僕はアレを見た時に心中に深く感じた、元來斯かる堅固の要塞を作るのは、敵味方無数の生命を喪ふ本で、要隘は畢竟罪惡だ、其れ故天然自然が懲しめの爲め配劑して、思ひも附かぬ又防ぎ得ざるコンナ病を降した者だらう、ソレでは全く一種の天刑病だと思ふた。

同氏の談中壕血病は鬼のロスを天が刑する道具と解せし點は、最も予が心を獲たり。人間力には限りあり。宇宙の靈威一たび發する時には、旅順も落ちるのが當り前で、妙法ココに在り。兵力や戦略や

巨砲等は法華經二十八品の數十萬字の内のソノ一字にも權衡はぬ。

籠城軍の祖國に對する忠節や、生存的根氣に關しては、吾等は旅順陥落前より滿幅の同情を寄せ。感服すべき點をば一として見通さ莫つた。殊に旅順降將等が長崎に於て解放さるゝに際しては。彼等の心胸を聴く可く全力を盡して。精しく開城の活光景を識り得るに至り。予は愈々露人の精力を洞察し。乃ち心中に於て十年の實地學を一遍で成した様に感じた。

此方に同情が無ければ、先方の美處真處が我の鏡に映らぬもので。同情なる者は。人の度量若くは情愛より生じつゝ。他を引附け又は融化する原力である。

獨尊自大の大和魂連中には。往々この邊の『包敵人』的度量を缺き。敵を揚ぐれば。自ら貶せらるゝ乎の如く感想し。従つて手製の名譽に浮身を覆すに至るが。そんな屁糞の詰つた丁見では。世界統一の大業は期す可らず。又國人同志が雄大快活なる發達を遂げ得ず。箱の中に容れた様な窮窟なる舊式軍人に化して了ふ。爾れば予は。自らステッセル等を世界學の師なりと觀じつゝ。此心持をば戦勝に誇る無邪氣なる同胞に移したく深念する。

其は扱置き。攻圍軍が旅順水源地を奪取するは。籠城軍の生命を三分の一ほど斷つに相當した。水源地の掩護としては。勿論、絶無の堅壘。即ち日本軍が豫め偵知し得ず。イヨ〜打衝かつて見て發見したる人造八角角堡。所謂クロボトキン砲臺にて酷い者が在つて。非常の犠牲を我に課した。

けれども。之を奪はれて後の籠城軍が飲料水に不自由を感じたるは實に重大なる打撃で。最初は支那街又は東港の溜池等より比較的不良の水を運搬し或は蒸溜水等を使用したれども。最終には間接射撃の彈丸が落下する爲め。其も得協はず。従つて傷病者に給する飲料水に事缺く苦境に陥つたから。地獄の火中に在ると同じき壞血病者の口中熱の苦患は。實に想像するに餘り有り。

口中が爛れて口を明けた切りで死を待つ苦患は。身體の他の部分が何等の故障無さだけツレ丈一段つらゝ。實に是は死ぬにも死なぬ責苦だらう。

然るに。凡そ病者の渴を醫す可き炭酸水とかビールとか云ふ者も一切竭き。又傷者の衛生材料即ち綿帶や藥品やも大抵品切れと爲りて。看護婦は上敷布に鹹水を浸して負傷者に宛飼ふと云ふ始末。是に至りては。日本軍の彈丸や劍戟は寧ろお茶の子で。内部の不勝手が最大強敵である。

元來この壞血病なる者は。醫術界に聞及んだ病症なれども。實驗する場合は稀で有たもの相で。原因は不調和なる惡食に在り。即ち肉類や麵麩ばかり食用として野菜を生きたる野菜を副食せざること久しき時は。ドーして歎。壞血病が起るとの事。

然るに籠城軍は。彈藥や主用の食糧に於ては尙ほ支へ得る程の準備を留めたるに拘はらず。愈々海口は日本海軍から封鎖されて。支那ジャンクの密輸入が絶ゆるに及び。野生の青い物をば十日に一度も顔見る能はず。石の如き堅麩麩を嚙つて穴の中に屈むこと日又夜、月又月たるが故に。露兵はホロリ

く壞血病の爲めに守備線から減り行き。段々其と氣が附いてから。苦しさの餘りに松の樹を生嚙りに嚙る者さへ生じたが。其さへ數多からねば所詮徒勞に歸し。とうとう要塞内部は八大地獄と化した。坊主の言草では無いが。地獄極樂は他界にあらす現在の娑婆に在りて。旅順のは。地獄道と餓鬼道を兼帯しつゝ。畜生の如く穴の中を出入して。修羅道を演じ。其が極點に至りて開城菩薩の來迎を渴仰した者で。是がホンの渴仰である。

實に旅順籠城の兇敵を降伏せしめた當の威力は。野に生ふる青い奴で有とは。驚く可し。我は人間や神と同格同威力にて候ぞと。青い物が名告を揚げる。

だから。言はぬ事無し。人間式の力には限度が在る。眞の靈威は神物人一切に存する。爾して野菜の如き非情物が。世界最強の兩軍を翻弄する程に。宇宙は妙不可思議で有る。サー此處が絶對的事境だ。

籠城軍の將校等は。一向此病に罹らぬ。其は彼等が自分等の野菜をば辛うじて所有したからで。比較的天人の境界であつた。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六道は斯くて揃ふた。是に至れば。赤十字總監バラシヨッフ氏杯が得たりと口を利いて來る。

赤十字連は。豫て人道と云ふ事を聞及んで居るから。ソロソロ説教を初めた。是が即ち如來の教を聞

は三割増とかの外の外は一文の恩典にも關からず。眞に軍サする動物として飼はれて在る切りなり。其れのみか。下士に至りては。如何に拔群の働を爲すとも將校に昇進する能はざる制度たるが。其に引換へ將校の待遇の過大なること甚しく。將校の収入は日本のより三倍には當らう。其れ故將校は衣服飲食に贅澤を盡し。俱樂部を有し。或は看護婦を妾にし。平時戦時共に樂天地を極め居る。ソコで兵士はウオッカ酒や煙草の一本でも貰へば。肉を與へられた狗の尾を振る如くコロ／＼喜ぶ次第で。下士の月給は極上で七圓程には當るけれど。若し下士の關門から唯一重を踏込んで少尉に進められ得むには。殆んど幾十倍の實収入と與に名譽威嚴の快樂は天上に入る如く變つて仕舞ふ。其隔懸の絶大なる事は日本兵士の想像し得ざる所である。

さればなり。旅順守將ステッセルは。尋常一様の防戦にては到底日本軍に敵す能はずと必々感じたる末に。皇帝より與へられたる特權を活用して。一大變通を案出し。士氣收攬。軍氣鼓舞の活法を斷行した。开は即ち籠城守備の全軍に對して『殊功有る者は下士と雖ども將校に拔擢さる可し兵士は下士に昇進され且つ恩賞は臨時に與へらる可し』と云ふ露軍に在ては開闢以來心理的物質的兩つながら破天荒なる命令を發した事で。是れ實に籠城露兵をして精力百倍せしめたる本因と爲なつた。漫りにステッセルを貶する勿れ。降參せし彼等を笑ふ暇あらば。露西亞には露西亞の武士道有る事を顧みて。大和魂自慢を抑損するの道に供せよ。日本が偏へに。天皇陛下の威徳恩賞を軍隊の生命と爲して得々た

れば露西亞には亦露西亞の武士道やら士氣振作の道具やらが有て。一向日本に對抗する材料は乏しきを感せざる次第は。ステッセルの此英斷に徴して餘師あらず耶。

藩閥の人々、心せよ。卿等は、天皇陛下を藉り奉る外に。精力集中の原道として果して何物をか所有し召さるぞ。

今度克ちた。今度までは天が克たして進上した。祖宗の威靈が顯はれ諸天善神が加護して斯の始末。去り乍ら……あゝ去り乍ら。

氣味悪し。畏ろし。

食はずには人間生きて居れず。良き生活と高き精神の的とを有せずば。善き知慧が出でず。無限の精力が發せず。神明は人間式の力を恃む者に與みせず。戦勝は畢竟其時のもの也。

國人等徒らは人術と拵へ事と假妄の勢力とを崇拜すること偶像を拜む如くして。而して法華行者子の如き者をば心から友とする一大因縁を仇にせば。則ち行末果して如何なる可き。妙法は曰く。汝等此儼ならば。次の時にはコチャ知らぬぞと。

旅順開城の曉に。籠城、攻圍の各主將が手を握り合ふて肝膽相照したるその一瞬間の乃木がステッセル歟。ステッセルが乃木歟分つは難き異體同靈。只だ見る兩個の身邊には戦争兼平和の神の光明が煌々乎として圍繞し我も人も光明に撲たれて只だわつと許り感に伏せらるゝを。是れ苟くも氣血

有る人士の既に當時に於て看取せし所なり。

此一瞬間の心持が宗教である。妙法をば難解の者と速諒して乃ち退轉する勿れ。乃木スゲツセルの手を握りし際。靈魂全く融一せし事を人々が氣が附かば。唯だ僅かに一步廻りて。當の敵味方たる此兩雄が旅順戰の絶頂の時に於て。互に絶對的事境に歸し。彼等が己れ其と意識せざる乍ら。互に靈魂界に相融和せし所以を。人々争かで信解し得ざる事やある。

尙ほ平たく解せば。左しも猛勇なりし旅順の露軍も。鬼神を欺く攻圍軍には對抗せしかど。么微なる非情の生物たる野菜から兜を脱かしめられたとは。天道の配劑誠に奇なる哉妙なる哉と妙法の働きを看取して。因て以て神意天數の絶對的權威を知るのも捷徑なり。開城如來と云ふ如來さまは。敵味方等しく之を専念して微塵の妄行無きその功徳に感應して。其處に光明遍照十方世界の姿を顯はし給へりと解するも亦宜し。此は先づ他方に歸依して自力の縁を開く方便なり。即ち斯く信解して扱振り返れば。敵味方と相分れて戦ふのも。又人間の力の有らむ限りを雙方が盡して而かも一向捩明かず却つて思ひ掛無き時に。開城の事が行はれて仕舞ふたのも。つまり之を致せるは彼我銘々の靈魂の力に在り。普通に思議し比量し得る所の人間力では到底どうにも始末の出來ざる絶對絶命の絶頂は。只だ靈魂が捌くものよ。而してその靈魂は神物人一切の融一たるが故に爾く青物さへも人間と與に生命界に融一し。乃ち開城を手傳ふて。人と神とに合して至大の權威を行ふものぞ。

以上の如く觀じ來れば。日露戰爭は天與の神聖事也。旅順開城は人類の獸的鬭爭史に非ずして。十界一如、一念三千の妙法の縮寫圖なり。如來もゴットも人間も物力も等しく妙法蓮華經の中に在りてふ靈界の證據物なり。而して予は則ち日蓮生涯の本懷を六百年後に宣明する本佛現證者にして。五千萬民衆と與に俱に實驗したる事實に訴へて。元原的神靈の體用を精しく證示する者とす。茲に無間の靈鐘在り。睹むと欲して而して得ず。只だ靈の撞木を揮ふ人には。大千世界に響く妙音を發す。开は即ち鐘と撞木の合ひが鳴る處にこそ、鐘の生命も撞木の生命も等しく實在すてふ「自他同靈の本事」是也。本職の僧侶達及びキリストの子等。願はくば爾の生命を自他同靈の眞事境に獲得せよ。予をして復た「水淺ふして魚無し徒らに鉤つばねを下すに勞す」の歎有らしむる勿れ。

十一、精進波羅密の解

總じて亞細亞人は。就中明治式日本人は。主義と道との如何よりは。所作の結果を問ふに急なり。即ち己れ一代にて己れの爲す事の効能を凡衆や村人や妻妾やの目に見ゆる様。俗世的現在の形體的ならしめ度がる。政治家や實業家には是が最も多い。又一般の人氣が數量形體をのみ惟れ問ふて事物の精神に及ばざるが故に。苟くも此國土に於て成功せむと欲せば。宜しく此人氣を察して巧く符る様自ら處せざる可からず。因つて「成功主義」てふ様の者が福音として歡迎され。賢しと云はるゝ人は

大抵俳優的に處世の藝道を専らとす。ソコで幾分か俳優式の智慧を用ゐざれば。第一善き階級の美人娘が嫁に来て呉れず、次に交際の便宜を減する、次に権門富豪が買込まず迎。皆々懸念す。例へば又邦人は音楽を聴いて感激する耳を養ふよりは。自ら半可的に彈する手を先とし。詩の妙味や劇の神髓に酔ひつゝ、作者又は批評者の位置に立つ事をば懶しとして。文學者や紳士が自身で芝居を演じて婦女に誇り度相成り勝なり。是等はラツパ節の流行すると同様にて。當用早譯かりの性癖より出たり。俗世的成功の本尊とも云ふ可き伊藤侯が。生前に楠公と對峙して自身の銅像を建てしめし如きは。這般無靈紛華の時代精神の權化なり。故に明治式日本人には。隱徳と獨知の節と無償の犠牲が空し。見よ。名譽の戦死は即是犠牲たるに。兎角「華々しき打死」てふ文句附きの犠牲たるよ。

天下に一人の知己無くとも。唯だ天は我を知ろし召すてふ事を。心の慰めとして大乘の行を積むと云ふ人は。段々減少し。犠牲自身さへも俗世的に名譽なり何なるの報償を期しつゝ、其と爲るとは。實に異妙の世なりけり。否。至誠、無念、以て犠牲に甘んせし人も。世間がワザ／＼俗的に倣して仕舞ふなり。況んや其他をや。戀愛さへ打算的也。

斯かる風潮の時に當りて。神靈の實驗を説き。世道人心の復活を圖る杯は。蓋し徒勞に終らむ歟。予は本著を公けにする事さへも諸友より危ぶまれたり。シカシ。若し世俗に於てワット雷同的に受けられ。又は形體的に吾等が發達せば。本志本懐は却て貫き難からむ。吾等は世俗をば靈に於て吾に引

附ける迄自行を積まざる可らずと擬念す。是れ予が精進波羅密なり。

畢竟は時の支配ぞ。十年の間に若しくは死後に本志本懐が知られなば吾住する西海の果ては。東京よりも光明鮮かならむ。諸佛諸天は此に集まらむ。時來らずば何處に居るも同じ。

時とは己が修行の大成せし時なり。吾若し靈界に大成せば。亦必ず事上に驗應あり。今日の事豈徒勞に終らむや。先づ其れ迄は予は飽まで筆の勞働者なり。立言界の犠牲也。

予は寧ろ日本人就中東京人が。因果應報として。天譴を蒙る日あるを信す。

予は手に取りて見る如くに。明治式官僚や才人が東京府下の始末にさへ窮するの時遠からざるを知ると自信す。而れども予は自ら揣りて。先づ當分都門人士の成行に一任し。當方はお靈屋的に吾道吾文を保護せばやと念じて。日本人の首腦たる東京人が自覺の機の到來を待つ。予は東京を知り過ぎるほど知る。眞の感化はトマモ當分我力に及ばずと承知し居る。故に今は鮑の殻を以て大海を乾す同様の精進を覺悟して。日本の敷居たる長崎に立ちつゝ。國國の潮水をば切々と搔酌み。自己の精進波羅密が。果して東京を動かすに至るや否やを。對明治式風潮の決勝點と心得居れり。开は精進波羅密は能く鮑の殻を以て大海を乾さしめる事を釋迦教へたれば也。

佛敎に六波羅密と云ふ菩薩行の節目ある事は人知れり。シカン之をば抹香くさく講釋し行く故に。其は徒らに空理迷想の對象と化し易く。コンナ事は眉間の邊りからキラ／＼と光明が發する如來諸君の

專有物で。今日の開明社會には適用六かしい者と。取極めらるゝ儀なるが。誠に佛教の精神を尋ねて之を修むる時は。六波羅密は吾人凡夫が生死を解脱して眞の靈魂自照の事境に到るッノ梯子はしごで有る。眞生命の飯めしである。

波羅密とは梵語にて、意義に含著多きが故に譯せず其まゝ通用し來れるなれど。畢竟は「信行の極處」と云ふに近し。

眞生命に達する徑路が幾筋もある。其をば概略に區別して六ツと爲す。六ツとは。

- 一に曰く 檀波羅密だんぱらみつ
- 二に曰く 戒波羅密かいぱらみつ
- 三に曰く 忍波羅密にんぱらみつ
- 四に曰く 精進波羅密しやうじんぱらみつ
- 五に曰く 禪波羅密ぜんぱらみつ
- 六に曰く 般若波羅密はんにゃぱらみつ

檀波羅密の解を云はし。昔者釋尊尸毗王と爲りて此を修むる時。帝釋たいしやく天が他の一天王を語らうて。試たましに來る。帝釋は鷹に化け。合棒の天王は鳩に化け。鳩が王の懐なごみに入る。鷹續いて飛下り。王に鳩を要求す。王答へて曰く。我一切衆生を憫あはれむ。於衆生無偏頗むへんぱん以慈悲爲先。以檀度爲行。生

有を者を殺さず。敢て與へじと。鷹重ねて言ふ。『我は衆生に非ずや。今日食は定まれる物也。既に自らの食を奪はれて飢うねん事いかせむ。慈悲平等の勤行ごんぎやうならば。王争かでか我飢をも憐み給はざらん。社會主義的權利論を持込む。爾時に尸毗王心を決して鳩の命をも助け。鷹の飢をも息やすめむと。自ら股の肉を切割て以て鷹に與ふ。鷹重ねて言ふ『王の肉極めて小なり。鳩の分に稱なぞはず。同じくは等分に與へ給へ』と。爾時に王は秤を以て校量し。鳩と肉とを權合かひあはせせるに不思議にも鳩は猶重く。肉は殊に輕し。乃ち又左右の股を加ふ。猶鳩の分量に及ばず。又肘の肉を加ふ。猶不足なり。又背の肉を切りて懸けるに。猶以て其分に暨およばず。總じて一身の肉を切り。其を懸るに。肉猶輕くして鳩に及ぶ莫し。其時鷹、王を責めて曰く。『御身の肉盡くれども終に鳩の分量に敵せじ。今は只本の鳩を返し給はれ』と論理井然たり。王答へて曰く。我今立どころに死すとも鳩を返す可からず。イテ總身を與へむと。秤に向ふに。筋絶へ力竭き果て。倒たふまに轉まび。地に伏す。時に王自ら身を責めて。伏しつ轉まびつ。秤に取つく。其心、塵ばかりも悔るなし。其時大地大に震動し。天より種々の花雨はなこりて。諸の天帝達が舞まりて。釋尊を讚美す。鷹も鳩も元の天王と顯はる。帝釋問ふて曰く。今此痛苦しくして後悔多きや否やと。王答へて更に悔る心なし。都みやこて苦しみ痛む思なしと云ふ。帝釋曰く。其證據未だ顯はれず。豈信するを得むや。王又答へて曰く。若し是れ虚妄の說ならば。我身の疵、癒る義なからむ。若し實の誓ならば。是れ即ち平癒せむと。此誓を致す時。王の疵忽ち平復す。是を釋迦菩薩の昔の檀

波羅密と申す。

右は事實としては妄誕なり。教としては小乗なり方便なり。

而れども妙觀すれば則ち大乘の眞諦此に藏す。

總じて權とは。一切を施し盡して悔むる義なり。限れる小生命を捨て、無限の壽を取る。眞の幸福は此に在り。凡そ私有と云ひ個人と云ふ一切の意念を斷絶して身外の萬法に融合する迄。我自ら他を隔てざれば他亦我を隔てず。爲に五尺身軀の生命が引延されて。宇宙の神物人一切の生命と與に同化する。されど。凡夫は愛著の心深き故に其が協はず。『圓い世界を切り刻み。權利で暮す角な人。短かい命ぢやないかいな』と相成る。而して世界の多數が檀波羅密の此眞味に服する時ならでは。社會問題は解決されじ。ドコ迄行くとも。世は貧富、強弱、智慧の修羅場たるを免れじ。

歐洲の社會が如何に慘劇なる社會問題に沈みつゝ在る乎を見よ。就中露西亞の暗黒を見よ。革命黨員某過般來りて予に其情を説くと切なり。彼等は居住地を放逐され。汽車にて立退く際。何れの停車場からか引卸され。何處とも知れず。闇から闇で。生命の秘密處分を蒙る。ソレをば辛うじて遁け來りし也。露西亞の内部はツマリ地獄也。予聽いて益々世界人民の生活問題は國際問題の以上たるを感ず。食はれぬ者が多くなる様に歐洲の社會が出来て居るから也。即ち是れ他を隔て、孤り富まうと云ふ個人主義私有主義が禍根なり。アー生命の共通！。世界人類を無上幸福の寂光土に致す唯一乗の我法門

は何れの日か歐洲に顯揚されじ。

一例は先づ斯の如く。他の五波羅密亦各々面白き解有り。禪波羅密の標本杯は却々愉快である。昔者尙圍梨仙人と名くる人。久しく石上に禪定し。心身動せずして遙かに數日を送るに。飛鳥之を見て。善き樹の杭株と思ひ。終に子を産み育つ。其時仙人は三昧を出でて是を思ふに。若し頭を振り動かさば。雛子地に落ちて碎けなむ。又親鳥も來て温めじと。又舊の定に入れり。其後。鳥の子成長して翅生じ四方に飛去れり……。一休禪師曰く『釋迦と云ふいたづら者が世に出で、多くの人を迷はせにけり』。シカシ頭上に鳥が巢を喰ふて其子が巢立つ迄。禪定を極める杯は珍話なり。膽力もココ迄來れば。人間は流彈に死なぬで有らう。譬喩の精神を體せよ。此は現在の事境に現證有り。日本海海戦に先だつ數日。我聯合艦隊の智勇をすぐりし幕僚は。ロヂエストウエンスキ並にネボカフトの兩艦隊が全部の勢力を連ねて對馬沖を冒し進む乎。將た快速の巡洋艦數隻を北海方面に分ち、出沒變幻して我艦隊勢力を割かしめ、本隊は決戦を辭して只だ一文字に浦鹽を指さし以て幾分の勢力を浦鹽艦隊に合して再舉を圖る方略ならざる乎。此重要疑問に、腦汁を洩し。ドー考へてもハ艦隊全部がノシ〜と對馬沖を通り相に思はれ無い。況して此時。いよ〜ハ艦隊上海沖に進みて結束するに及び。偶々琉球沖にて運よくも敵の一運送船を生捕り。該船の船長船員を問訊し。手に手を盡してとら〜敵艦隊の進路を自白せしめし所。果して露艦隊の内三艦とやらは南に分れて北海に進みたりと。サテ〜誤り無し

と信ず可き申條なり。前後種々の報告と照し合すれば合せるほど。此事に間違無ければ。大本營も亦此最新の情報に心を動かし。東郷大將に宛て参考として其事を注意す。艦隊の諸參謀も亦爲めに思を碎く。

實に此際は迷ふが當然で。迷はぬが不當然ぐらゐの者なり。日本開國以來最大の困難にして一步違へば萬事休する此際。湊合せる夥多の情報を概括して判断を定める材料とするに當りて。人間の智力を以てしてはドーしても此最後の有力なる情報を無碍に捨ること出來得可からず。大事を取れば取るほど。之に對してドーなり手配を爲さねば氣も魂も落つかぬ筈。

然るに。斯る至危至險の機會に。東郷大將の意見如何と云ふに。大將はロヂェスト提督たる者必ず全艦隊を以て對馬沖を蹴破る方寸たること疑ひ無しと。天算人算を括めて一旦決定して後は。其平素の流儀通りに一個の椅子に凭りたら最後。ソノ椅子をば終日離れず。如何なる情報も開放しに止め。感じたのか無神經なのか一向他より付り得ぬほど。ウン駄りの底知れず有たとの事。

東郷大將は實に此時『ハ艦隊必ず對馬沖を通過す故に我本據地をば一寸も動かぬと云ふ三味』に入りた者で。頭の上に鳥が巢をくふまで動かぬ尙圍梨仙人と同格同境で有る。東郷の禪波羅密は。ハ艦隊を全滅せしめたり。至偉至大の功德此に存す。佛教は空理ならざるを得ず可し。

サテ。精進とは斷へざる努力を謂ふ。念力暫くも息まず。所謂水を遊ぶに雲時なりとも手足を

息めば渡ること難からむとの心持にて。何處迄も進む。

昔者天竺に大施太子てふ一皇子有り。衆民が衣食の爲めに罪業を造るを見て。惻隱の情に堪へず。我所持の財寶を普く人民に施す。太子の寶盡きて父王の寶をも施す。斯くても慊らで。衆生の爲めに身を捨て、龍宮に趣く。太子以爲らく。我聞く海中に無上の寶有り。如意寶珠と名づく。いでや我龍王に請ふて如意を請取り。衆寶を飽迄施さむと。一の神仙を語らひ。五百餘人を引率して弘誓の船に打ち乗り。念力の舸子を督し。辛苦多年にして龍宮の邊りに到る。金沙の濱、銀岩の峰、遠見の背景宜しく有て。薄ドロの鳴物入にて暮明き。朱橋の下。青蓮の池に靈蛇神龍纏はり。太子を出迎ふ。舞臺半廻りして玉樓の上に龍王と對面の段なり。太子曰く。吾は是れ天竺波羅奈國の王子也。獨り衆生を濟度せむ爲め毗梨耶(精進の梵語)波羅密を修行す。ドーメ龍王。如意寶珠を寄附せぬ乎……と掛合ふ。龍王太子の慈心を歡喜して。七日の間太子を留め。纏て如意珠を奉り。神力を顯はして。瞬く間に太子を本土に還す。

如意の寶珠は讀んで字の如く。意のまに……。白金、黄金、金剛石、夜光珠、何なりとも雨せる故。之をば無價の珠と稱す。無價とは三千大千世界でも及ばぬ程の珍寶故。價格評定の難き事を意味してなり。欲しきや諸君。吉無上の福音を傳ふる此本一冊一圓左右とは亦無價同様なり。

扱太子は愈々衆寶を雨さんと誓ふ時に。大海の諸龍が驚動した。何を申すにも。龍宮第一の寶を人間

の手に渡すとは。是れ賈國の所業なりと慷慨激昂し。遂に諸龍が人間に化けて。太子睡眠の隙を窺ひ。首尾よく珠を取戻し、本の龍宮殿に納む。太子睡醒めて。ケチな日本人が唯つた十二億圓の償金取損ねし講和條約の失望よりも尙ほ失望したるを尤なる。

太子一人大海の邊に赴き。喚んで曰く。諸の龍神儘かに聞け。大詔曲の龍王かな。只今珠を返さずんば忽ちに大海の水を汲んで龍宮を露はに爲す可き也と。其時。龍共呵々々と大笑し。嘲りて云ふ。金山は朽失するとも大海は乾かし難し。大海の水何れの時か盡さる期あらむ。若し此國の海を移しても何れの海にか海水を容れむと。然れども太子毫も屈せず。誓つて曰く。『生死、海盡し難し。我今是を盡さむ。無明煩惱、滅し難し。我亦是を滅せむ。無邊の衆生、度し難し。我尙ほ度せむ。菩提の道得難し。我亦終に成就せん。泥んや有限の海水、争かでか盡す義莫からむや。骨肉の命は盡るとも。此願力は懈らじ』とて。太子海濱に立ちて望み。鮑の殻を手に持て獨り大海をかへ乾す。設令此生に盡さずとも。生々世々懈怠せじと。一心決定して七日七夜に及ぶ。爾時に。梵天王や帝釋天等が遙かに太子の振舞を證覽し。其願力を歡喜して。いざや力を合せん連。各々下界に下り給ふ。之を見て。有らゆる他の天帝等が太子に助力して。面々に海を浚へる。三十三天王、四天王、毘沙門天を先として衆神が迷塵八萬の底に入り。大海の潮を汲上げて。遠く空中に掀揚ぐ。在天の諸神は。オイ來たと之を受取て。大鐵圍山(北極)の外に遣る。纏て大海の水を半ば乾し去て。最早龍宮も露はなり。

サ。龍神共は嗔驚仰天した事夥しい。既に其國も己が生命も乾揚つて仕舞はうと云ふ。誠に危い所に相成ては。兎角を言ふと協はず。大いに騒いて寶珠を取出し。契約履行を致て再び太子に奉る。是即ち釋迦前生の精進波羅密也。

扱は大海が鮑の殻でも酌乾し得るぞ。人力には限り有れど。意念の力には限無し。行詰つても尙ほ當つて碎けつゝ。進み進んで窮り無き此精進波羅密を體する時は。天地一切の神物人が來りて我に加勢し。何時かはバツト途が開く。旅順が開城したのは其なり。コロムブスが亞米利加大陸へ入寶を獲しも其なり。種々の大發明を行ふ人々も亦其なり。一人の力は即ち千百萬人の力なりとは形容の辭に非ず。實事なり實境なり。感應は無限の天力なれば也。

易に曰く。吉にして利しからざると莫し天より之を祐くと。天祐は精進波羅密の果なり。予日本の敷居に立ちて。却つて日本の世道人心を正さむと志し。努力不斷、念念息まず。長崎は海濱で。日本は大海の水。而して予が筆は鮑の殻なり。有らゆる明治式の才人學者は龍神の族なり。彼等は財寶の外に一物だも貴き者を有せじ。故に只だ其を獲むが爲めに神を頼み佛に詣でるのみ。米國の事業家が大乘俱濟の心を事上に示し。數億の遺産を公共に寄附して心地よげに人間商賣の年期を仕揚げる如き事は我邦人に見難し。天眼悉く之を承知致す。而かも相替らず人心の海水を酌乾しつゝ。靈の一氣に惟由る。

爾れば從來、斯く迄我心事は人に知られぬものと歎き。或は諸の障礙、迫害、誹謗、讒構に煩され。總身を肝癢の塊まりと爲し。ウヌ元老の輩、其他隨從の明治式朝野人士。よくも、一私利私術私名の風潮を盛にして天下人心を没し。無靈不信にして只管紛華なる人情を作り果はせけるよ……と。青筋張りしは早曉昔の夢。今は誠に天佑の必來を信じて。觀念を極め了りぬ。何れその内。海水半ば乾揚つて龍神共がバタバタ狂で騒ぐ時には。宜しく拍手喝采を願ひ申す。

伊藤侯も。山縣老も。其他之に感化されつる有ゆる明治式才人や權勢やも東京府下の生活問題始末にさへ窮する時が来る可し。开は畢竟、龍宮が露はに成る時なり。世道人心てふ事をば全く度外視して。上下共に形式俗權の奴隷、名利上の乞食、を職業とする外に餘念無く。心靈上は則ち教界學界までも鐵獄の如く錆び且つ朽ちむとするに。如何ぞ重大なる天譴の下る莫からむ耶。而して彼等の天譴は却りて予に取りての天佑也。彼等、非常の窮境に陥らざる限り。予の説く所に無感覺なるべく。死地に入るの時。初めて神靈を渴仰す可ければ也。

十二、「豫言」の合理的可能——國寶世寶

さよ／＼著者独自の神靈實驗をば。日露戰の經過及び平和克復前後の事相に由りて證示すべく。ページは進みつゝ在り。

されど其に到る前に。尙ほ兩回の前提的説話を要す。蓋し著者の神靈實驗は。著者自身が日露開戦及び戰爭平和の交錯に關して。重要な豫言を敢てし。其が確然として驗有りし次第と本據とし。更に宇宙の數理及び易理は。事物の活動を約束しつゝ。數の妙用は却つて神靈の本源を手繰らしむて事實を副證とするが故に。當世學界の普通思想に對しては。立言の性質が餘りに異端に屬し。怪訝を速くこと深ふして。爲めに一見輒すく唾棄さるゝの恐有り。是に於てか。予は先づ哲理上よりして豫言てふ者の可能を説き。次に易理の本據及び其應用を。著者獨得の『妙數理』と並せて説述し。以て當代の機根を攝受する素地を作らざる能はず。イテ前者に論及せむ。

凡そ人類の思索の方法は。絶對と相對、平等と差別、綜合と解剖、直覺と實驗、この二對の行き方より外には無い。而して此二對を兩つながら行ふて相悖らしめず。萬物に貫通して居る所の理法を索め。更に理法の原因の又原因を尋ね。次第々々其根抵の根抵へと深穿して。絶對圓妙なる一物、即ち『一』は『萬物』なりてふ様の處に到達するのは。佛菩薩の知見。或は大哲學者、大詩人、預言者の心境である。

『海岸は岸から見れば海で、海から見れば岸である』と。コンホルドの賢人が言ひけむ如く。海と岸とを切つて離して海岸てふ者の存在を意義し得やうとは人間の想像の及ばぬ所である。平和が戰爭に化し戰爭が平和に化すると云ふ事の本末は。戰爭と平和とを合體せしめつる海岸である。予は則ち『戰

争が岸なら平和は海である。而して二者を綜合したる上に二者貫通の生命を發見したならば。さうして更に生命の元原に迄深穿したならば。日露戰の發生并びに收束を約束する天の數理をも冥感して之を豫言し得る者ぞ』と主張する者で。精しく言へば。其は外面と裏面とは二にして二ならずと知り。外面に即いて云へば外面が差別相の『一』で裏面が『他』なれども。裏面に即いて謂へば外面が『他』で有て。表裏合せて謂へば一物であると知り。さうして一物の表裏てふ存在のみならず。他に『多大』の存在が有る事を知り。更に差別相の『一』と『他』とを『多大』てふ者と與に溶解し盡して茲に唯一實在を認め。唯一實在のソノ生命を轉ねて。翻へりて差別相に返りて。差別相が本源より出て、本源に復る消息を尋求して。ソノ去來の道行きを支配する數理を感得する仕事が其である。

二對の思索方法の一に偏する者は。信すると云ふ事と悟ると云ふ事と發明すると云ふ事が出來ない。其は思想が表裏二面の中の一に限られ。或は陸と海とのみを識りて海岸てふ意義を確保し得ぬからである。發明家てふ者を物理物力を解剖の一邊に於て搜かし廻る者の様に思惟するは誤りである。發明家は解剖を主用しつつも綜合を併用するからこそ解剖の範圍が周到なるを得るのである。爾してイザ發明と云ふ刹那は九分の解剖に因て突留めたる理や力のソノ餘業を一分の天來的感得に俟つ者である。即ち發明家は。ツイ其處に在る所の物象界の理法と勢力とに。我精神と智力とを直觸させる迄行して。新たなる理と力とを啓き。乃ち此處よ是よと叫ぶ者である。

發明家てふ者を解し得たならば。豫言者てふ者も解かる。

豫言者は。發明家の如く思索上の解剖的勞苦を積まされども。直覺及び綜合觀の精力が非常に卓絶して。悟り且つ信する靈能が。彼れの心身と宇宙の一部とを。時間の上に於て直觸合體せしめる者である。

發明家はスペース(空間)の上の心物融合者で豫言者はタイム(時間)の上の心物融合者である。

然る所。空間と時間とは。等しく宇宙萬有即ちネーチャー其れ自體の本質である。

物の外面と裏面との如く。雙方相俟ちて『一』を成し『他』を成し。而して『存在』を成す者で。之を觀る位置に因て彼と云ひ此と云ふて分別する而已で。空間は物、時間は事、なれども。物事相即。空間、時間等しく相倚る實在である。空間から觀れば時間、時間から見れば、空間、兩つ并せて觀れば宇宙、で。海と岸とが合せて海岸たる所以の實相はココにも適用される。

爾れば發明家と豫言者とは。同じ理合の者である。世既に多くの發明家を出せり。いかに豫言者を出し得ざらむ耶。

豫言者と謂へば。當代人士の感想には古代染みて聞え。非學理的に類すれど。我の智力靈能の精の又精を極めて。空間の方面から理と力の眞處に合體する機會こそは。發明家の成功する瞬間たる夫れと同じく。時間の方面から我と他との合體を遂ぐる其刹那こそは即ち神意天數の示現である。

但し發明家は宇宙にしめぢ符を爲し居る者で。彼は物象の理法を見附けて。その成績を物上に證示するのであるが。豫言者は。神意天數のメモリスム行使に用ゐらるゝ無念無想の小供であつて。その成績を事上に垂示する丈の差は在り。乃ち

發明家は『全部の一部』で

豫言者は『全部の一部』である。

憾むらくは。當世文明の潮流に漂ふ智者學者の頭腦は。天來の綜合(天啓)に合致せむには精緻に過ぎたり。解剖に偏せり。一粗雑とは謂はぬ。餘りに人間的で有る。故に豫言者たる人極めて稀なり。

扱。然りとて。綜合觀直覺力を天意神數の發揮に主用する純東洋的意識の精粹を持しつゝ。歐羅巴流の解剖的精緻を主とする者と調和する……と云ふ新機軸の大脳髓を否拒する理由は無からう。科學の精髓を得て且つ豫言者たるの實を成し得る人物ならば。其こそ二十世紀に期待さるゝ破天荒の新文明の卒先者であらう。

著者平生の學問は聊か所謂破天荒の新文明を標的とす。故に脚地、本來世人の夫れと異にして見地從つて別趣構を喚起し。遂に世界の大事相たりし日露戰の本末に處して。

『日露戰の發生も、其經過も、平和媒成の中軸たるロースベルトも、斯く言ふ吾自身も、同じく一にして而して他也又多也。多にして而して絶對的唯一の一なり。然るか故に其が我心

鏡を介して映射し。ホクリと豫言が合ふことを得せしむ』

てふ信行をば。事上に證明すべく自任するに至り。且つ事を果しけるが故に。今や依りて以て自行を化他の用に轉じ。以て靈氣の呼び出し役を務め。以て世道人心を靈化せしめる至難の業の『皮切』にとて。斯くは全然世俗と異なる立言に及ぶ。

夫れ政界、學界、教界いづれよりにても。一代の人心を正しふする導師出でむには。その人は必ず豫言者の英靈の材ならざる可からず。如是凡化的單調の、加之も向下漸墜の、時勢人情に徇がふて周旋し、經營しつゝ。功を遂げ名を成すとも。其人等は時代の仕入品たるに止まりて。國寶に非ず。何等の價値をも『明日』に傳ふる莫き也。世を擧つて仕入品の小器に陥りて。國寶的人格が地を拂つて空しきを致さむには。是れ『明日』てふ理想無き大韓國サラミ(人をサラミと云ふは朝鮮語)諸君の亞流のみ。而して尊敬す可き我藏相阪谷君が明年の歲計豫算を質問されて。未來記無用論を公言して仕たり顔。なりける杯は。正に時代精神の反映なりとすれば。則ちサラミの隣人にして而して從兄たる大日本人は。其精神状態に於ても亦。サラミの隣人にして從兄たらむとする都合なり。殆からず耶。

記應せよ。『文明の進歩』てふ者は。時間及び空間に對する心理的事境的擴延を意義す也。故に大なる進歩を期し得る國民ほど。大なる『明日』の理想を有す。有せざる可からず。然り而して『明日』てふ理想を照す最強力の光明は。豫言者が點する靈の鑽り火に原くこと。宗教歴史の示す夫れに等しく。凡

立論する所以の材料は前人より與へられて居らぬ。乃ち之を正式に立論せむには西洋文化の賜たる『人類學』に俟たざる可らざれど。人類學は未だ吾人に殷以後周の盛時を語らぬ。因てこの易經易經全部が演繹的にして毫も歸納的材料即ち數理數理の方式を伴はざる易經易經を我々が祖述せむと欲せば。易經說明の必須的要件たる數理の點は。之を當代文明が吾人に吹込みぬる數理の應用に俟たざることを得ず。而して开は和漢古來の學風に比すれば。洵に前人未發の學風に屬し。亞細亞學問界の新機軸に屬する。予は私かに信すらく。假りに西洋文明と調合して以て一大新機軸の文明を成就す可き要素が亞細亞文明に存在すとせば。則ち其は這般の新面目の學風中より發見さる可し。若しこれが出來ずば。亞細亞人は單に西洋文明の模倣若しくは複加を務むる徒弟たるに過ぎず。從つて世界は不完全なる加之も不正なる現代文明の害毒を脱し能はざる可しと。誤解する勿れ。文明の効益恩澤の點は飽まで認めての上にも猶其をば不完全と議する也。此は廣大なる思想界が最高最眞の文明を欲求して未だ得ず。乃ち人生の歸著に對して不安なる現代に於て。最も進歩せる見地よりして爾云ふ也。決して亞細亞人種量負の僻見よりして。西洋文明に打克たうとの意を含むに非ず。

斯かる事の順序にて。予は。其だ當代の數學と抵觸せざる範圍に於て。否、寧ろ當代の數學を應用して。以て易經の具有する眞理を舉示せむと年來志せり。而して研究多年にして。一家の見を定めたり。是れ心靈を主とし易經を客としての予が位置也。

更に予は。亞細亞宗教の精髓たる日蓮所啓の妙法蓮華、事上成佛を信解するに及びて。易經及び數理を『神靈の語の通譯語』に使用すべく試み。是亦多年踐踏の末に。數字及び八卦の數形は。予に取りては必要に應じて一々物言ふ乎の如く成行さぬ。

『神靈の語の通譯語』とは。心靈に投映せる无方无體むほうむたいの深淨微妙の法をば。普通意識の領内に導きて。其をして具象的ならしめ實用的ならしむること。譬へば電氣を電池に蓄へて線を傳はらしめ。以て通信機關として具象せしめ實用的ならしむ可く做し去るンと同じく。神と物と人との間の通信機關として自己の靈覺を用ゐるつゝ。靈の語彙を引延ばして通信を具象せしめ實用的ならしむるン符牒ふだつノ記號として使用する謂にて。ツマリ心靈の表徵を最も適切に且つ簡便に具象する符牒若しくは暗號として數字及び八卦を常用する次第なり。ココに至りては易經數理併せて意識の道具のみ。彼等には何等の靈とて無し。我心靈が之を靈化して實用に供する丈の事也。されば著者今や漸く獨自の神靈實驗に談及せむと欲するに際して著者に在りては簡便なる常用符牒ながら。符牒を知らぬ讀者には迷惑の至りなる事申す迄も無き事なるを以て。予は前述二個の子が位置に顧み。豫しめ符牒暗號を解説する『元帳』を讀者に打明け。同時に易理對數理の妙用を闡明する必要あり。請ふ讀者と與に。古今に上下して。歐亞兩面の數理を涉獵せむ。

易を知る者は夫れ神乎と。古賢が讚歎せし通り。我の心靈が開けて神に通ずるに至らずんば。

易は無用の長物、迷信の對象たるに過ぎぬ。故に孔子も易には閉口し。韋籙三たび絶つまで易經を修めても尙ほ之をば弟子に講釋せざる程に貴びた。

シカシ。其は八幡の不知^{シテ}森に正面から踏込^ミひから。迷路百端にして窮極する所が無いので有る。若し窮極の個處即ち神靈の本體を先づ證得して。而して後に。最奥の處から逆に。迷路を外向的に辿りさへすれば。出口は誠に容易で有る。故に一乗妙法の行解に由る予は。易をば知^ルれりと謂はざれども。『知り得る』とは自信する。因て八卦を其まゝ、靈語通譯の記號に使用す可く定めて。必要に應じて記號を讀みた。而して此記號は西洋電信の暗號の如く。數字から組成されて居る。

抑、數理の起るは個體的、個數的に『全部』なる一個を作りて。一個より『一』を定め。次に『一』に對する『他』を意識して。茲に『二個の』を成すツノ處を初發とす。

例へば、『單獨の』は『無』に對する一個てふ觀念より外に與へない。即ち『點』が其で有るが、點が二個なるに至れば。初めて二點を連ぬる『直線』と云ふ觀念が生ずる。さうして直線を分割して。一、二、三、四、五、六、七、八、九の數を確認し得る。
一を二個得たのみでは。線は出來れど、『平面』は出來ない。況んやツノ線には數學上嚴正の意義に由る變化が無い。其は消極(ニゲチーウ)と積極(ポジチーウ)とが分れる變化を指す儀で。一線の中に或點を假想して。右を積極とし左を消極と立るとせよ。爾る時は該假想點が『二』を成す故にこゝに變化が意

義される。其なしでは二極は成立せず。従つて變化てふ事が具象せぬ。
『平面』は『二』を得て初めて出來る。三點を結べば三角形が生ずる。點の置き處に因りて形狀は種々無量に變化すれど。三角形成立の根本要件は三點である。而して三角形は平面の初級で。平面てふ意義は三角形から始まる。

物象は平面では出來ぬ。如何に微薄なる物象なりとて。長さと幅と厚さとの三要件を具備する。而して此三要件より生ずる所謂立方體は。立方三角を初級とし。ツレ以上の各立方は詮する處。三角立方の變化たるに過ぎなす。
故に物象を意義せむと欲せば、『一』と『二』の觀念より以上。三にまで及ぼさざるを得ない。而して數は三以上に至りて初めて變化有り。變化は生物の本なり。

扱。『變化てふ事の嚴正なる意義は。物象にも數學上にも人事上にも。一樣に同理法を辿りて行はるゝ者なり』と云ふ原則をば。支那最古の卓越せる意識が獨斷せし乎但しは本能的實驗を積み重ねて其を歸納して論定せし乎は知らねど。兎に角右の原則をば理由不説の下に。前提に置いて。數の變化をば形ちに配し。ツノ形ちをば八形に限り八形各自をして數字を代表せしめ。形ちと數字とを兼帶するツレが二個づゝ抱合して。獨自に特殊の數理を顯はし。數理の發動は。一貫せる相やら、性やら、體やら、力やら、作やら乃至因、緣、果、報、本末究竟やらを其に由る各事物に賦與する者と定めて

恰かも生命有る者の如くに一切事物を扱ふ。其が即ち易經の本原で且つ本用で有る。

故に。一は二を生じ。二は三を生じ。三は萬物を生ずと。云へる老子の言は。易經の神髓を道破せる者にて支那古代哲學の眼目である。蓋し變化は數理の生命にして而して。『三』は變化の本原なれば也。變化とは。消極が積極に變ずるか但しは積極が消極に變ずるか。いづれプラスとマイナスが地を更へる場合を云ふ。即ち寒、水、貧、喪、負、闘争等をマイナス(陰)とすれば。其正反對に立つ所の暑、火、富、得、勝ち、平和は。プラス(陽)で有て。陰陽互ひに相消長して彼此全く相變ずるに至るソレが變化である。變遷と變化とは似て而して非なり。世俗、二者を混じ易し。

例せば平和が戦争と爲る。戦争が平和と爲る。孰れも。變化なり。變化了せば。其は人の耳目に上り易し。猶晝と夜との如し。死と活との如し。此處に陰陽の相異なる所以が判然たり。然るに變遷には或陰或陽の混成なるが多し而して凡人は混成の中より陽量と陰量との正確なる比例を發見し得ざるが故に。陰大いに長じて九の力有り、陽大いに消して纔かに一を留めつゝも、外觀尙ほ其と知られざる時には。誤りて天下泰平を謳歌し。或は虚勢の景氣に酔ふて株式の狂熱を自作するとか。或は鑛山當事者自ら對手を侮りて暴動を誘起する等の場合多し。

『二』は奇數の第二位なれども。實は奇數の根たる『一』と偶數の根たる『二』とを合せて成立つ數にして。事物發達の根元たる者なり。

譬へば男性も女性も。本來は同一の動物(若しくは植物)たり。即ち一個の細胞組織が分化して二個と爲る時に彼等は只だ己れより他を見て對手を第二者と爲せるのみ。而して开は相互に爾なりき。然るに一步を進めて雌雄雄蓋とか。アダム、イヴとか。兩性相分れたとして。若し彼等が二點相結びて直線を成すが如くに相親むに止まり。曾て交接の結果たる生殖てふ功を奏せずして已まば。則ち生物には何等の奇もなく。無變化の末は必然的絶滅を來さむに。扱其處に感應の妙用が發作して。異性の間に第三者。即ち子と云ふ者を産み得たりければこそ。お蔭で人類は土に歸せず石に化せずして。人事の變化無量なるを致し。文明杯と洒落るゝに至りぬ。

知る可し子てふ者は『三』なり。『奇之根』たる一(男性、陽性、積極性)と『偶之根』たる二(女性、陰性、消極性)とを合せて『三』を成して茲に成立つ者たるを。故に人間社會てふ者を概観して。之を一個の生物と觀せむに。この生物は『三』を生命とす。『三』無くんば發達てふ事無き也。

『一』は萬物の始』とは皮相の見なり。絶對的の『一』は萬物それ自體なり。萬物の端緒に非ず。差別相の『二』は幾回、自乘すとも一なり。其は單に全數の單位を意味する而已。奇數の作用は『三』より始まる。偶數の本用は調和に在り。同化に在り。複數の成就に在り。例せば一個の直線が在りとして。其を引延ばして二倍乃至幾倍に改めたにせよ。直線は平面に變化せず。然るに該線の角度を聊かにても轉ずる他の一線を畫いて角度の差を結べば。結んだ三點が平面を成立せしめる。而して其時は即ち奇數の

發現である。又た同平面の三角が並んだ丈では立方三角形が作られない。別個の平面が来りて初めて立方を成す。別個と云ふのが其儘奇数の意味で。さうして三角立方形の成立つや。其具有する平面は四個ある。即ち偶數に成て居る。

『三』の次に來る奇數は普通『五』として在りて。人之を怪まぬが。

『五』は純粹の奇數に非ず。よし奇數とするも。奇數中の異物である。

『五』は奇偶半半の數で有る。

ナゼ乎と云ふに。全數を觀じて一個の生命と假定せむに。一より四迄は幼數で。六より九迄は老數である。即ち積極的の進路は。九の正半數たる四と二分の一の所を極限とし。四半の所から老熟を重ねて。絶頂即ち零に歸する方向即ち消極の方向に變するが。五と云ふ數は。幼と老、プラスとマイナスの兩方に跨がりて。兩性を等分的に中道的に具有して居る。

『五』は各數の孰れをも除しても除し切る。奇數に對しても偶數に對しても除し切れざる小數をば殘さぬ。是れ彼が特性殊用を表する。恰かも強弱不偏の横綱大砲が取組全部の引分けに終るが如く。どれと組んでも。對手にマイナスプラスの孰れをも課さぬ。

『五』は變化の大段落を擔任する本用を有す。开は123456789の全數中に積極、消極の中軸を成すに徴して解し得可く。彼は過渡期を表し。自己の作用が満了せし時は即ち根本的大變化の時なり

と自ら告げる。更に注目せよ。123456789を合算すれば四十五と爲る。而して四十五と云ふ全數は。數字の極根たる9と云ふ數を五倍した者である。故に數は九に至りて極まり。變化は『五』の數に於て大成する。

『一』は偶數を以て除り得るが。奇數を以て除り得ぬ。即ち3を以て『一』を除するに。コムマ以下の1が際限無く殘る。其は3の自乗たる9を以てしても同様である。但し『五』は其特性に由て『一』を除る切るが。又手。奇數たる1,3,5,7,9の中に就いて『7』は9より生せし奇數たるとは全然、體を異にして、『7』彼れ自身が獨立的根本的奇數たる所以に留意を要する。

『七』が『一』を除し切らぬ處に、一大特徴『3』の作用と異なる所以を示す一大特徴IIが見へる。而して古來の哲學者中、『3』をば解釋しける老子など有りたれど、『7』の特性本用を了了地に示せる者は曾だ見當らぬ。一を除せる7の小數は。3や9の夫れと異なりて。コムマ以下の1を連續せしめず。一種特別の循環小數を生ずる。即ち 14587,142357 が其であつてこの『142357』が癖物である。

『九』は數の極限にして。九の絶頂に即いての觀念が零を生ずる。『一』の相對は『二』で。七の相對は八たる如くに。九の相對は零で有る。絶頂の後に何が來るやと見れば零が來て次に一が來る故に九は一から進んで全部を一個と做すまで、積極の極限に達せしめる數にて零は極限に達したるソノ即地

の觀念に過ぎなす。

『一』に兩義有り。差別相の1及び絶対的唯一のその1也。數學に取扱ふは勿論。全部てふ者を123456789に別ちて數字を立つるソノ差別相の1である。絶対相の1を扱ふのは數學ならで哲學である。易には絶対相の1をば『太極』と稱し。其體を『無極』と定義して在る。

然るに123456789と云ふ全數の各個を加へ合せて。四十五を獲て。この四十五の45合せて9を獲て。この9をば9で除し了れば1となる。

此處の1は『全部の相』を意識する所の1で有る。而して『全部』の中に差別相の『一』もあり。『九』も有るが『全部』の相ならで。ソノ性と體即ち『全部』は1より9迄の數を含むてふ性と。この全數は四五の45並せ9に約さるソノ體をば表明する者は『九』である。

凡そ事物の相、性、體の三者は相即不離たるが故に。『全部』てふ者の相たる1と其性たり體たる9とは亦。相即不離で有る。『九合一』で有る。

例へば一個の圓と云ふ『全部』を執りて。之れを差別して。九十度を直角と爲す時に。一度から九十度まで積極的に進行しつゝ、絶頂に至れば零に接し。零に接する即地に。直角一個てふ者の相、性、體を成して仕舞ふ。ソレで。今度は直角を全部と見れば。『一個』のソノ一が。其まゝ『九十度』のソノ九である。

更に普通の一度を幾百千萬分したる者を以て度數の單位に改めて。其をば全圓を作る迄積極的に進行せしめるとするに。全圓中に有するソノ度數たるや。幾千萬億乃至無數の多數にして人力の列舉し得ざる數を成すが。シカシ。積極的進行の極限の性及び體はと顧みる時には。其は依然として九十度の九を無數に分ちたる者のソノ總數であるから。畢竟九即ち九の若干乗の九たるを失はず。竟に九に約され了る。

『九』の特性に。『九の約位』と特命す可き妙性がある。

約位とは。九九の81も。七九の63も。六九の54も。五九の45も。四九の36も。三九の27も。二九の18も。數を合算すれば。八一合せて九。二七合せて九と云ふ如く。總てが九に約されて仕舞ふ。ソレが『約位』である。而して約位の九を以て除されて一を生ずる。假に13752158と云ふ數を執りて。之に9を乗すれば。393359492と爲る。この數字を各個加へ合せば。四十五と爲り。約して九と爲る。而して何數でも苟くも九の乗せられし數は。如何に廣大無邊、人の意力の及び得ざる大數なりとも。出た數の數字各個を合算する時には。其が九に約さるゝ。

他の數には這般の特性が無い。獨り九に限りて右の通りである。九の約位は斯くて證明して曰く。『全部』は一なりてふ事實の下に於て。九は積極の極に見たる一で。一は消極の極に於て見たる九也』と。これは〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九と數ふる常習と逆に。〇、九、八

七、六、五、四、三、二、一と數へて見て。爾して零の絶頂が九なりと一先つ考定して置いて。さうして今度は、一の絶頂は零なりと攪想すれば。合點し易からう。

要するに。1には差別相の1(普通の數學上の1)と『全部相』を意義する1と絶對的唯一の1と三様有る事に爲る。而して全部の相を意義する1は9と合一する。

故に9にも兩義有り。全部を意義する9と差別相の9と是れなり。

然り而して。差別相の9の作用は。差別相の1と毫も異ならぬ。二者は唯だ見る人の位置に因りて。

零を頭に附けると尻に附けるとの差を生ずる爲めに。爾かく太だ相異なる如く感想さるゝ而已である。一から九に進行して漸やく積極的に全部相の一を成さしめる普通方式を倒行して。先づ『全部相の一』を消極的に進行して。全部を零に迄做し行く様數字を組立てる時には……即ち九、八、七、六、五、四、三

二、一、〇と組立て、見る時には。ココの九は前の方式に於ける一である。故に易は數を八形に配して九形に配せず。九を『一』に攝入して其用を共通せしむ。

『7』の特性は。絶對的唯一の一を説明する好材料で有るが。其は後段に譲りて。ココに豫じめ

『絶對相の一』に定義を下し置く必要有り。予少小にして誤りてカント等の哲學を信じ。インフキニテ

一(無窮數、無極)は零に同じ』てふ事を眞理と惟ひ。従つて世間實相を眞空と觀じ。數理の極は到底不可解也、強ひて解せば無也との様に斷見を起し。竟に『唯一實在』てふ眞理、否、眞事實に遠ざかり。

理想行動共に件んの根本的誤謬の爲めに拂亂され。或は浮世を贅視し或は身命を芥視して。乘るか反るか一番。天下取が出来ずば、野末の流垂れに身を捨鉢よなどと。偏見我執を逞しふせりき。蓋し海内無名の豪傑中には。這般の理想行動を抱持する幾多の青年今尙は多々ならむ。されど後年予は。幸いにして日蓮所證の唯一乘の妙法を胸中に煥發し得て。宿昔の迷慮を脱し。『無窮數は零に非ず一なり』てふ事實を數理上に證得し。従つて自己の生涯に新紀元を開き得た。即ち予の所證に曰く。

無窮數は。絶對相の一也。『元原的一』也。

零は數の絶頂に即いての概念にして。全數の實體に非ず。

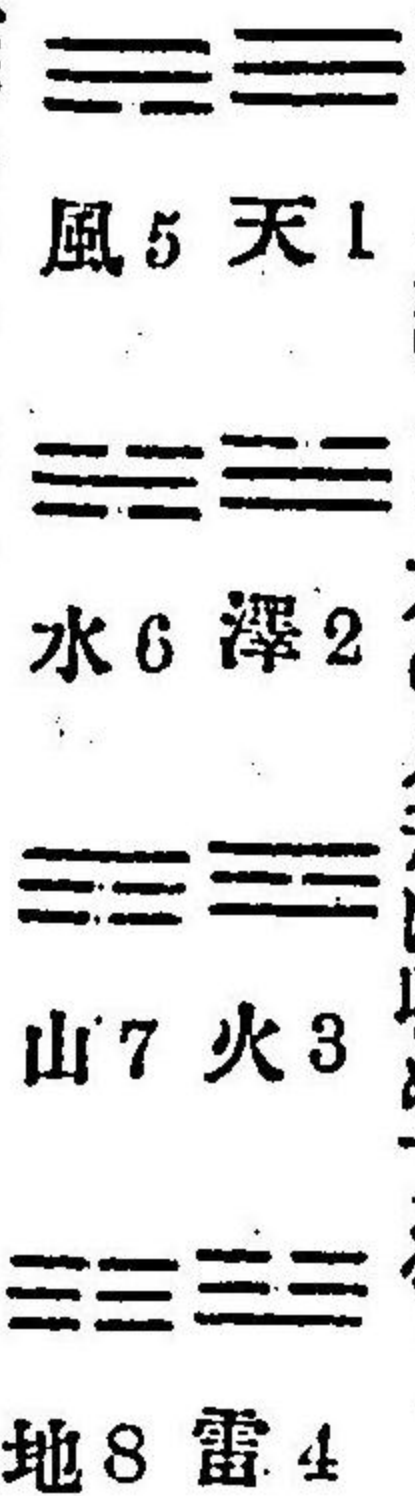
實體は唯一の實在也。

さて易經は。宇宙の元原を太極と立て。太極を無極として意義す。是れ予の所謂『元原的一』に似たり。而して太極から一陰一陽が生じて道を成す。道とは。人類は人類の道、物象は物象の理法で。道に由りて活動し生死し消長する事をば『之に繼ぐ者は善也』と云ひ。陰陽男女が各異性の特用を持寄りて成性存存を遂げること。化學的作用に由る所の勢力又は物質の離合や變形と同じい。ソノ處をば。『之を成す者は性也』と云ふ儀で。性とはプラス、マイナスで。電氣に陰陽二性有りて其交錯が電力の活用を呈する如く。萬事萬物が這二性に由りて成るに付。易は乃ち。1から8までの數に具する性格。即ち陰陽の或小或多の各性格を認めて。其をば基礎として八形を組立て。八形を以て八數を表明し

盡すと爲しつゝ。八形の一離一合をば宇宙一切の事物に應用し。易を知る者の靈覺に由りて逐一、説明し得るものと立てる。

八形は即ち八卦である。

八卦は1を天とし、2を澤とし、3を火とし、4を雷とし、5を風とし、6を水とし、7を山とし、8を地とし。この數字と定義とを左の八形に收めたる。



右八形の中の二個が抱合し。或は一個同志が一對を組合ふて。各々事物の相、性、體等を表明し。而して絶ゆる莫き變化が宇宙に行はるゝは。右の組合せが表明する所のニケチーツ、ボフチーツの消長合離の結果なるを以て。宇宙は八八。六十四卦の範圍を出でず。凡ての現象及び事件は。六十四卦の内の一として分類されて。各個毎に原因結果を其の合致せる卦面にて。推斷され得可く。果して合致の卦面か否かは。易に由りて判斷する當人が能く神に入り靈に通ずると否とに依りて岐るゝが。八卦其者が活動消長の理法を全具することは千秋萬古に亘りて渝る莫し^{△△△△△△△△△△}てふ處に易經は根據す。而して一個同志が重なりて一對を組合せる場合は。勿論八ッ有る勘定で。この重一、重二乃至重七、重八は。

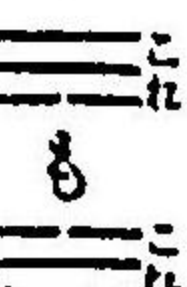
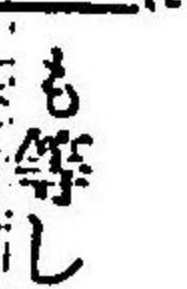
☰☰ 乾 11
 ☱☱ 兌 11
 ☲☲ 離 11
 ☳☳ 震 11
 ☴☴ 巽 11
 ☶☶ 坎 11
 ☷☷ 艮 11
 ☷☷ 坤 11

と各々卦名


を有する。而して其は一から八に順々恰當し。之を八卦と稱して。六十四卦の基本數をばなす。

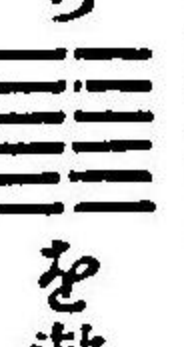

さればよ。戦争の前途を下すてふ事は。即ち戦争の形勢を心的に練縮(コンデンス)して。其をば八卦式の數字に引直して觀取すると云ふ事也。卦面は即ち心象の寫眞のレンズである。然るにも拘はらず。心象をばお留守にして置いて徒らに卦面を侍むのは。世の賣卜者や御幣擔ぎの迷信者の常也。この場合には易經や卦面は闇處のレンズで。何が映るやら將た全く映らぬやら一切、問題外である。

易とは。變易の易也。易を作る者は『變化は即事物の生命也』と達觀せしと見へ。易經には『常住』をば『恒』と號つけつゝ。恒の卦をば雷風にて組立て在り。至動の物、至變の體なる雷と風を組合せて。轉變その儘に恒なり常住なりと示す。彼は又『三』を以て變化の本源と立ること。予が前に述べし數理と異なる莫し。开は八卦の卦面は各三爻より組成さるゝを見て知る可し。爻とは交也。陰陽相交り。或は陽陽若しくは陰陰相交り。プラス、マイナス相克する働きは。始、中、終の三段に準じて變化の度に次第を異するが故に。三爻各々特殊の意義を保つ。而して爻は三にして變化の本源を成就す。即ち陽が三個相交るの卦は ☰ 乾 即ち天である。一である。陰が三個交るの卦は ☷ 坤 即ち地である八で有る。(直な一本棒が陽を表し。中缺の棒は陰を表する)此他の六卦即ち六十四卦の基本數たる所の澤、火、雷、風、水、山、共に。或は一陽二陰或は二陰一陽から成立して。總べて三爻なり。而して。同じく一陽二陰でも。將た二陰一陽でも。陰或は陽の位置を爻中に異にするに因りて卦が相異

なるを致す。即ち  も  も等しく直棒二本に中缺棒一本なれども。前者は一陰の位置が爻の最下級に在り、後者は其が最上級に居る相違有りて。件んの相違が前者を澤とし後者を風として區別せしめる。

易を作る者が。數を八に限りて九を容れざりし見識も。三を變化の本原とせし智力も。共に數學上の玄深なる識量から來た者に相違ない。而してこの點は古來和漢の易學者中、一人と雖ども徹底せず。その爲めに易と數學とを隔て。従つて易理を杜撰ならしめ。抽象的に偏向せしめて。數字上に具象せしめること力及ばず。之をば空理の道德教若しくは神御しの道具と爲し。徒らに八卦は。古人が偶然獲たる龜の甲に現はれし天啓的秘文を本として作れる様に。思ひ做し言ひ做して。易經をば神祕の者と心得。乃ち易經を拜みて神に事ふる如くし。末世末法の衆生は則ち偶々卜筮す逆。之をば本尊と爲す程に迷信を増長するに至る。現代にては天下の淫卜者高島嘉右衛門など其標本なり。

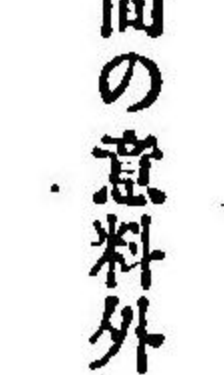
易經を讀む人は多けれど八卦を讀み得る人は殆んど空しい。卦面だけでは大抵の人に通じ難し逆。後年の聖人が辭を以て爻毎に註釋を施したソレが易の本文と成りて。人は其をば讀みて易に通せむと期するが。本文を恃まず直ちに卦面を讀む事を主要の修業として。數理の極意を究め。稍々其に達する時は。甚だ本文を恃まずして解釋の自在なることを得る。例せば  乾 は健也天也として專直、剛健の體性を表せしめ。本文には龍に喩へて解釋して在るが。陽又陽又陽々と。飽まで積極的

に向上するものは。如何にも蛟龍の池中より天上に一直線に飛騰する威勢に似たるからで有らうが。本文を伏せて置いて。獨り此卦面を凝視し。此卦の形相に應じて體性を具ふる者を思念すること至れる時には。天空には亂雲層を聯想せしめ。地中には堅剛なる地層の積重を聯想せしめ。地上には鐵道の四道八達を聯想せしめ。人事には世界的事業熱の連續及び物價騰貴の趨勢を聯想せしめる杯。對象の範圍が開大して。而して適用が合致し易い。將た又。乾の次に來る **坤** 即ち  を執りて。之をば本文が何故に馬とは喩へたるぞと味ふに。卦の形相は正に馬の **鬣** を形容して居る事も着取されて。註釋が自然的なりと知らるゝ。其からモ一つ例説すれば。  即ち風澤 **中孚** の卦は。何故之を中字と謂ふ乎、何故主文に豚魚と喩へたる乎と吟味するに。此卦面は中心に於て口と口が合ひ居る形である。即ち中心の孚を表する。而して二陽が表裏を包むは。外大いに張るの象で。而して内部が陰で、中缺で虚なる現形は。正に豚魚の相、性、體を表して居る。而して此形は之を舟と見るも可なり。接吻と解するも可なり。又は西園寺内閣の前政府斐踏政策と讀むも可なり。外大いに張りて内は即ち虚なる工合やら口と口との接合やらは。狂れ合を表し妥協を表し淫縱を表するが故也。右の如く自然的實形的の解釋を習ふ時は。八卦は頗る讀み易く相成る。のみならず。應用の範圍が廣く且つ適切なることが出来る。

『易を作る者は夫れ盜を知る乎』と古賢は舌を捲いた。如何にも易は物象の變化並びに人事一切を概括


して洩す莫き者たるが故に。易を作る者は盜棒の仕道をも知り居つたであらう。其邊は驚く丈が愚なり。兎角。内務省が社會主義の書籍をパナルス視したり。或は村夫子が學童に觀劇を禁令し。芝居には盜棒や淫奔男女が現はれるから有害なりと云ふ類の。窮屈なる頭腦では。到底易も人事も解し得ない。易は人爲的理窟または私情的是非の局面を超越して。事理相即の實際を宣揚するもので。活學の極處、人間學の眞處を包含して剩す莫く。能く之に達すれば則ち經綸の本格法は心に會得され。大臣學宰相學は卒業され。世間の大通、社會の達觀者と爲り得る。

取別けて證釋す可き事には。『感應』てふ事の微妙なる相、性、體をば。易は少男少女の色情に擬して **咸**  即ち澤山咸と立て、在る。澤は少女、山は少男である。蓋し低氣壓が高氣壓を招

くのも咸である。雌性の電氣が雄性の電氣を呼ぶのも咸である。重山も磁氣を沮まず、花氣は林を通じて人に通ずるのも咸である。公憤義憤も咸である。神人際會も咸である。『魚心ありや水魚』も。『士は己れを知る者の爲めに死す』も。中りし矢や鐵砲の手答へも。小石拾はむと人の意念萌す時に臂を下さる先から犬めが逃げるのも咸である。株式熱も市場の神經麻痺も。メスメリズムも。金光様も。雲右衛門の人氣も。大雨、大洪水、大陥没も。皆咸の作用である。然り而して易は凡そ宇宙の有らゆる咸の標本として。男女色情の感染をば微妙第一として擧げた。如何にも速力と云ひ微妙さ加減と云ひ。人間の意料外に出で、千里も一里と做し去る底の不可思議力は。男女の  就中少男少女の色情

ほど著るしい者は無いから。此は易を作る者の無上の達見を窺はしめるに足らう。

咸の封面を玩ぶに。 **山**  は良なり止まる也脚なりで。兩脚の伸びた形である。故に易の本文は。

初爻(最下級の棒)の處を解釋して『其拇に咸す』と云ひ。次に其腓ヒラやら其股またやら段々上部に咸する旨を。爻の位が昇る毎に言ふ。而して上交即ち頂上の處には『其口に咸す』と言ふて在る。如何にも上の卦の  は頂上が口である。

ザット右の鹽梅にて。六十四卦は。其封面を主として念すれば。是が無量の意義と其應用とを期し得る。則ち予が易を意識索引の符牒に使ふ所以は此に在り。予は普通の易學者と脚地を別にし。封面を主用して數理に照す者である。

翻へりて予が自得せる妙數理中の第一義たる『元原的一』を説明せむ。蓋し絶対的唯一的者の一をば數字上より擧示する事は古今未だ聞及ばざれば。予の淺學を以てしては此業頗る不遜に屬すれど。之を敢てせざる限りは。予の悟證も亦理上の觀念を脱せざる者にして。事上の證示は必ず數字數形の上の説明を要するが故に。是れ予が精進波羅密の因果として已むを得ざる所なり。

されど詳細の講説はヘーラの制裁が許さざるに付。是が眼目を掲げて。餘は讀者の推理力に委かせむに。

① 『元原的一』とは。奇偶兩性の孰れにも偏せざる唯一の一なり。ポジチヴ、ニゲチヴを兼帯

して除る事も減く事も出来ざる。元の「一」なり。

⑤ 一より九までの数が。数の基本たる全数で。零は單位の前後を示す者に過ぎずと假定せよ。例へば一個直線を九分して。一分毎に一から九迄の數を附すると。零は兩端の孰れかに来る。然るに該直線を圓に直すとするに。圓の九分ざるゝ處は同じけれど。零は九に合するか一に合するかして仕舞ふ。孰方に合しても宜しい。

斯くて一から九迄の距離を單位に立つるのも。九から八までの間隔を單位に立つるのも同じ事であるが。先づ圓線に傳はりて一から九まで進行して行く時に。單位たる一分の最初の踏出しは。一分の幾萬千分の一やら測られぬ微なる數であらう。之をば「微數」と名つけてこれから極微の度數を以て進行せりと觀念して見ると。此に單位とする一分は何ほど大きい數やら分らぬ程大きく觀念される。否。實際大きい。而して斯く積極的に増大する方の數をば之を「積數」と名稱を附して。其から二分三分四五六七八分と進行して。其をば當初踏出しの微數に比較すると。彌々微數が微に見へて此方の積數がドゑらしい事になる。斯くて比較上、微數が積數の幾千分の一やら算數譬喩の能く盡す所にあらざる懸隔を加へつゝ。九の數の絶頂の處に達したとする。ソノ時の微數積數の懸隔を物する數は。實に無數の數、無窮の數である。

この無窮の數は。積極面では計算し擧げ得ざる程の大數で唯だ莫大無邊てふ物に近き唯一の一を聯想

せしめると同時に。消極面即ち該數を以て一を除つた微數の方では。至微至小にして殆んで之を零と見まはしき程になり。是亦人の意力を超越するが。其は零では無くて。この場合。積極面消極面の合一する個處が唯だ一個處あるソノ個處が至微至小にして零の如想はるゝのである。即ち一の踏出しの處は其が消極の極なる小數の當初の踏出しに接觸し合一す。即ちココが九合一の箇處で。この箇處が「箇處之有りと云ふ事實が事實たる以上は。決して其は零に非ず。其は確に「一」或種の「一」元原的「一」なりと謂ざるを得ない。此處に前回述し九の約數が物を言ふ。

約數は暗示して曰く。數は單位の差違に因て無量に種類を生ずれども。極限は九なり。見よ。積數微數共にソノ無窮は九に約せらるゝ也。故に九は九にて除して一を得可し。然れば無窮數の單位は「完全なる一」の外に之有らず。而して开は「元原的一」是也と。蓋し加へても掛けても極限は九に約さる。九の絶頂は新たなる單位を生ずる箇處と合一する而已。故に小數の極は九の絶頂と合一す也。

⑥ 積極の絶頂微數の極限との相接し相合したる箇處は即ち元原的一なりと云ふこの「一」は「一」でもなければ「+」でもないから。一種特別「+」と云ふ形式以て表はしたら解し易からう。實にこの「+」は子が妙數理の基礎で。若し之を零と觀じたら最期。所謂神は方無く易は體無しと云ふ定義が空寂なる無神、皆空なる太極を喚起して仕舞ふけれど。之を元原的一と立るから初めて數に生命が表現して。妙用無窮の數理てふ意義が發揮される次第で。道般の「一」の實在を一層精しく説かうならば、先づ圓

を三百六十度に等分して。第一度と第三百五十九度との中央なる第三百六十度は。第一度から消極面に赴いた極限であつて。其より聊かにも進行したならば消極面から積極面に踏入るから。第一度以下の微数は無窮ならず。如何に量り難き小數にせよ。最後の小數は必ず一個之無かる可からず。只だ其が最後の積數と合一する所が妙不思議なる迄の事なり。

轉じて小數を具體的に吟味するに。圓が三百六十度に等分さるゝ以上は。三百六十を除き切る數ならば。其數は圓を其數に正分し得る道理で。2は百八十度づゝで二分し。3は百二十度づゝで三分し。4は九十度づゝで。5は七十二度づゝで。6は六十度づゝで。8は四十五度づゝで。9は四十度づゝで。カッキリと割り得るが。獨り7が割り得ぬ。即ち五十一度づゝにすれば三度殘るし。五十一度半づゝにすれば半度殘る。是に於てか小數の場面と相成る。

三度を7に割りて小數を尋ぬるに。一度以下(42857142857)まで来て。其先は順環小數に歸し何處まで除りても142857を繰返して際限が無い。即ち一を七で除れば142857の順環小數を生ずる儀で。試みに五十一度に前の小數を加へて七を乗すれば。其は三百六十度を七分するに最も近い單位たる道理で(51.42857142857)の七倍は三百五十九度と九分九厘九毛九朱999999と爲る。是は當然の事ではあるが。斯くて何處まで行つても。小數の何の位に於ても十の中の九まで届いて殘る一唯ツた一ツが自由ならぬ。爾して小數の斯る進行か極度まで行いたと假定して。ソノ時何が殘る耶と云ふに。矢

張り「一」である。

極度まで行いて一が殘るなら。數の消極の極は一也と證明されたる者に非ずや。

④ 假に(456)と云ふ數形を「全部」と定めて觀察せよ。1から9迄を全數と立てし數形の1は。此處の4で。此6は彼處の9に該當する。然れば中軸の5と6を加へて十一を生じ。5と4を加へて九を生ずる處に留目せよ。十一の一は積極の極數から單位が一つ上がりて。新たに一を生ずる事を暗示する。即ち十一の一は全數を一巡して更に一と云ふ「踏出し」を生ずる事を暗示し。同時に45合せて九なるソノ九は。消極の極は九に合一する事を暗示する者ならず耶。

此は暗示なれども。合理的暗示なり。

扱(123456789)と云ふ全數の數形は全部を差別して數が一措づゝ加はり行きて九に至りての各數の總計が全部の「一」と合一する事を示すに因り。且つ總計の四十五が九の約數たる事を参照して。全數を構成する各數の總計は。1に對しては。九と一との關係若しくは比例を有すと知り得るに付。今度は全數を表する9から一措下げたる8を検するに。1は既に9に屬するが故に。2から8迄の總計は8の位置を表する者で。爾して其は三十五である。(85)と云ふ數形を約すれば八と爲る。是れ恰かも9の位置を表する各數の總計が(85)で九に約せらるゝ其から一措を下れりと云ふ事實に合す。次に8より一措下げたるを7取りて。3から7迄を總計すれば二十五と爲る。(65)は亦七に約す。

8に對する7は。9に對する8の如く一階下りしだけソレだけ。其位置を表する各數形に於て亦一階を下す事を證す。

次に(456)の各數總計は(2)で六に約され。是亦數形の約位てふ事の總則を證す。

5は如何と云ふに。5は彼れ自身彼れ也。

6に對しての位置は一階下れる事を。5彼れ自身自から約位を明かにす。

斯くて積極面の6、7、8共に約位と一階遞減との關係を示し。5に至りて積極消極の等分的合成なるを以て。一階遞減も一階遞加も之無し。而して4に到りてはモ一消極面なり。

是に於て『數形の約位』は左の三項を示した。

(一) (123456789)の數形に於て9を極數と爲すが故に。總數が1に對するは9か1に對すると等し。

(二) 8が2に對する數形は。9が1に對する數形に比して。一階減の數形の約を示す。7が3に對する。6が4に對する同じく然り。

(三) 5は1と與に。彼れ自身が獨立的に數形の約位を構成す。

是に因て知り得るは左の數理上の特性とす。

一、8の位置は(91)を全數より減せし殘部なり。(91)は一也。故に全數の九より一を減じたる

と同じきを以て。8は其位置を表する數形の約に於ても亦八なり。

一、7は全數より(1928)を減せし者なり故に其數形の約は七なり。

一、6は亦(19、28、37)即ち合せて三を減せし者なり。故に其數形の約は六。

一、斯くて5に至れば。此は全數より(19、28、37、46)を減せし者。即ち四を減せし者にして。

全數の數形中に殘る所は唯だ5自身のみ。而して彼レ自身の數形の約は其まゝ五也。

◎ 抑々『一以上』が積極面で有て。而して小數とは『一』以下の消極面の數たるが故に。小數の全數の數形は『一』以上の全數の數形よりも、一階下級たらざるを得ない。則ち此に(987654321)てふ數形より一階下級なる數形を尋ぬるに。5のヌ下級なる4を中軸とする數形を要す。

(7654321)

是が即ち小數の全部の數形である。

見よ此數形に於て4は全數の中軸たること。5が(123456789)の全數に於て中軸たると同じき也。即ち此二個の數形の關係は5と4との如く一階の上と下とを表す。

(7654321)と云ふ數形が。小數の全數の數形を表すると定めて。(7654321)を加へ見よ。二十八であらう。而して(8)の數形の約は『十』である即ち『一』で有る。是に於て吾人は初めて『小數の全數の約位は一也』と論定し得る。而して(7654321)の數形に於ての1は。小數の單位とし

て認めらる可く。而して小數の總數は。積極面の數の總數が九に約せらるゝと異なりて「1」に約せらるゝ事を参照すれば。則ち小數の單位たる1は。積極面の九が積極面に於けると同様の關係を小數に有すと知り得る。諸君試みに7を以て1を除る算盤を造て見給へ。(142857)と迄行ひた後は。1が残りて。其が再び(142857)を生ずるのが順環の順環たる所以で。あるが試みに(7654321)から7を省けば。残る全數は二十七となり九に約さるゝに付。其處に残る1は其まゝ。(765432)に1を加へて(7654321)てふ數形を成す者と同一である。その1一個をさへ加れば。全數の約位「即ち「1」」を成して仕舞ふて消極面の極數に達するので有る。而して是は恰かも九で1を割れば残るは何處までも1なりてふ關係にて(1111...1)の1は。即ち(142857).....142857.....1)の1なりと此處に證し得る。

然れば九、七、六、三の各數が。1を除りて生ずる小數の最後の1は同じき(11)なり。見よ三の生ずる(3333.....3)の3は九の生ずる1の三倍たるが故に。何の事は無し。小數の單位たる1は同じき。而して六の生ずる(13333.....3)の3も。其が單位の1は其と同物である。故に七の生ずる。『最終の1』が九の生ずる『最終の1』と同物ならば。有らゆる小數の『無窮の1』は唯だ一ありて二つなしと結論さる。而して九のと七のと『最終の1』が同物たる事實は。前段述る通り(142857)の約位が九で其が最終の1に對するは。九が1に對すると同じと證す。

7の生ずる此順環小數が『最終の1』と成り了りて。モ一其上は1が除りも減じも出來ぬと想像せよ。然る時はその1は即ち(11)元原的1で。爾して(142857)の數形の中の7に對しては。恰かも一階下級たる故。其は普通の數位に於ける1が二に對すると同じき也。故に右數形中の7の一階上の5は普通の數位の三に相應し。其又上の8は四に相應し。乃至2は五に。4は六に。1は七に相應す。如上の手續に由りて。吾人が得たる結論を約めて謂へば。左の如し。

- 一。小數の『元原的1』は7より生ずる者より生ずる者と。共に同じき1にして唯一無二也。
- 一。該『元原的1』は九一の關係より生ずる一と同物なり。故に(11)が段々一階づゝ加りて竟に小數の全數即ち普通の1を成す。

○ 從來の數學に於ては。『無窮數』は無窮數なり」と解釋するそれ以上に文句の無かつた者だ。即ち無窮數と「1」との關係如何と云ふ數理の元原の問題に對して。未だ解決を與へず。數學の書はインフキニテ1を表はす符號として「8」の字を横に臥させた様な格好の異妙な符號を其に與へて。數は無窮に到りて言語道斷ゆと爲したものだ。

此は有らゆる宗教家が『神は神なり』と解釋を與ふるソレ以上の言葉を有せざると同じく。頗る空漠に流るゝ者で。根元不明のまゝの根元を基礎として數理を組立てるに似て。洵に心ぼそい譯のもので有た。蓋し無窮は微に入り幽に歸し。却々實體實物に徴して其本體を舉示し得ざる性質のものに付。従つて

數字數形の上に於ても。何を捉へて無窮數を引出さう乎。所謂取著キ端が無い。ソコで哲理上や宗教上からは既に『無窮の本體は絶対的唯一の一なり』と現證しつる予は。數學に於てもてつきり其と同様に論證され得るものと確信しながらも論證の方法に供する數字上の材料乏しきにはホトホト當惑致した次第で。上來述し諸條即ち

- 一、 $3^{\Delta\Delta\Delta}$ の特性の事 $\Delta\Delta\Delta$
- 一、 $5^{\Delta\Delta\Delta}$ の特性の事 $\Delta\Delta\Delta$
- 一、 $偶數^{\Delta\Delta\Delta}$ の特性の事 $\Delta\Delta\Delta$
- 一、 $7^{\Delta\Delta\Delta}$ の特性の事 $\Delta\Delta\Delta$
- 一、 $消極積極^{\Delta\Delta\Delta}$ の等分なる合成は『一』なりト云ふ根本的定義の事 $\Delta\Delta\Delta$
- 一、 $7^{\Delta\Delta\Delta}$ の生ずる小數の特性の事 $\Delta\Delta\Delta$
- 一、 $91^{\Delta\Delta\Delta}$ 合一の事 $\Delta\Delta\Delta$
- 一、 $數形^{\Delta\Delta\Delta}$ の約位てふ事 $\Delta\Delta\Delta$
- 一、 $元原的^{\Delta\Delta\Delta}$ は各小數共に同一なる事 $\Delta\Delta\Delta$

等が。兎に角に數字數形に由りて甚だ論理を失せざる處だけが取柄と。御認めを願ふ外はない。抑々數形てふ者を數理の論據に容るゝ事は全く予が新案であつて。未だ數學上の定説とは許されざれ

ど。數形てふ者と小數との間には或種の不拔なる關係が存在する事實は確かである。即ち

九を以て除り切れない數は。如何なる數と雖とも其數形の約は其處に生ずる順環小數と同一なり。ト云ふ事實などは其一で。例せば十三と云ふ數を九で除る。一九が九ひいて四殘る四九、三十六で其處に生ずる四四四……と連續する。而して十三(13)の數は。其數形の約が4である是は何幾に適用しても同理の結果を生ずる。鳥渡試みて見給へ。假に(38721)と云ふ數を『實』としりを『法』として其『商』を求むるに。333……の小數が生ずる。而して(38721)の數形は二十一と約され。二十一は3に約さるゝ。

此は何故に斯く爲る乎は知らず。只だ斯く爲ると云ふ事實だけは不拔の事實で。兎に角に數形てふ者と小數との間に或一貫せる通理を存する事は以て推知される。則ちこの一條も亦數形てふ事の數理上有力なる所以の参考材料であらう。

扱7の生ずる例の順環小數(142857)を檢するに此奴不議な數で。二を乗しても三を乗しても四を乗しても五を乗しても六を乗しても。其積(乘て出た數)の各數形は。内容に於て悉く同一の數字を含むのが奇である。即ち右各數を乗けて見給へ

- 二のは ((285714))
- 三のは ((428571))

四のは ((571428))

五のは ((714285))

六のは ((857142))

と爲りて。孰れも(1234567)の各数を。あっちこっちに置換たゞけで。内容の各数が同一である。何数にもこんな奇妙な事は無い。諸君、意に於て什麼ぞ。

されば此に7が生ぜし順環小数が元原的1に歸著し了れりと想定して。該元原的1(+)は即ち(0000000...0000,142857)であるから。之が即ち(7654321)の數形中の1に該當するので有るし。その一階上級のは2に該當し。34567と段々と登り行く數形は

{2(142857)}, {3(142857)}, {4(142857)}, {5(142857)}, {6(142857)}

と爲りて各々其數位を表する。トコロで。右の各數形が孰れも二十七の約位を有して。

一方には(+)自身(+)自身が『二十七の約位たる九に合一する』と示して其は恰かも九自ら九を除して1を生ずる。『1』と同物なりと證し。更に他方には元原的1は九と同じ。故に之に二倍するも三倍するも四倍するも五倍するも六倍するも。各數の約位が九に歸す...と證す。ナゼとなれば。約位が九に歸著する數は九より外に之無し。故に今(142857)と云ふ數に限り二を掛けても三を掛けても四を掛けても五を掛けても六を掛けても因て生ずる數形が悉く二十七に約される九に歸する...ト

云ふ事實は(142857)てふ小數自身九なりと證する者である。即ち九より外に爾なる數が無い。のに爾なるからには。爾なる者は其まゝ九と同物なりと結論する外は無い。

順環小數の(142857)が最終の1に歸した時は即ち其は九に合一したと云ふ事實を表しつゝ。この數は正直に『吾本體は九にて候』と物語る様なのぢや。但し極極面から見た九自身體では無いぞ消極面に進入した極に見合はす九の顔は即ちそのまゝ、元原的1の出現の當相なるぞ、と示す儀で、『1』てふ者の本來の面目は九(即ち全部)で九(全部)を除し其處に生ずる『1』が即ち其だ!!

この『1』は斯くて『元原的1』自身體と同物である。爾して差別相に屬する(123456789)の1は。若し本來唯一絶対の『1』を外にしたならば。之が觀念も意義も成立つ所以の基礎を失ふて了ふ。更に(142857)に7を掛けて見給へ。(999999)に爲つて仕舞ふ。然る時は7より生ずる順環小數を無窮に順列して。元原的1を終尾に置く時は。

{(142857,142857,142857,...142857,142857)+(+1)}

ト爲る。而して(+)を其處に置きて。其上の小數全部に7を掛ければ

{(999999,999999,999999,...999999,999999)}

ト爲る。サ、其に(+)を唯一つ加へたなら。この數形は9に1足すの十で。最底のりからバチバチと化し行きて竟に全き『1』を成して仕舞ふ事が解からう。

故に元原的^一は即ち^一で有る。除る事も減く事も出来ない^一で。爾して矢張り^一である。而して其が其ま^一『絶対唯一^一』である。

故に『(142857)』と云ふ數形は、『7654321』の數形に對照すれば。恰かも7の位に相當し。普通の『987654321』の數形に對照すれば9の位に相當す。ソコで乗けて出た數は『99999』と正直に絶頂位を示し。同時に元原的^一(+)が7で除らぬ前の^一即ち全數^一に對するは。一が九に對すると同じく。一九合せて10即ち一を成す通りに『99999』+(+)は亦^一を成す事を證す。

上來述べし數字上の原則^一一から九迄の數の根元及び各數の特性に關する原則と。元原的^一は絶對的^一一なりてふ發見とは。數學の範圍に於ける最深の定義と稱すべく。此は哲理觀やら宗教觀やら易學やらと切て離しても。猶其ソレ自身高尙なる而かも空理ならで數の實形上の大真理であらう。ア一勞せり。述るに勞せり。讀者も亦草臥れ給はむ。イザ是より著者独自の神物人感應實驗談に...

十四、如何にして予は、神靈を驗證し。日露戰の起伏本末を直指せし豫言を敢てしたる乎。

山川、草木、國土、風火、濤雷、一切の物は妙法の垂迹たること人事百般が妙法の垂迹たること理のみかは事に於て異ならず。等しく唯一實在の根原的靈威の顯現なり。故に人の意識し解諒すると否とに係はらず。一身一念に起る有らゆる意作動作は其ま、全宇宙に影響すること。譬へば此五尺の我一身に於て障子の棧の片削^ハが目に見へざる程の細刺^ハを指頭に留めても全身心が痛みに没するに異ならず。片削や何をか知らむ。而かも微妙なる圓融が諸法一切法の存在の根本事たるが故に。事に大小なく物に精靈なく。感應は無邊なり。

感應の局限せらるゝは私の信行の尙は未熟にして自ら局限すれば有る。我自ら意識せざるも感應は實在す。而して無量の感應が段々意識若しくは感悟の内に入り來るは。信行の積む程度に従つて之有る儀で。譬へば雪の富士山が朝ぼらけに紫金色を呈する麗はしさ姿も。東雲の段々進めば進むほど鮮かに見ゆる如く。我が自ら東雲と爲れば我自ら明かなるに従つて他の物も明かとなる。故に感應は神靈を驗證せしめ。神靈は感應を具象せしむ。彼此相即なり。反用互證なり。斯事や。著大なる證據を予有す。而して其をば今を發揮せまほしく思ふ。

著大なる證據とは。近世史上絶倫の重大事たりし日露兩帝國の開戰に對して、又其收束及び講和の時限に對して。予が天啓的靈驗を獲たる結果として。確然として之を豫知し。人生の意料、言數の企及し能はざる可き靈界の消息をば手に取る如く感得して。之をば公公然。我東洋日の出新聞紙上

に告白し。天下舉つて目撃する後日の事實を以て豫言の全中を證據立て。依りて以て神靈と感應との彼此相即、反用互證を。戦前、戦時、戦後の三箇年に亘りて。實際に顯揚し了せること是なり。蓋し腐蝕せる世道人心に活を入れむ也。幾多先愛の士が如何に叫ぶとも書くとも。善智にして而して不盡なる教育、風尚に没心せる近時の人には概ね無感覺に終るを免かれず。我等の文が誠に血性の所瀝。魂魄の印影なるにせよ。奈何せむ世の人は空談の如、或は尋常一様の作文のごと見做すなり。是に於てか。セメテは右の如き證據を目の前に突き付けて。是よと戒告しもせば。或は以て百中の二三子を復活せしめ得べき乎と。覺束なくも希望の縷に。十千萬言を懸くる我志も亦悲しからずとせず。然れども予は。精進波羅密の自行上。無限の勇氣と確信とを以て斯事を今日に發揮せねばならぬ。我一本の筆が一字を此に書く毎に。心靈界の重濁なる外皮が爲めに一枚づゝ剝がれ去る者と斷じて。著々茲に従事せねばならぬ。

證據には物證、人證の外に情況證據てふ者が在る。是より予が提供せむと欲する物證は。日刊紙上に掲載しつる豫言及び論議が其で。人證は即ち九州方面及び清韓各要地に少からざる知己を含むその當時の新聞講讀者全部が其である。而して情況證據はと云へば。予が神靈を實驗し、豫言を自任せる時に於ける。前後の心理的境遇的脈絡及び其れの外界との照應こそ其で。此分は讀む人の靈慧と心證とに俟ちて。完全なる眞實として許可さるべく。且つ感興神氣並せ至りて法華經の眞面目を印象せしめる厚量深味の者である。

斯くて予は。予と同じき他の一人を是に由りて喚起し得ば。爾る時は天地も亦纏て感動するの日有るを思ふ者である。二人心を同じふすれば其利きと金を斷つてふ古語は。限りて二人を指すに非ず。既に一人の心が他の一人に感ずる程ならば。开は感應の偉力を示す者にして。又の他の一人も然り。他の他の他の一人も亦然るが故に。第三者は即ち無量なり。而して开は千萬人力なれば也。

抑々予は。三十五歳の歳晩を生涯の新紀元とし。其時よりして我新聞業をば即是法華行也と立てた者である。普通に意義さるゝ營業本位の新聞業とは目的を異にして。立言の不朽を本願とし。僅かに社中同志の生存の資を此に取るに満足しつゝ。眇乎たる片紙を『精神の天地』として珍重した者である。本氣で物を言ひ、マツメに世を導く事が、文壇に衰廢すること甚しきに反して。我輩は斬れば血の出る五體と同視して。我日刊紙を守り立てた者である。君子の樞機、榮辱の發は一に此に在り。立言苟くも善ならば、千里の外も必ず之に隨ふ、と確信して。我田舎新聞の位置に滿腹の敬意を拂ふた者である。而して立言に伴ふ實行は『常住覺悟濟』であつた者である。而して這般の抱負及び實行は遂に大いに日露事件に發露して。内外識者を驚かすに至りた者である。

十七、八、九、二十歳の頭を通じて。多感なる青年が例に洩れず。天道の是非を疑ひ生死の有無に迷ひ。人間は何の爲めに世に生るゝ耶、存在は空物の假相ならず耶、魂魄は妄念の幻象ならず耶、榮辱

貧富も夢の中の夢にこそあれ、太虚に懸かる無数の星辰を觀すれば地球は塵、我は畢竟何物ぞ』など。海を望み月に對する毎に。我心機は茫々たる虚空に引込まれむとして。吁、嗟乎、宇宙終に不可解よ!!と感傷に禁へず。乃ち煩悶に壓迫されて喪心者の如く成行きし狀たるや。後年の華嚴瀧花形役者に劣るべくもあらず。而して如何にかして此齣結を解く術もやと。ニコライを訪ふて教義を尋ねも爲し。北島道龍坊に唯識の講義を聴いても見たなれど。孰れも渴者に活水を與へざりければ。遂に冷かし半分で法華宗を窺きつゝ。幸か不幸か。大丈夫須らく支那の王に爲るべし、てふ霸氣を鼓吹する所の水滸傳的豪傑の盟朋を得て。雲井龍雄の漢文的漢詩と、性得好める酒と。悪友に誘はれて覺えし色(呵々大笑)との餘蔭に倚りて。因て緩かに吾氣を轉換し得て。ドーセ死ぬなら一謀叛と言ふて浪人道に足を投じ。爾來の身世は拂亂又逆施。至親の顔を解く春風長へに吹き驟らで。佳人の泪を促す秋霜常に絶へず。果テは騎虎の勢イを韓山に馳せて。男一匹の役目だけは。大陸建國の先登者として僅かに相立てけるが。歸來且らく曠昔の同志に身を許して。文壇の俵屋玄蕃を氣取りしも。竟に伯爵哥、侯大哥哥に和し且つ同じて。以て成功の二六記者たるの菩提心を發するに忍びず。走りて聊か生活の天權を鎮西の一涯に貫き。紀元千九百年、我明治の三十三年。北清事變の起る二箇月前。九州日の出新聞てふ者を長崎に創建して。爾後社運隆々なりしが。權利義務の證文主義に御無沙汰なる因果として。遂に此本城は小人の姦計に因りて覆巢の厄を醸し。絞つて篩つて腐ち得たるは。死生相許す同志數輩の魂氣

而已。與に俱に奈落の底より脈々焉として芽を擡げて。辛うじて東洋日の出の二葉を吹きしは。明治三十五年正月元日。此際。初めて宿昔の身世を顧みれば。少小にして自ら揣らす『人生問題』の解決を志念し。傍ら分外の客氣に驅られて。伊藤山縣を小として新井白石、竹内式部を大とするを知り。文明時代の世風學風別しては明治官僚式の學風、世風、出世の方法一切を否認し。敢て之と逆行しつゝ。時に博浪沙の一撃を世道人心に下さむと意圖し。やがて當然の因果として。運命の縁を窮境に弱ませ。過大の勞を病軀に胃させ。ヨクまわ生きて居つたもの、事よと申さるゝ段は。誠に無調法の至り。去り乍ら『吾斯境を履ますんば此省覺無し』普通の處世方と徹頭徹尾相異なる人生の行路を執りつゝ。異數の境界は。亦異數の省覺を産み將て来るぞ面白き。溢も戻れば甘しの喩。此邊が浪人帳の消し處として考ふれば。東北に生れて東京に學び男盛りを九州で送れる。十四歳より今迄二十年間の無量の際會は。人情、世故、活機、苦酸の特別な味を嘗めしめて。何時とも知れず。特別な安心立命を我に凝成しけるよ。己れが支配されつる過去の靈的行路を案するに。『死のめ』を『活のめ』に轉じける大難の一再三四は。毎度、祖師日蓮の念せし法華經の極意を我に實驗せしめつる様覺ふるを我にして知ること不完全ながらも、日蓮を知らざりせば。恐らくは那の時に挫折したりたであらう。這の時に死せしやも測り難し。兎角に一結不潰の英靈の氣を危くも我に保留せしめし他方の隨一は。日蓮上人の啓示に由る妙法蓮華經也。我の哲理觀も人生觀も詮する所、日蓮の遺意ならざるは莫きとぞ覺

ふ。扱は。何時の間にか我は。日蓮の徒弟たるに負かざる信行を積みけらしと。頓に自己の安心立命を検して。初めて如是法華の行者よと自ら許可せしは。正に是れ東洋日の出創業準備最中のソノ際なりける予——以爲らく。這度の著るしき運命轉換の機に乗じて。過去をば生涯の前生紀と做し。今日よりは明かに法華行を専念して。以て日蓮上人の精神を政治上社會上の一切に應用し。追ては思想界心靈界に一大生面を拓成すべく盡瘁せむ。

謎的佛敎ならざる様に。普通用語を以て法華の神髓を説く一人だに日本に現はれなば。开は空前の大善事なり。されば言辭に僧臭無く字裏に道念活く所の我文は。俗中の俗なる新聞業をば其精神に於て法華行たらしめて。以て天下の人心を復活せしむるに庶幾しと。遂に東洋日の出初號に『吾道吾文』を宣し。是が三綱領を擧げて曰く。

▼義利同根

(因果の理が實形實行に廻れきが故に)

▼唯我獨尊

(天は人に追らしめむが爲めに人を生ぜり人は生存の權利有り而して物心融合己身は即妙法たるが故に)

▼知行一致

(理は世間に溢る面おも事に乏し其の修業は知る即ち行ふに在り信は知行合一の結果たるが故に)

此三箇條に由りて道を貫くを誓ふと。

實に此時を以て。予は前面ほどは明るふ成りし心地して。當面の政治上、社會上の出來事をば己が信行の對象と觀じ。爾後は自行化導共に。日に々々進境を領しぬ。

されば越えて一年有若干月。日露兩大帝國の滿韓係争問題に達著するや。如上の安心立命を有する我等は。自然的經行として。此問題を執りて。直ちに之を自社及び自己の肝要なる信行の對象と做し。深念周察。外交眼、軍事眼并せ行りて。この重大問題の解決を心に獲て而して事に發せむと。同志を擧つて精力を此唯一事に集注しつ。一人は鴨綠江上に赴きて。長白山邊より龍巖浦に亘る露人の動靜を偵ひ。一人は旅順、奉天、ハルビン、浦鹽に入りて。露國の氣勢を徴し。險を冒し難を踏みて。各自に參考材料を送致し。予は則ち及ぶ限りの算と精とを用ひ。大局小局を綜合して。解決の答案に萬にも過ち莫からむを期し。竟に社中同志の聞見及び知能の極力を代表する答案に達しぬ。實に是れ書く爲めの答案ならで行ふ爲めの決議なりける也。

答案は如何の者なりしぞ。曰く。

(1)。露西亞は撤兵條約を履行するの意思無し。四月八日の第二期撤兵は其一部を韓國疆上に移動したるに過ぎず。

(2)。マドロフ大佐は三國史的怪雄なり。馬賊を操縦すること手の指を使ふが如し。彼れ夜眠僅かに二時間。馬を驅つて奔馳しつゝ。士に接し事を視ること旬餘。精力絶倫。

(3)。兵を送還する時には樂隊を盛んにして兵數の大を觀めし。入込ましめる時には伍々三々。ナナル及びハルビンは臨戦地境の概有り。

- (4) 南北滿洲を鎖閉して商工業及び農産の本據と爲し。西比利亞鐵道及び東清鐵道の運賃を減法に引下げて輸出を獎勵し。自國及び歐洲の貨物は露人の手を経るに非ざれば支那に入る能はざらしめ。太西洋、太平洋よりする貿易船を立往生せしむ。是れ露の呑世界的經濟政策。
- (5) 日本の大陸發展を根絶せしめるを必要とす。故に朝鮮は決して日本に與へじ。
- (6) 日韓海峽は右の爲めに極力争ふ。故に南韓に於ける日本の軍事的施設は露の肯かざる所なり。然れば滿韓交換など云ふ註文は。迂腐の骨頂なり。
- (7) 滿韓一東の掩有より外に。露の立場無し。日本は又滿韓一東の見地より對抗する外に活路無し。故に日本の内心に協商を期待する談判は。露の百方擲論して。出來限り遷延政策を執り。以て外交上に全勝せむと欲す。
- (8) フレキシエーフ等は海軍を攻撃主力として胸算しつゝ在り。彼の太平洋艦隊が日を追ふて本國より到達し勢力を増したる上は。文句不用、前の遼東還附の時の同轍を以て日本の懦弱宰相を屈服せしめ得可しと爲す。
- (9) ロシヤはルーブル政策を擴張す。一日を緩ふすれば一日だけ彼れの資力は支那人間の信用に準じて増進す。夫れ竟に紙幣を以て北京の主人たるに至らむ。彼れの財政難を當て込みて開戦不可能と謂ふは。パリ、紐育の町人共の下司了見のみ。權に敵に依るはルーブル紙幣の擴張にして足れり。
- (10) 獨逸人は露を煽動す。露獨間には北清兩分の密約成れり。獨人の東洋各港及び日本に流れ込める間牒は幾百十。日本派の袁世凱油断せば暗殺されむ。
- (11) 旅順要塞の築造は言語道断。鳩灣方面に些少の不備の點あるのみ。其とて數月を出でずして完全せむ。然らむ折は到底難攻不落。
- (12) 露の一將は長崎出身の愛妾に意衷を洩して曰く。明年の四月に至らざれば戦争は爲さぬと。

以上の情實を綜合して。日本刻下の國是を考ふるに。神功皇后以來の遺業を拋棄し。支那全部を他に委し。永劫、絶海に偏在して武力上、經濟上並せて立すくみ。精力の萎縮が徐々の死滅を醸す迄傍觀するに甘んずればイヤ知らず。苟くも活ける血の通ふ國民たる限りは。此場合は百言不用。一にも曰く開戦。二にも曰く開戦。那家生民の唯一の活路は。只だ存亡を一舉に賭する決断在る而已。故に政府にして之を執行し得ずんば。無理往生にも開戦の機を啓かざる可からず。是を結論とす。

即ち根據有り氣魄有る熱烈たる主戰論は。我社の最期まで奉す可き神聖なる主題と定り了れり。是を以て予は。全身心が主戰論の化身たる如くに行した。主戰論に伴ふ思念を夢寐の間にも含せず百度に近き酷暑中にも。氷魂を頭に措いて几に對し。或は社説に或は記事に日日、四五段の筆を連續す

る類にて。行住座臥共に氣鋒森然家人すら近よるを憚かるに至りた。

シカシ。當時の我等が軍人間や外交階級に如何なる刺撃を與へた乎、一百七十餘日の筆端が如何に風霜を帯びし乎等の邊は。此に自説するの意も必要も無い。神靈實驗の段は此前途に横はるので有る。以上は只だ此前途に横はる者に接觸する因縁を叙したのである。當時の予が位置の其に漸むことが突梯ならざる所以。を示す序辭である。如何に言々火の如かりしとは云へ。開戰論の主張は人間の火である。權威や限られたり。地獄の火を人間の火に較ぶれば、人間の火は雪の如しと。祖師云へり。火の柱は地獄の火ならでは。俗世に火の洗禮を與へ得じ。予の所要は此處の以下に在り。

意力智力の極を盡して。涙墨血筆、百七十餘日に及べども。而かも硬質性の閣臣が神經は靈動せず。衆論は戯るるに似て。群疑は徒らに漲きり。朝野の儒氣は將に西海の孤憤子を弄殺せむとす。最早筆の上の萬事は休せり矣。ア如何にせむ。さて何とせまじや。此の上は身を火にして。都門百萬の瓦棟に火の柱を建る外に途莫からむ歟。さるにても諸天善神は既に此の國を去りつるか。九重の雲は今日此頃何等の狀ぞ。我念力は到底、同胞にだも感應せざる乎。さり逆は靈界融一の素信も泡歟。さり乍ら日露不兩立の因縁は是くの如く積重しつるに。一器の水火いかで事無くして已まむ。ト云へ。見渡す處が前の日清戰前に於ける川上操六が如き英靈漢子の一個だも覺束なし。吾夫れ竟に火の柱たらざるも人柱たるを免かれざらむ歟……と。思念は千々、腸は寸斷。早く既に地獄の火中に深没す。

斯くて身は地獄の火につままれて後の呼吸よ。初めて火の柱を靈境に吹嘘して。俗世を根軸にまで洗ふ者は箇中の呼吸よ。人間としての主張が絶望されりて。神靈の告示を請ふは斯くての後よ。斯くての後が即ち神靈の驗證よ。絶對無限の權威よ!!

* * * * *

雪華は白浪に撲たれて凄愈々凄に。古劍は寒潭に落ちて精更に立なり。黄金、火に入るや質却つて美を加へ。鋼鐵挫斷さるゝの時、氣岸悉く霜を成す。箇中の風神を味はひ將ち來りて。之を法華行者の、險關重嶂を閲みし盡して、更に無路の路を鳥道に討ぬるの處。身力、前後に谷まり心境、高卑に窮まるの時。神氣却つて霜の如く列に、倏乎として無礙の大路を白雲に開く所以に對照せよ。煩悶に對象が強烈なればなるほど、我行力は鮮活なるを致し。遭逢せる障礙が重大なるに準じて。爾後の通利は高曠なり。

咄。咄。咄。日本建國以來の最重大なる障礙は。吾を弄びて無上に強烈なる煩悶を賦與し。却つて予をして無邊の靈路を事上に獲るの因縁に住せしめれるを。爾前には爾く感悟せざりし吾の鈍根よ。日は經たり。時は迫れり。何の方角からドー考へても開戰決行に及ばねばならぬと。幾度も幾日も繰返し々々して己が氣を安めて見ても。又候荒驟夫が讓歩しさうの廟議が協商必成の顔色ぢやのと電報や情報が來ては我を揶揄し我は目より入りし見込と耳に動く否認との水火の闘を渾身に醸し。爲に齒悉

く搖ぎ腦底顛倒する乎と疑ふ折さへ絶へ遣らず。殆んど我信念の果敢なきを悲みて。神物人融一の素信
 茲に破碎し了らむ乎と自ら危みしぞ凡夫の真情なれや。遂に十一月の初旬に及びて。最早協商断絶の
 必然を證する徴候が顯はれねばならずと煩悶する極點の頃なりき。予は崎陽の旗亭迎陽亭に招かれ。
 合客八名と茶客の席に連なり。連りに飲みて十二時に至りしが。杯數徒らに重なりて醉魔太だ振はず。
 其も其筈。念頭偏へに開戦か不開戦か？の千番一番に封じられて。我は器械的に酒を煽り居りける也。
 然るに恰かも此時。十二時の時計鳴りて我は當夜最終の杯を舉げむと身を正せし此時。酒の天地は靈
 の天地に反覆する秘機、宇宙の玄々裏より湧けり。
 嗚呼忘れもせし忘れ得もならじ。

此瞬間に耳を掠むるは時ならぬ鶏の鳴聲！！

無意識に聴取りつゝ。癖のまゝにグイと呑む。飲む間もあらず。續いて起るコックケコーコーは正しく
 三段の鶏鳴。

傳説若しくは風習の我胸中を刺戟して。半夜の鶏鳴は壯士枕を蹴て起つ吉兆と確かと意ひし耶。非ず
 歟。我と定かならぬながらに我手元を打見遣れば。コは如何に？我捧げしは。迎陽亭常用の迎陽を意義
 する赤鶏の猪口にぞある。其と初めて心に印象せし時も時。屋を隔てし誰家かの鶏は更に一聲力勁き
 宵鳴を加へ。予をして何故とも知らず遽然として胴震ひを起さしめた。而して見渡せば看杯の客が卓

に置し者悉く是れ我のと同じく。赤鶏盡むとするの概あり。揃ひも揃ふてツツク九個の赤鶏……。
 ウー、ムー天心に徹する今の鶏鳴。坐ながらに此鶏群。占めた！！鶏林必ず事の端たらむ……。

* * * * *

土製の猪口が何を知らず。

鶏が寝ぼけて宵鳴せし連。其は只だ其れ丈の事で。日露談判の何たる乎を鶏が關かり知る理は無し。
 朝鮮をば鶏林と呼び習はせし連。赤鶏の畫さある猪口が駢びし姿を朝鮮と見立てるのは。只だ此方の
 心柄である。そんな筆法で行く時は。飲みし酒は酉の水だから。其は朝鮮の海から戦争が破裂するのだ
 と。取りても取り得るが。去りとは一二個中の場合を全部の場合と同視する不理論たるを免かれず。つ
 まり勝手の牽強附會ぢや。

去り乍ら。右は心に屬する比量分別の範圍内に於て捌く理上の談で。靈魂にまで進み入りて事理自照の
 境を説明するのとは本末共に道を異にして居る。

我自ら私の靈魂を感得して。靈魂が妙法を自照する事境に居る時は。猪口の如き非常の物も。鶏の如
 き有情の動物も。其は其まゝ我靈魂の顯現で。鶏が辯才無礙なる人間の如く口を利き。猪口が一つい
 活きて。歩行して。爾して物を言ひ居ると同様で有る。彼等は。今酒飲み居りし我心身と等しく。
 宇宙大の生命の片割で有て。靈淨々地に住したのである。